

〈資料紹介〉

在米日本人初期移民史 (下)

—— 鷺津尺魔『吾輩の米國生活』——

The early history of Japanese immigrants in the United States (2):  
Washizu Shakuma, Wagahai no beikoku seikatsu

片 山 一 義

(前号に続く)

(七七)

賣笑婦の起源

明治十八九年頃、船乗り稼業の日本人は十人、二十人と團體的に桑港に上陸した。この當時の渡航者は旅券の必要が無かった。船員でも旅行者でも無旅券でずん／＼上陸が出来た。最も疑はるべき獨身婦人でも自由に上陸ができたのであった。

明治十九年春、ヂャッキ川口が水夫宿をクレアーベニューに開業した頃、川口内縁の妻の妹にお花といふのがいた。この婦人は水夫清水某の内縁の妻であった。

(註) この頃水夫の内縁の妻なるものは殆ど賣笑婦であった。

當時正式の妻といへども、教會に屬せざるものは多く賣笑婦であった。眞に世帯を持ち物堅い生活をしている者は指を屈するに足らなかった。

お花は曾てホンコンで賣笑の経験があり、清水は同所よりお花を桑港につれ來りたるものであった。そこで桑港は女の盛るところだと見抜いた清水は、ホンコン、シンガポール等に淪落している女共を狩あつめて桑港に連れて來た。ヂャッキ川口は同類者としてこの運動を援けた。

清水が桑港に連れて來た婦人は最初都合七名であった。ある者は香港より桑港に直航し、ある者は歐羅巴をまわつて來たら

しい。

そこで桑港ボルデン・ブレース（カネー街とモンガモリーの中間にある小街）に一家を借り、娘たちに元祿振袖を着せて店にならべた。あたかも東京吉原の風をそのまゝ移したものであった。男の多い女の少い桑港では非常の評判となつて、店頭には遊治郎が蟻の如く集まつたといふ話である。

此時代から日本婦人は多數桑港につめかけて、デュポント街、セント・メリー（今はセント・メリ公園になつた）クエンシー街、ブッシュ街、モートン街、これ等の各街にわたりて、賣笑婦が澤山居つた。日本人賣笑婦は明治二十七年頃百五十人ぐらい居たと思ふ。而して西洋人は千人以上もいた。

私の渡米した明治二十七年頃デュボン街近邊に徘徊すると髯のはへた西洋のクリスチャンが「あなたはクリストを信じますか」などと口癖のやうにいふたものである。

我々はクリストの偉大を信じているが、同時に性慾の奴隷であつた。クリストが如何なる態度で性慾に對したかは不明である。しかし、クリストが人間である以上性慾を知らぬ筈はない。廢娼牧師等が女郎屋の前に立ちて「あなたはクリストを信じますか」といふのは、寧ろ存娼運動であるやうに思はれ頗る滑稽に感じた。元々廢娼運動とクリスト教とは何等の交渉がない筈である。丁度禁酒運動とクリスト教とが没交渉であるが如し。

日本人が團體をもつ場合には何かの引かゝりをこさへて運動

するのが例になつてゐる。古いところで廢娼運動、新しいところで賭博撲滅運動である。而して何れも効を奏していない。彼等は社會心理を知らずにお座なりに運動をしているのだ。その運動が効果ありや否やを研究するに及ばず、月並の題目をとらへて運動すれば飯のくひはぐれがないのだ。運動費を申し付かつた地方の人々はイイ面の皮だ。

#### △妻帯者の増加

教會の連中が廢娼運動を月並的にするに拘らず賣笑婦はズン／＼増加した。明治三十年から三十二年にかけて、日本人賣笑婦は各地に擴かつて行つた。而してこれに反抗する一勢力は妻帯者の増加であつた。

明治三十三年デュポント街にそば屋を開業せる奈波某、友人の紹介によりて日本より妻女を迎へた。これが寫眞結婚の嚆矢である。次いで同年牛島謹爾日本に到り妻を娶り、堂本譽之進また日本に到りて妻帯す。

明治三十五年、石丸喜一、富川良美、寫眞結婚をもつて妻女を迎へ、小田柿捨次郎、御酒本徳三相前後して妻を迎ふ。寫眞結婚の風大に振ふ。

序ながら私の妻のことを一言してをく。彼の女は明治三十四年の渡米、明治三十五年十月私と結婚し翌年一女を産み、引續き兒を産むこと六人、大概是年兒にして難渋を極む。産兒制限のため日本に歸り、をること六年、今や産兒の能力盡きたり。

私の田園生活及兒澤山の事情は追って記録する。

「日米」No.8991 November 12, 1924)

(七八)

### 廢娼運動の事

一日美以教會に山田小梅嬢を見た。この婦人は明治二十八年頃の渡米であるが、渡米以來、電流の如く我々青年間の評判に上った。そして學問のある才媛として有名なものであった。私が小梅嬢と相知ったのは、私が誹謗罪に問はれて入獄する少し前だと記憶する。(誹謗罪事件は後に詳記する)

此當時及びその以前から日本人社會には廢娼運動が熾に企てられた。運動の中心人物は福音會、美以教會に屬する青年等であつた。其運動は餘り効果がなかつたやうであるが、彼等は數年間この運動を續けた。

私の渡米する以前に、福音會長たりし安孫子久太郎氏、永井元氏等も可なり熱心にこの運動をされたそうである。安孫子君、後に私に語つていふ。

「明治二十二年ごろと覺ゆ、我等は廢娼運動を徹底せしむるため某辨護士を連れて、ポリスコートの判事ロー氏に賣笑婦拘引狀を求めたことがあつた。このとき、判事の云はるゝには『君等は賣笑婦を檢舉すれば淫賣を絶滅せしむる確信がある乎。もしその確信があるならば拘引狀をだすが、左もなければ徒勞に

歸すであらう。我が警察署では尙なすべきことが澤山あるから賣笑婦征伐に全力を傾ける譯には行かない』

そこで我々は戸別訪問をして廢娼を説いた。ある日、砂本傳道師と共に一人の賣笑婦を訪問してその營業をやめ正業に入るべきを説いた。此婦人は我々の話を傾聴していふやう『斯様な商賣をすることは、妾も好まない、どうかやめたいと思ふのであります。國元には老母と妹とがあつて、妾の仕送りで養はねばならぬのです。そして妾は其必要の金を得るの術を知りません。若あなた方が、妾に他で所用の金をえられる道を援けて下さるならば何時でもこんな營業はやめます』

我等は淫賣の不道德であることを知つたのであつたが、彼女らに向つて生活の道を與ふることを知らなかつた。「いつでもやめます。しかし生活する方法を教へて下さい」には道の廢娼論者も閉口したのであつた。それ以後、廢娼運動から手を引いた。

○ ○

山田小梅嬢は女性だけにこの運動には熱心であつた。一日私は美以教會に同嬢を訪問すると、嬢は感興に輝いた顔で私に向つて話さるゝ。

「ねえ、鷺津さん、桑港に在る醜窟をみんな追拂つてしまひませうじゃありませんか。あなた、どうか廢娼運動に力をかけて下さいな。あなたがた新聞記者と私共教會の連中とが力を合わせたら、すぐに撲滅して仕舞ひますわ」

「イヤ私は左様には信じません。第一私共の如き獨身者は賣笑婦の必要があるのです。この新開地にあゝした女性がなくなったら、私共獨身者の生活は干からびてしまひます。淫賣の善惡可否のごときは世間で勝手に論ずるでしょう。併し私の性慾は世間で論ずる倫理と別の方向に進まんとしているのです。この性慾を制御する力のない私共が口に廢娼を唱ふることは偽善であります」

「あなただけ、そんなことを考へていらつしやるんでしょう」「イヤ、そうぢやありません。教會にある青年が一番、私と同じ考へを持っているのです。あなたは、あなたの教會のメンバアが性に關してどんな方向を採っているかをしらないでせう。私からいへると、教會大部分の獨身者は賣笑婦の許に往來しそのおなだけで生きているのです」

小梅嬢は驚いたやうな風であつた。そして絶望的に

「ぢや、どうすればよいのですか」

「獨身者に妻君をもたしむることです。教會がこの運動に全力を注ぐのです。そして私共新聞記者もそれを奨励することです。廢娼運動の徹底はこれ以外に道がありません」

小梅嬢は其後私に向つて廢娼のことは説かなかつた。彼女はその後某神學士と結婚した。實に純潔な人であつた。しかし社會人の心理を解していなかつた善良なるクリスチアンであつた。

多くのクリスチアンが其傳道に成功しないのは、バイブルを

棒讀みにして口釋するからである。人間を説くには人間の心を通じて説くべきである。死せる經典では人間を救へない。

人間の心持をしるには長い間の修業がいる。米國の神學校は三四年で卒業するが、人間の大學は死ぬまでの修業である。わが熱心なる兄弟姉妹が廢娼運動や賭博撲滅運動に成功せぬのは、人間學に徹底せぬからであつた。

〔日米〕No. 8982 November 13, 1924)

## （七九）

### 女の世界と男の世界

私が渡米した頃、桑港には女が稀であつた。十七八から三十分後の男が何百人も住んでいる桑港日本人社會に女といふものは僅々指を屈するに過ぎない時代であつた。この當時、私の知る正業の女性には

東ヶ崎菊松夫人 松丸弦吉夫人

赤羽根忠右衛門夫人

西本長太郎夫人 高橋七五郎夫人

加藤誠六夫人 萩原眞夫人

小川多吉夫人 鍋倉直夫人

神谷領事夫人 黒澤醫師夫人

一葉夫人 山田小梅

大黒千代嬢 水藤夫人



清元延喜代 水藤ユキ子嬢

竹本梅壽 花柳男子

お竹婆さん 柳澤ゆな子

田中鶴吉夫人 土岐一女嬢

竹山祐嗣夫人 金鎧婆さん

お菊さん お末さん

右の外、正業者の妻君、及獨身者婦人はあつたかもしれないが十人とは居らなかつたと思はれる。其他はすべて賣笑婦に屬するものであつた。

明治二十七年頃から三十年頃にかけて、桑港には百五十名ほどの日本人賣笑婦があつた。是れ等の賣笑婦は、モートン街、ブッシュ街とグラント・アベニューの角デュボン街(今のグラント・アベニュー)セントメリー街、クインシー・アベニュー等、約七八丁が賣笑婦の區域で、此處には世界各國の賣笑婦が妍を競ふていたのであつた。日本婦人は白人及支那人相手であつて、日本青年の相手ではなかつた。若しあやまつて白人及び支那人相手の日本婦人の處に訪問する時は、大々的ケンツクを食はされて蹴飛ばされたものである。

そこで多くの日本人青年は、白人の賣笑婦の許を訪問した。

○ ○

日本婦人が日本青年の相手として笑ひを賣つたのは明治二十七年の秋、ブッシュ街(カネー街とグラント・アベニューの間)に花月樓といふのが始のである。是よりパイン街、スタクトン

街等に同業者が現れだし、明治三十四年頃には、日本移民の増加するにつれて十四軒ほどになつた。事の序でに桑港震災前にありし賣笑婦を記録してみると。

いろは、濱の家、紫、ことぶき、しの、め、東、清川

(以上デュボン街)

富貴樓、菊の家、櫻屋、若松、藤の家、花の家、荒玉

(以上パイン街)

右の賣笑屋では一軒三人乃至五人位の美形がいたのであるから合計六十人くらいあつたと思はれる。

○ ○

女の少い社會において物堅い女性として生活するのは大なる危険であつた。世に狼連といふ言葉は女の周圍に集まる男性に名づくる言葉であるが、特に女性の少い社會にはこの狼連が其周圍を取りまく。狼連は狼連同志でいがみ合ふその状態たかも「さかり」のついた犬が女犬の周圍に集まるすがたである。但し、人類は人類の體面を保つだけで、其心理状態は犬とたいした異りはないやうである。

○ ○

移民地で女の尠い時代にはその社會の安寧幸福を保つことが容易でない。この故に新開地の警察は賣笑婦の保護に努めたものである。世界の植民史が賣笑婦の事情を閑却するときは、史實の半分を抹殺した譯になる。

日本人が米國に移住したのは、植民的精神で移住したのでな

かった。或る者は學業を修めんため、或る者は一時出稼ぎの考へで米國に渡つたのであつた。而して骨を米國の山河に埋める覺悟で來たものは一人もなかつたのであつた。既に骨を米土に埋めるつもりで渡つたのでないから獨身者が渡つた。女は米國で學問して日本に歸つてよい婿さんを迎へやうとし、男は米國に學んでよい嫁さんを迎へやうとしたのであつた。この學業的出稼ぎ的移民時代に、その移民地に女のあることは神より與へられたる奇蹟である同時に恩寵である。

此恩寵に感謝したものでないが吾輩は時々女の許に訪問した。最初に訪問したのが、ドクトル土岐政次郎君の令嬢一女君であつた。

この娘さんは和歌も詠ずる。琴も弾く、チャーミングの眼をもてる十七八歳の女であつた。友人岡田溪水是まづこれを訪問して和歌を戦はした。水井東眼は平素の蠻カラにも似ず綺麗なネクタイをかけて訪問した。其他名もしれぬ狼連が土岐ドクターの家に集まつた。

此娘は後に悲惨の運命に陥つた。其次第は今茲に記録することを遠慮する。若い娘が此時代に渡米した以上、大概終りを全ふしないことだけを一言して置く。

「日米」No. 8993 November 14, 1924

（八十）

情死のさまぐ

クリスチアンの諸君方が偽善的に廢娼論を唱へ給ふ間に、可なり多くの在米同胞は戀の爲めに死んだ。私の知れる範圍に於ても、明治三十年前後に戀のた爲めに死んだのが可なり多い。

戀の爲めに死んだ者はその大部分が男であつた。女にして戀の爲めに自發的に死んだのは一人もない。たとへば明治三十年において理髪店を開業せる筒尾、齒科醫の大内金太、池田某の如きは或はピストル或はモルヒネにて往生を遂げたが其起りはすべて女であつた。女がわるいのでない、唯男と女との事情關係が男に有利でなかつたために男が煩悶して自殺したのであつた。故にその相手たる女を見れば、恰も高見の見物然たる態度で、死んだ野郎は馬鹿の野郎のやうな態度で濟まして御座る。それは當然の態度である。昔の人が、「大蛇見るとも女人を見るな」と戒められたことを思ひ出して如何にもとうなづかる、のである。私は本稿において斯様な哲學に觸れるつもりでなかつた。たゞ歴史的事情を述ぶるに當たり、たま／＼こんなことを思ひ出して事の序でに書くまである。婦人諸君、願はくば私をして徒らに女を呪ふものとする勿れ。

○ ○

私が實見した情死中にはその人が驚くべき安房（純粹）であつたことを痛感したのであります。第一が大内金太（本名）の

自殺です。

此人は日本に於て名門の家に生まれ、明治二十三年頃に渡米し、小學校から中學校に通ひ、齒科専門を修めつゝ、あった人だが、其頃桑港に在りしお花といふ賣笑婦に引かゝり、同女に捨られたのを悲しんで自殺したと傳へられている。

(註) お花は仇名を裏天お花と稱し、鼻が低いから天狗の反對に裏天と稱せられし程のスベタ女郎であつたが大内君は此女にぞつこん惚てしまふた。お花は大内などは屁とも思っていない。そこで他に澤山の男をもつた。大内はやきもきして遂にモルヒネ往生を遂げた。女は平氣であつた。

○ ○

第二が立田君(假名)の自殺である。

此人は明治二十六年頃の渡米でポートランド及び桑港に住し、明治三十三年シアトルに至り、同地の日本賣笑婦を引連れ、桑港に來りしが、女が心機一轉して彼を顧みざるを知り、一日情婦を訪ふてその面前に於て石炭酸を仰ぎ自殺した。女は平氣であつた。

第三、柳川君(假名)の自殺である。此人は日本中流の家に生まれ、明治三十年頃渡米し小中學校に入り和歌文學の素養ある人であつた。ある時ネバダ州リノ市に到り、同市の賣笑婦お愛(仇名を白狐のお愛といふ小形の婦人にして頗る吸引力に富める女性)に戀し、お愛が引く手あまたなるに嫉妬して、ピストルをお愛の胸に打込み、一年の懲役の後、ポートランドに到

り自殺す。

(註) 白狐のお愛は、私の尊敬する女性の一人であつた。彼女は賣笑婦であつた。併し、私は彼女を汽車中に見、私の信ずる人生觀を説き、彼女の女の共鳴を得たことがあつた。私は彼女の女が賣笑婦なるにも拘らず、性交の關係をもたなかつた。若し私が彼女の女と性交關係をもつたならば彼女の女は米國に於てより早く救はれたかも知れない。

彼女の女は明治三十九年桑港震災の年に歸朝した。涙もろい可憐の少女は、私と汽車の中で懇意になつてから、始終私の事を思っているらしい。

彼女の女は、明治四十年に長崎から私に手紙をくれた。

「夢のやうなアメリカで一番心に残っている人はあなたです。在米七年間、ほとんど三千人に近い男と枕をならべ、心も身もすさみはて、今長崎にて基督教會に救はれをり候。一夜も共にあかせしことなき高德のあなたを忘れず、日々にし昔を思ひ出し申候。

人間の戀は肉にてはこれなく候ことを悟りかけ候。

妾のために墮落なされし方、けがなされし方、思つて下さつた方、いづれも戀しく候。いま一度、ネバダの高原で、あなたのお話の天照皇太神を我が身に體現して見たく候。そしてあなたを妾の皇祖として教をいたゞきたく候。賢。

大正二年八月長崎にて愛子より

〔日米〕 No. 8994 November 15, 1924

## （八一）

## 賣笑婦盛衰論及

## 日支人妻帯者比率

社會改良家の最も注意すべきことはその社會に於ける男女の比率である。男の多い新開地の社會には賣笑婦の数が随つて多い。男女の数がや、平均に保たるゝに随つて賣笑婦は影をかくして來る。

合衆國政府の調査に基き、在米日支人男女の比率を擧げてみると凡そ左の數字を示している。

▲左表は千九百年以降、女百人に對し、男子の比較數を示したものである。

年代	支那人	日本人
一九〇〇	一、八八七	二、三七〇
一九一〇	一、四三〇	六九七
一九二〇	六九三	一九〇

即ち千九百年（明治三十三年）頃には在米日本人は女一人につき男二十三人七分割合、支那人は女一人につき男十八人八分七厘の割合であつた。

然るに千九百十年（明治四十三年）になると日本人は女一人につき男七人ほどとなり、支那人は女一人につき男十四人三分といふ反比例を示し最近千九百二十年（大正九年）になると、日本人は女一人に對し男一人九分で、在留同胞の半數以上が妻

帯者となつてゐる勘定だ。而して支那人の方では尙女一人に對し男七人の割合である。

千九百六年（明治三十九年）桑港震災後から、日本人賣笑婦の減じたのは地震のために急減したのでなく、妻帯者が増加したからである。私は今茲に妻帯者の増加と共に賣笑婦の退減したる的確の統計を擧げることが出来ないが、男女の数が平均を保つに随つて賣笑婦の數の減ずるのは最早爭ふべからざる事實である。

煩はしいやうであるが、過去三十餘年來、日支人在米數を比較して見ると左の如くである。此數字は無論婦人小兒をも含める總數である。

年代	支那人	日本人
一八九〇	一〇七、四八八	二、〇三九
一九〇〇	八九、九六三	二四、三二六
一九一〇	七一、五三一	七二、一五九
一九二〇	六一、六八六	一一〇、九一五

私の渡米せる千八百九十四年（明治廿七年）ごろ桑港にありし正業婦人は前節に述べし如く三四十名位であつたが、十年後の千九百四年頃にはその數が増加し北加州に於て約二百五十名以上に達した。一九〇三年（明治卅六年）桑港慈惠會は北加あらゆる方面に婦人會員を求めたことがあるが、此時の婦人會員總數百二十三名であつた。

○ ○

妻帯者の数が増加するにつれ、賣笑婦の数漸減したれど、明治三十八年ごろ最も多く移民の集来した時代には、未だ男女の比例が懸隔していた、めに容易に賣笑婦の数が減じなかった。しかも更に料理屋が勃興し、此料理屋には婦人の給仕が増加した。

多くの料亭に働ける給仕女は人妻であった。獨身婦人は殆どなかった。併し其数は夥しいもので随って多くの艶聞を流した。

明治三十八、九年頃の料理屋は大略左の如き数であった。

桑港	二十七
王府	二
櫻府	六
サンノゼ	七
ワッソンビル	三
フレスノ	十六
羅府	十四
シヤトル	十八
ポートランド	六

その他地方に六軒の料理屋があった。都合百〇五軒の勘定となる。假に一軒の料理屋に平均三人づつの給仕女がいたとすれば三百十五人の多數である。然し事實に於て或る料理屋には三人以上も居る場合があるから以上の数より多く給仕女が居ったかも知れない(岡田溪水氏著「米國事情」及日米年鑑第二に據

る)。

この當時の記録によれば、桑港には舞子藝妓が四名あった。客の招聘によつて「こん晩はあり…」など、箱屋をつれて座敷に通る。あたかも新橋や赤阪の縮圖であった。私の持論によれば、現今の料理屋に女を多く置くのは主人も迷惑、客も迷惑である。これは分業にしたほうが便利である。その理想的形式は曾て「羅府日米」紙上「羅府繁昌記」に述ぶるが如し。

〔日米〕No.8995 November 16, 1924)

## (八二)

### 白婦人と日本人との

#### 戀及其悲劇……(一)

女の少い社會において壯健な男が希望する性慾は、たとへば河流の如きものである。流れ／＼て大海に入らんとする天然の力、その力は尊い力である。然るに世の道德と法律とはこの滔々たる力を遮らんとする。此處に人生の悲劇が生れてくる。

悲劇は詩だ。人の世の戀は悲劇だ。而して人生は戀だ。かく觀する時、サンクインテン若しくはフォルソムの監獄につながれている多くの囚人は戯曲中の詩人である。私はこの事情を明せんために、同胞小谷勝良君が白婦人に對する戀の悲劇を記して見たい。

勝良君は一個純粹なる日本青年であつた。而して此人は白人

女繪師ヘレン・スミス嬢を戀のために殺した。其イキサツは小説以上の小説であつた。

「人殺し」の勝良君は果して世間にいふ恐るべき殺人者なる乎。彼れは善人乎。悪人乎。此消息につきて私は評論するを好まない。私は今より四年前、フォルソムの収治監に勝良君を訪ふた。而して一見愛すべき壯年なることを感じたのであつた。

○ ○

如何なる場合に於ても女は男に對して有利の地位に立つ。男は但し書なしに女に對して寛容である。男が若し女に對して眞剣に自己を表白するには死を賭して女に向ふのみである。

○ ○

この事件に就き、明透の記録を残されし人は、平岡駒太郎君である。氏は大正七年三月、雑誌『東方時論』に於て、實に不朽の名文を書いていられる。私は此事件を観察するに當つて氏と同じき方向を探るが故に特に氏の一文を抄出するの光榮をもつ。

#### △カーメルの残月

其時勝良は額の汗をふきながら、腰を伸ばしてホット一息した。無論殺人罪を犯したとは思はず、スミス嬢がもう死んだのだといふ意識も明瞭ではない。唯爲さねばならぬ仕事を仕舞つたやうな氣がして更に再びホット吐息をした。二十日近い月は紺碧の海の涯に落ちかかつて、もう夜明けには間がないらしい。先づ場所から説明せねばならぬ。處は中部加州の太平洋海

岸で、沿岸随一の景勝と稱せらるゝカーメル・バイ・ゼ・シイの波打際、時は大正三年（一九一四年）八月十三日の佛曉前である。カーメル・バイ・ゼ・シイとは如何にも冗々しい地名だが、この地脚下にモントレイ湾の絶景を見下し、一帯の丘陵屏風の如く連らなり、太平洋の白波蒼波を背後にして、駱駝蹲れる如き山の形なので、無風流な米國人はそのまゝ、實寫的にカーメル・バイ・ゼ・シイ（海を背にせる駱駝）と命名したが、平生は單にカーメルとのみ呼び馴らされている。其カーメルの山脈の海岸で、日本青年小谷勝良なる者が今しも米人女流畫家スミス嬢を縊り殺し砂洲の中にその死骸を埋終つた處である。

カーメルは冬寒からず、夏暑からず、且山紫水明の勝地なため加州最初の別荘地として開拓され、年中避暑避寒の客を絶たず、殊に藝術的氣分に富んだ不良男女の一團は、此地を根據としてボヘミアン流の生活を営み、將に現あるべき世界の新藝術は、この地を搖籃として生まれのだと自惚ている。

由來東洋の耽溺者流は竹林七賢の昔から、幾分超越と、解脱と、飄逸の風格を有していたが、徹頭徹尾に執して肉を離れ得ぬ歐米の似非藝術家は、刺戟を貪り、官能と感覺を消磨して、概ね變態性慾の邪道に陥り、野獸にもあるまじき奇々怪々の生活を営むやうになる。美人畫家ヘレン・スミス嬢は此藝術團の一員で、當時三十五歳、性慾の最も旺盛な時期、日本青年小谷勝良は數年來此のカーメルの白人家庭に家内労働を勤めていたもので、遊蕩兒ドリヤン・グレーを東洋的に柔和にした様な、



當時廿七歳眉目清秀の美青年である。而して此兩人は三四年前から親友の間柄であつた。

その夜は加州海岸地方に特有な重苦しい蒸し暑い晩で、逆上性のものは頭痛か耳鳴りに苦しまねばならぬ晩であつた。八時過ぎスミス嬢の部屋をたゝいた小谷は、椅子に腰もおろさず聲高な激論を始めたが、處女よりも柔和な小谷として、生まれて以來全く経験のない激昂であつた。

聲が餘り高くないので、スミス嬢は近所隣りへの氣兼ねもあつたと見え、「散歩しながら話ませうよね」とてなだめすかし乍ら小谷を立たして海岸に出た。嬢は部屋を出るときテールの上から二つの林檎を掴み出し、愛犬ジョンは何時もの如く二人の後を追つた。

町は寂しい程静かに、カーテンを透く家々の電燈は涼しい夏の風情をみせたが、風は熱病患者の肌さわりの様に生ぬるく、時々ジョーイ・ライドの自動車が燥狂患者のやうな女の笑ひ聲を乗せて山頂の方に驅けて行く。

〔日米〕No. 8996 November 17, 1924)

(八三)

白婦人と日本人との

戀及其悲劇…… (二)

海岸に出る細道を、二人はいつもの如く手を組んで歩いた。

小谷は歩一步暴風の如き血の狂ひを感じたが、抑へきれぬ激昂を踵で踏みしめながら、靜かな歩調で女と足なみを揃へて歩いたのであつた。

渚近い岩角に腰をおろして後、二人の間答は約三十分間繼續された。日頃無邪氣で快活な小谷は、今夜に限つて無氣味な程黙つていた。多辨なスミス嬢は常よりも燥いで「レンボウ・マイ・レンボウ」といふ俗謡を鼻で唄うたりした。

聽て二言三言、只ならぬ句調の間答が交換されて後、押し付けるやうな沈黙が五六秒續いたと思ふ間もあらせず、

「此の阿魔女」と一言鋭く日本語でいひ放つた小谷は足元に轉がつていた鮑殻を取上て力任せにスミス嬢の額をなぐり付けた。此濱の鮑は一個の殻に「ガロン」の水を盛得る大きさがある。石膏像のやうに白い女の額から鮮血がサツト迸つた。

十餘年白人の家庭にあつて白人の生活をなし、英語で語且考へ殆ど日本語を忘れていた筈の小谷は此時「この阿魔女」の一語を日本語で叫ぶと同時に、彼の脈管には俄に日本人の血液が沸き上がった。そして女の額に鮮血の迸るのを見た瞬間、恐しい悪魔は小谷の五體に乘移り、機嫌を損じたゴリラの如き暴力を以て女の胸に躍り付いた、女はバタリと砂の上に倒れた。小谷は兩足で女の身體に乗りかゝりながら、力任せの兩手を以て軟な織首を絞つけた。女は蛇踊りのやうな手付きで掴んで悶搔いたが二三分後末梢精神の休止と同時に手先がグタリとなつて息が絶えたのであつた。

○ ○  
愛犬ジョンは此光景に狼狽して二聲三聲高く吠えた。然し加害者が日頃の愛撫者なのに當惑して、その現場を唯グル／＼と駆け廻った。小谷は傍に捨てあつた網具用の麻縄の片を拾ひ上げジョンを傍近くに引寄せて、後、隙を見計らつてその首を堅く括り付けた。ジョンの抵抗はスミス嬢以上に猛烈だったが、更に其手足を別々に括られた上、崖の上から海中に投げ込まれた。

小谷はやがて女を擲つた鮑殻を以て砂浜に穴を掘り始めた。砂地は極めて柔かだったが、深さ四尺長さ六尺、幅三尺程の船底形の大穴を掘り終る迄には容易な努力でなかつた。夢中になつて土を掘る自分の姿が不意にジョンの土掘を聯想させたとき、小谷は口の中で、「ジョンの奴めが」と呟いた。

掘終つた穴に女の死骸を引入れて、上から丁寧に土をかけ更に其上を靴で踏み固めて後、用心の爲表面にはかわいた砂を撒き散らした。斯くて小谷は額の汗を抜きながら、腰を伸ばしてホッと一息したのであつた。而して其時迄殺人罪を犯したとは思はず唯爲さねばならぬ仕事を仕終せた氣持であつた。

然し次の瞬間冷たくなつた明け方の風が汗に濡れた頬面をヒヤリと吹いて丘の上の灌木林に黒い刹那、小谷は突然心臓の破裂する様驚きと恐れに襲はれ、穴に逃げ込む野兎の如く、山裾の砂原傳ひに一目散に駆だったのであつた。

△金のためか色のためか

夜明け前、ポイント・ロボスの山中に逃げ込んだ小谷は、粘土の道路を踏んでゴムのやうな弾力を感じた時、女を埋めた折り靴底の弾力を聯想して、空恐ろしくなつた。しかし噴火口の溶岩の如き彼女のパッションは、砂の中に埋もれても尙依然として熱氣を有しているものと思はれなかつた。

松杉の繁つた森の中に分け入ると刺戟の強い針葉樹の香は婦人の通有な腋臭の匂ひを思ひださせた。前後四日間山に籠つた小谷は僅かにパンをとつたのみなので、頻りに空腹を感じると同時に、馴染みの娼婦ゼラが俄に戀しくなつて山を下り自分は今活動寫眞の役者となつて殺人犯の罪人が物怖ぢする場を演ずるやうな氣持で町に出た。ゼラの部屋には既に警察の網が敷かれてあつた。「自動車で散歩しませうね」とゼラの呼んだ自動車は小谷を乗せると直にモントレーの警察署に走つたのであつた。

〔「日米」No. 8997 November 18, 1924〕

#### （八四）

白婦人と日本人との

戀及其悲劇……（三）

一方カーメルではスミス嬢の行衛不明で大騒ぎとなり、警察署は應援隊を召集してその踪跡を搜索したが、四日目に至り惨殺された嬢の死骸が海岸の砂浜から發見され、是と前後して加

害嫌疑の日本人が捕縛されたので、全米國の新聞は近來の怪事件として大々的の報道をなし、遠近各地の新聞社は續々特派員をカメルに派遣した。時は恰も歐洲大戰開始前後で日米關係は屢々緊張を告げ、加州土地法の通過後兩國國際間には暗雲の去來絶え間なく、日本政府は桑博贊同の爲め百五十萬圓の巨費を投じ、幾分なりとも加州の輿論を緩和しやうと苦心していた際である。カメル椿事が在米十萬の邦人をして、顔色を青からしたも當然である。桑港にて發行の邦字新聞『新世界』は八月廿五日（廿三日サリナス通信）の紙上に左の事實を報道した。

○ ○

▲小谷の自白 モントレー警察署にての訊問に際し最初に小谷の陳述せる處によれば、「自分はスミス嬢とは戀中の關係にあり十二日の夜同嬢を訪問せし際の如き同嬢は自分に駈落を勧めたりしも、自分は切にその不心得をさとし之を止めたるが、さらば共に海岸を散歩せずやとのことに相携へて出かけたるに、嬢は加州の法律では日本人と結婚を許さず且又日本人に對する感情面白からねば、寧ろ情死せずやぞ口走り痛く絶望の口吻なりしが遂に自分の隙を見計らひて斷崖より海中に踊り込みたり」云々と語り警吏に其場所の略圖さへ描きみせたる由なるも一説には、「嬢がナイフを以て自分に手向ひ來るより止むなく正當防禦上これを殺したり」と自白せりとの事なるが何れが信なるか。

▲死因は絞殺 小谷が右の如く自白せるも警吏はス嬢搜索の手

を緩めず附近搜索中の所カメルより一哩半ばかり隔たりセージ・ブラシユなど生茂る中を曳きゆきたる新しき車輪の跡あり、是怪しやとその跡を調行きしに車輪の盡きたる所に草の葉の取亂しあるより試みにそこを掘しに地上より八吋計りにして果してスミス嬢の死骸現れ出でたり。人々驚きの眼を以て死體を調べしに前額に打撲傷あり、尙獵漁所の繩にて咽喉部をしめいり、察する所先づ一撃を加へて後更に絞殺したるものらしく、此報知のカメルに達するや、上を下への大騒動遙々ニューヨークより來れる弟は勿論住民も激昂の極に達したるが、之にて小谷の自白は全然虚偽なる事證據立てられ最早小谷の加害者たる事は疑ひなきに至れり。

▲色か金か原因不明 さて小谷は何故に斯かる大罪を犯すに至れるか風説は區々なるも小谷がスミス嬢と相思の間柄なりし事實も幾多發見せるス嬢の小谷に與へたる信書によりて全く否認すべからざるもの、如く、またス嬢は二百七十二弗五十仙のチェッキを所持していたる該チェッキを小谷がモントレーの銀行にて現金にせんとして拒絶され又小谷が馴染の白娼婦に現金にする工夫はなきかとチェッキを示したる事實もあれば或は金の欲しさに該チェッキを横奪せんが爲めに絞殺せしものなるか、尙取調の進行するに随つて明瞭となるべし。

▲小谷就縛の模様 是より先小谷は警吏の追跡急なるを知りポイント・ロボスの山中に潜伏したるも飢餓に迫りて堪へ難きより夜に至り豫て馴染を重ねをりし白娼婦の所に至りて食糧を得

又旅費の調達を依頼したる由にて娼婦は之を官憲に密告し小谷を逃亡せしむる爲め自動車を送るべしと小谷を釣り置き、小谷の今か／＼と待ちいたる所へ自動車の來て見れば、却て自分を捕縛にきたる自動車にて難なく取押へられたるなりと。

▲リンチ警戒　カーメル住民は該事件について痛く激昂しをれば、小谷をその筋の手より奪ふが如きことありてはとの懸念より牢獄は嚴重に警戒されをれり、又小谷の自殺を防ぐため食物其他きびしく注意しをれり（以上原文の儘）

○ ○

新聞記事に事實の真相を望むは譬ひは古いが木に據つて魚を求むるの類である。殊に異人種に對して先天的の偏見を有し、日本人に對して幾多の壓迫を重ね來れる米國新聞としては、無論此種の事件を公正に報道しやう筈はない。小谷の犯罪は一にも二にもチェッキ掠奪の爲めなりとし、女と多年の親交のあった事實は努めて是を隱蔽しやうとしたのであった。

〔日米〕No. 8998 November 19, 1924)

（八五）

白婦人と日本人との

戀及其悲劇……（四）

従つて小谷の犯罪に對する地方民の激昂は益々極度に達し、場合によつてはリンチ騒動も起し兼まじき形勢となつたので、

モントレイ警察署は牢獄を嚴重に警戒せねばならぬ騒ぎとなつた。リンチは元來白婦人を凌辱した黑人に加へらるゝ、私刑であつて、地方暴民は其犯人を警察の手より奪ひ取り、犯人の首を荒縄にて括り、數丈高き木の空に掛けて是を縊殺するのである。米國人の黑人に對するリンチ騒ぎは現在までに數百件を算しているが、小谷の事件は黑人の場合と少しく事情が異なり、彼の背後には日米國際關係と云ふ邪魔があるので、遂に其のリンチ騒ぎは沙汰止みとなつた。然し此場合小谷に對する一般米人の惡感、普通黑人以上に猛烈だったことは容易く想像される。

一方日本人側では、此の事件の日米關係に惡影響を及ぼす結果を思ひ、其狼狽と周章は慘め過ぎる程であつた、小谷就縛の報傳はると同時に、同地の日本人會の重なる人々は集まつて協議を重ねた結果小林牧師及び代表者三名で、サリナス監獄に犯人小谷を訪問する事となつた。檢事は始め面會を拒んだが「今日の面會は小谷の罪をカバはんとにあらず却て彼をして罪狀を自白せしむるためなり」と宣誓して後面會を許された。八月廿六日の『新世界』は其顛末に就き左の如き報道を傳へた。

訪問日本人の前で

小谷悉く實情を吐く

▲殺害は痴情の果てか　小谷は語りて言ふ「自分はスミス嬢とは二年以來情交を結び居り、去る十二日も午後五時頃例の如く訪問し八時頃海岸にて逢ふべき約束をなして別れたが、自分の

同時刻に海邊に行きし時は、嬢は既に予を待ち居りて、それより二人は携へ來れる林檎を食しながら種々の話をなし、折柄の月明に逍遙を恣にしイザ夜も更けたれば歸らんとしたるが、自分はその時自分の兄弟と面白からぬイキサツあるにより遠からず此の地を去る由を告げたる上、就ては今貯へなければと言ひたるに嬢は直に二百五十弗のチェッキを與へたりしかば、實は是れよりネバダに行きてから(モントレイに居りし事ある白媚婦)と結婚する積りなりと言ひ出したるに、スミス嬢は俄に怒り出し鮑の貝殻を拾ひなどして、自分に喰つてかゝりたれば、自分は遂に其の貝殻を奪ひて嬢の鼻柱に打ち据へたるに眼鏡は滅茶々に壊れたるが續けさまに前額及頭部を殴打したり。」

▲海邊に徹夜 嬢は爲めに倒れたれば、今はと前後を考ふる違もなく繩にて咽頭を締めて死に至らしめたるが、自分は其れより朝の五時頃まで海岸に止まり、東の空の白むを俟ちて鮑の貝殻にて穴を掘りて嬢の死骸を埋めたり。嬢の愛犬ジョンの行衛及現場の車輪の跡は一切知らずと自白せり、尙小谷は自分は若し死刑の宣告を受けなば願はくば絞殺さるよりは、銃殺されたい、若し萬一死刑を免れて監獄に服役すること、もならば、一般囚人の模範たるべしなど語り居たり。

○ ○

小谷の申立てには一回毎に事實の相違があるので、一般日本人は野口男三郎の殺人事件を聯想し、彼も亦一種精神的の缺陷を有する病的青年に過ぎぬものと見放した。然し同地に居住し

て居る小谷の實兄源之助及び多數友人等の語る處に據ると、彼は決して精神病者でなく、寧ろ常識的で至極柔和の性質だと云ふので、日本人間では、特に此の事件に關して深い疑惑を懷かなねばならなかつた。

尙證據物件中スミス嬢庭内の草原から發見されたと云ふ紙片あり。その紙片には

「サンノゼに行く留守中家の注意を頼む、エチ ダブリュ エス」とあり、頭文字は云ふまでもなくスミス嬢の殺害をサンノゼ行きとして暫らく誤魔化し置かんが爲め小谷自身の偽筆したものと傳へられた。

〔日米〕No. 8999 November 20, 1924)

(八六)

白婦人と日本人との

戀及其悲劇…… (五)

陪審制度の常識裁判

豫審は九月四日から開廷され證人數名の取調が行はれたが、近來の大事件とて法廷附近はいつも人山を築いた。殊に不可思議なるは小谷の心理状態で、入獄後も何等煩悶苦痛の色見えず、食事も快よけに喫し、朝夕書籍に親み、相手があれば愉快氣に談話し、是が眞の犯人だと聞いても、何人も疑念をいだかざるを得なかつた。



「色の爲めか金の爲めか」は興味ある問題として引續き一般の話題に上ったが、日本人に對して根本的の偏見を有している多數英字新聞は、飽迄「金」の爲めとして此事件を押しつけやうとした。然し三四年來スミス嬢と特別の親交あつた小谷が、一夜俄に二百七十弗のチェッキの爲め殺意を生じたといふのは、餘りに不自然至極であつた。

兎角して日數をかさぬる中、スミス嬢と小谷の間に情交を結ばれてあつた確證が、種々の方面から日本人の手に握られた。地方居住の二三の日本人有志は「金」のための兇行だといふ即斷を忌ましく思ひ、犯罪真相暴露の運動を起さうとしたが、小谷の實兄源之助は事件が事件なればとて却てこの運動を迷惑がり、尙一般白人の反感を激甚する恐れもあるといふので、遂に運動を中止する事となつた。

然るに此際社會部記事で賣だした桑港『コール』紙は、此事件の突發以來最も迅速精細の報道を傳へ他の競争新聞として顔色なからしむ程の大活躍を試みたが、餘り事件に深入りした結果、自然の行懸りとして兩人の情交を暴かねばならぬ立場となつた。同社は何處から手に入れたものか、スミス嬢と小谷の間に交換された艷書及び是に伴ふ最後の行懸りを「續きもの」として連日の紙上に掲載した。その中の一通には左の如きものもあつた。

「私の愛するカツ（勝良）さんよ。私は貴方の側を離れては、一刻も生きてゐる氣がしませんわ。僅か三四十哩の近き所に

來ても、遠いやうな心地して寂しく感じます。見るもの總てに貴方の面影がちらつき、聞くもの總てにあなたの聲が聞えます。私はこの繪を描き終つたら直歸ります。あなたの愛するエッチ・ダブリュー・エス」

是は去年の春スミス嬢がサンノゼ地方へ寫生旅行に出かけた時、愛する勝良と離れて、一人さびしく暮し遙彼方のモントレイにある愛人小谷に宛た手紙であつた、また他の一通には左の如きものもあつた。

「私は昨晩床に入つてから、耐えず貴方の幻に襲はれましたわ、そしてそれを捉へていつもの様に接吻をしやうとしたが、私に満足した喜びを與へませんでしたよ」

○ ○

スミス嬢の友人等はコール紙の報道現はる、や、以ての外なりと憤り、約二十名連署の上同社に向かつて取消し運動を始め、日本人勞働者たる小谷とスミス嬢と情交ありとなすは、故人を侮辱するものなりとて、各方面に運動を企てスミス嬢は結局人格高潔品行方正の淑女なりと保證され、コール紙も其結果は遂に有耶無耶に葬り去つたのであつた。歐米の社會の表面通り清潔に見るのは、常に此種の「臭い物には蓋」の社會運動が行はれるからである。然しその内面が決して基督教牧師の吹聴するやうなものでないことを、序ながら斷つて置く。

公判は愈々十月廿一日からサリナス法廷で開廷された。群衆は我先にと傍聴席に押かけ、同法廷開設以來の雜沓と傳へられ



た。小谷は小綺麗な引締った顔に一點の曇りも帯びず、惡びれたる様子もなくして席に着いた。公判は前後三日に亘り數名の證人は代る／＼取調を受けた。

▲スミス・ホワイトといふ婦人はスミス嬢の隣家で且年來の親友であつた。兇行當夜八時頃嬢と小谷の激論する聲を聞き、仲のよい二人が何を云ひ争ふのか不審に思ふたと陳述した。但し兩人の親密な交際關係は二年前より能く知っているが、その交際は如何なる交際であつたかは知らぬと逃げた。

▲フランセス・パリスといふ十六歳の少女は、二三ヶ月來カメルに避暑中で、屢々小谷がスミス嬢方に出入するを目撃したが、其他の事は何も知らぬと述べた。

▲ミス・アーデンとふサンノゼの婦人は年來スミス嬢と親交あり、二三日中嬢はサンノゼに出遊する筈だったが、突然の凶報に接したと述べた。

▲ワルター・ワレンといふ男は兇行の翌朝スミス嬢邸の庭先で手帳を破つた紙片の書付けを拾つた顛末を陳述した。

その他數名の證人は連日代る代る證言臺に立つたが、兇行の原因や顛末に重大な關係を及ぼすやうな證人は一人も現れなかった。

〔「日米」No.9000 November 21, 1924〕

(八七)

白婦人と日本人との

戀及其悲劇……(六)

米國の裁判は豫審制度の常識裁判で、情理兼備はつた名裁判が時々行はれる。従つて人種間の區別や反感等も、時としては露骨に法理の中に包含されることがある。或る活動寫眞の脚本家の談によると、東洋人を題材として脚本を作る際、何うしても是を兇行犯のやうな敵役にせねば傑作は出來ないとの事であつた。豫審官の小谷を見る目は、此活動芝居の脚本家と相離る遠からざる事無論であつた。

十月末日に至り遂に宣告が下つたが、殺人の大罪を犯した小谷は意外にも死一等を減ぜられ無期徒刑に處せられた。

○ ○

その後或る米人の一辯護士は此の判決を不當とし、小谷は當然無罪たるべきにより、この際日本人間にて上告の手續をなすべしと勧告し來が其書面中には

「第一加害者小谷と被害者スミス嬢の性交關係を明かにせずして判決を下す如きは米國裁判界の最大恥辱なり、然して其背後に人種的偏見の伏在せるを見るとき在留日本人諸君は權利伸張のたび飽く迄法理上に戦はざるべからず」と云ふものであつた。

然るに在留同胞に取りては誠に有難い義人の聲と聞くべきだ

が、然し法人はその儘是をき、容る、だけ素直ではなかった。又一方日本人社會には唯一人も此の上告に應ぜよと主張するものがなかったのである。

△小谷は今尙獄裡に在り

小谷は今尙加州フォルソム集治監に在るが、彼れの犯罪の動機は今尙三年前の儘黒い疑問のヴェールに蔽われて居る。

結局小谷の自白なるものは主客轉倒の申立てである。何故かといへば、小谷はスミス嬢に對し、正式結婚を申し込んだ。然し加州の法律は許さぬと拒絶されたのである。最後の大詰海岸の場に於ては情死を迫つて見たが、彼女は鼻唄を謳つてせゝら笑ひをしたに過ぎなかつたのである。然し問題は切迫している。明日は女のサンノゼに出立する日だ。そしてサンノゼには女の新たな情人が女を待ち受けて居る。新たな情人は小谷の如き異人種の勞働者でなく、堂々たる白人紳士で、地位あり財産のある藝術家である。二人の新たな戀が熟しさへすれば、公の結婚式が間もなく擧げられるかも知れない。従つて小谷には去年の春のやうな情味の濃厚な手紙を貰ひ得る見込はないと想像したのである。

○ ○

京人形の産國たる日本人は屢々白婦人の玩具として弄ばれる。小綺麗且打算の觀念に乏しく、戀を弄ぶ相手としては至極適當しているからだ。白人娼婦と日本人嬪夫（醜業夫の情夫を在米邦人間にては嬪夫と言ふ）の忌まはしき話は小谷も屢々耳

にしたことがある。然し、此の二年間散々女に弄ばれて今日此結果を見るとすれば、小谷は其嬪夫よりも淺間しく哀れなものであつた。こゝで二百七十弗の手切れ金で別れるとすれば、此砂漠の旅のやうな移民地生活を明日から如何にして暮らすのか、小谷に取つてその夜は實に一期浮沈の場合であつた。小谷は飽迄執念く女に取りついたので女は肝癰を起して

「ジャップの癖に」

と言ひ放つた。戀に國境の隔てなしといふが、人種の差別は事實において純なるべき戀仲にすら大なる障礙を横へていた。殊に「ジャップ」の一語が小谷の耳に鋭く徹した時、日本人の血が忽ち小谷の心頭に沸き返つた。

〔日米〕No. 9001 November 22, 1924)

（八八）

誹謗罪に問はる

ポテレン事件

明治三十年六月、私の發行せる『腮はづ誌』紙上一個の狂畫が現れた。此狂畫は天才畫家高橋孤泉の作る處、贊評は尺魔の作る處、「今より百年前の出來事」と記してあつた。

この狂畫が『腮はづ誌』に現るや『日本新聞』は石版摺の新聞に之を轉載し、『新世界』主筆たりし坂上幽花は興味ある讚評を試みた。

右の狂畫は桑港美以教會夜學校教師佐野喜代吉及びミス・デロンの内面を諷刺したもので、教會では可なりの問題となつたらしい。佐野喜代吉は、此狂畫を以てミス・デロン及び自分を誹謗せるものとし、高橋及び私に對し誹謗罪の訴訟を提起した。

高橋畫工先づ拘引せられ、直に保釋を許され、翌月に至り私は拘引され次いで保釋を許された。此ときの保釋金は三千弗であつた。當時デュポント街に旭商會を有する、塩野馨、大黒屋主人たりし駒田常三郎の兩氏が保釋金の提供者であつた。

通辯はゲフネといふ人で、ポリスコートの辯護士はハッチエトといふ人であつた。此裁判において我々の驚いたのはデロン婦人が鬼々しき態度である。狂畫の作家高橋は曾て彼の女を見たことがないのであつた。狂畫の抄本なるものはある雑誌から取つたものであつたが、裁判の時、デロン婦人は狂畫に描いたと同じネクタイや衣装を着け、自分をスケッチしたと偽つた。

この訴訟を細工したのは宮川益治といふ通辯である。彼宮川等は人を落し入れる細工はお手のもので、我等の如き法律思想のない浪人者を落し入れるには容易であつた。

此裁判は數ヶ月に渡つた。複寫せる日本新聞記者米田實氏も連座した。

先づ高橋畫工は補判の結果、九ヶ月の禁錮に處せられ、彼は平氣な風で郡監獄に入獄した。

米田實(現東京朝日外報部長法學博士)は頗る臆病者であつた。彼は如何にしても監獄をのがれんとしていた。時の日本新

聞社主幹安孫子久太郎君等は彼の爲めに五十弗の罰金を調達した。彼は入獄せずに罰金で済んだ。

私は、通辯料も罰金も持たなかつた。私の友人等はそれを助力すべく申し込んでくれた。私はそれを謝絶した。

米國の裁判所が正しいにせよ、正しからざるにせよ、我等はこの國に居住する以上はその國の裁判に服従せねばならぬ。

私は最後の裁判のある日、最早辯護士の無用を感じた。私の畫工孤泉は辯護の術を盡したけれども九ヶ月の禁錮に處せられた。偽證の原告と常識の裁判官とによりて裁決さるゝ、人間の法廷に於いて我等は畢竟無能の人間である。神は公平なるが故に、無罪の人を罰したまふ、同時に有罪の人を免したまふのであると考へた。

私は斯く感じたるが爲めに人間の裁判に重きを置かなかつた。

私は一個善良なる日本の移民であると思ふた。しかし誹謗罪の論告者たる檢事は、私を天人共に許さゝる大惡無道の罪人たることを法官に申告し、法廷爲めに破るるばかりの大論告を試みた。檢事論告の一節に曰く

「原告ミス・デロンは佛國文明の教育を受け、桑港に來りて日本人教育の爲めに盡し、今やその教育の大義を盡さんとするに際し、被告(鷺津等)は此尊敬すべき新來の婦人を傷つけて九切の谷に陥れんとす。其罪科たる新聞雜誌界に於て未だ曾て見ざる處なり。判事閣下、願はくば社會公安の爲め彼

を極刑に処せられんことを乞ふ」

破倫の婦人と淫蕩の青年とを諷したる狂畫は、検事の論告によれば右の如き大惡事であつた。世の中は眞實の事を憚りなく表明するものは多くの場合に於て罪人となるらしい。そこで賢人は身に禍の及ぶことを恐れて、すべてのことに霞を棚引かしている。

○ ○

私は霞を棚引かす術を知らなかつた。畫工孤泉と同じく、九ヶ月の禁錮を申渡された。

回顧すれば此九ヶ月の禁錮は放逸浪漫なる私の生活に大變化を與へてくれた。渡米以來三ヶ年、私は何をしていたのであつた乎。散亂放逸の生活を送り社會に對して何等の貢獻をもさなかつた。而して半解の文をつゞりて同胞の間に寄生し、百害あつて一利なき文筆を弄したること寧ろ萬死に値するのであつた。偶然、奇禍を買ふたりといふを得ず。その奇禍は自ら犯せる罪科、たまぐデロンによりて其罪科を償はしめられたるのみ。私は獄中に於て始めて天國の消息を味はふ機會を得た。

〔日米〕No. 9002 November 23, 1924

（八九）

### 都々逸の事

私の友達に川島保刀君といふ人があります。此人はかなり古

くアメリカに渡つた人で、随つて私の古い友達です。この人は日本からの文藝家だそうですが、私は文藝なんといふことを知りませんから、たゞの友達として長い間、交際していました。私は川さん（私等同人は此人を川さんといふ仇名附けています）を知りはじめてから、川さんは私共に團十郎の聲色やら、左團次のコウセキなどを教へてくれました。私が辯慶勸進帳や白波五人男を覺えたのは川さんの仕込であります。

それから川さんは折り／＼都々逸を教へて下さいました。川さんの都々逸は普通の二十六假名でなく、字が餘つたり足らなかつたりする難物が多いのであります。私の知っている都々逸は、七、七、五の假名で、たとへば

「なんぢすこぶる、みにくいやつだ、けれどするに、おいしやつ」

といふやうなのが普通であります。川さんのは、そういう格をはづして、字あまりもあり、字足らずもある。そして、その剩餘と不足とに拘らず面白味をもっているやうです。

十年程前に教へられた都々逸は

「去られて、泣きはらしたる目をやんめだと。いはる、つらさきをもみのきれでも、さつさんせ」

といふので、普通の都々逸より十三字餘っているものであります。

私は元々田舎者ですが、長い間東京に出で吉原の藝妓から都々逸を教へりましたので、都々逸の節には人後に落ちないつ

もりですが、川さんの十三字餘りの都々逸の節つけには長い間くるしみました。

右の都々逸は加州邊りのウエトレス諸君で苟くも三味線をひくほど人達は御承知の筈であります。それは私が各地の料亭で千弗ほど自腹をきって教へたのであります。

○ ○

七八年ぶりで此頃川さんにソートレーキ士で面會しました。

川さんは三十哩ほどの田舎からワザワザ私に會ひに来て下さいました。金儲けの話でもなく、政治上の話でもなく都々逸の要談で會に来て呉た、都々逸の作者が都々逸音曲師の私に會に来て下さったので大いに喜びました。川さんはいふ。

「其後い、歌がありましたか」

「いや皆目名吟がありません」

「君は謳ふ名人だが歌は作らないやうですな」

「全く」

「近作をお目にかけますかナ」

「拜聴」

「待つ夜なかねばこそ、ほと、ぎす、たへまなくなきや、たゞの鳥」どうすかね。

「チト足らないやうで、餘るやうで謡にくそうですナ」

「これが都々逸の進歩です。四ツ谷、新宿から、吉原、赤坂にまで進んでいつて、信州追分あたりで越後や北海道の船歌と音曲の衝突やら調和やらをしやうといふのですから、都々

逸文學もその責任が輕くないのです」

川さんはその提唱せる都々逸を私に聲曲すべきを勧められた。私は二遍ほど咽喉に通して見た。然るに「泣かねばこそ」のこそを上にするべきか下にして謳ふべきかの調節に苦しんだ。今にして思へば何の苦もない歌だといふことがわかつて、すら／＼と歌ふことが出来るやうになりました。

世間都々逸を學ばんとする篤志家は御申込次第、線香一本廿五弗にて御教授申すべし。

作家川さんの印税は私の門人一人につき一回一仙五厘の割です。

○ ○

ほと、ぎすは昔から問題になっている鳥です。

「一聲は月が啼いたかほと、ぎす」

「ほと、ぎすなきつる方は見えねども聞いた證據は有明の

月」

「時鳥なきつる方をながむればたゞ有明の月ぞ残れる」

「一聲もらして恥しそに、雲にかくれたほと、ぎす」

「これほどまつのに姿もみせずあいにく月夜のほと、ぎす」

○ ○

昔、高野山には「佛法僧」と歌ふ鳥があつたそうです。弘法大師の詩に此事で見えています。この鳥も姿をみせないそうですから、時鳥と同じ鳥かもしれません。今日、高野山の鳥は「ぶんぽん」と謳ふのみにして、僧をばういているそうです。「佛法

僧」を名づけて佛教ではこれを三寶と申しますが、唯今では、佛法あるのみにて僧がないと見えます。これは僧侶に對してエライ暗示です。

〔日米〕No. 9003 November 24, 1924)

（九〇）

### 誹謗罪に問はる（二）

#### 入出獄中の事

私共が誹謗罪に問はるゝや、當時の在米有志等は、これを冤罪なりとして同情を表した。特に副島八郎君が發刊せる新世界新聞を中心とせる諸君は多大の同情をよせジーマン・ホールに於て大演說會を開いた。辯士には山田亮、上田恭輔、光勢耕作の諸氏で會集五百名以上に達した。演說の後、佐野喜代吉君に社會的制裁を加ふべしといふ決議文を通過した。

佐野氏は在留同胞のある者から社會的制裁を受けた。そして私は上等裁判所から刑罰を受けた。

○ ○ ○

私の處刑は畫工高橋と同じく九ヶ月の禁錮であつた。明治三十一年九月の初め、桑港ブロードウェー街の郡監獄に送られた。私の友人等は多大の同情を表してくれた。獄中慰問會を企て、時々差入れ物をしてくれた。

特にこの機會において記しておきたいのは副島八郎君の同情

の深かつたことである。氏は裁判終結の日、社友岩波慶次郎氏に必要な費用を携帯せしめ辯護の後援をしてくれた。しかし私は既に覺悟をきめていたので辯護人を謝絶した。

入獄後、副島氏は當時最も新聞經營に困難なる時代にも拘らず、毎週若干の金を獄中に投じてくれた。私はために高橋と共に獄中に事かゝずに暮らした。

○ ○ ○

米國の監獄は頗る寛大である。私は獄中において友人が差入れてくれたあらゆる書籍を読んだ。無聊を消すために碁盤をさし入れ、マトレス、毛布、シーツの類まで差入れて貰ひ、且クツク用の石油ランプまで差し入れを許された。

毎日御用き、のグロッサーが必要な品々を注文にとりにくる。それに砂糖、罐詰、肉類、菓物などを注文すると廉價に運んで来る。公然ではないが酒類なども買うことが出来た。

獄中で小鍋立てをして蒲團の上であぐらをかき、讀書に耽る味はさながら山中仙人の生活である。小さな獄中で大宇宙を支配する心地が湧くのであつた。

○ ○ ○

獄中に於て私は毎日三欄ほどの原稿を作つた。そして新世界紙上に掲載した。「新歸朝者」「小説お玉さん」その他時々評論を試みた。その稿本は桑港震災の時にみんな焼失して仕舞ふた。今から考へると惜い心地がする。

此當時新世界新聞には若宮卯之助氏が執筆していた（現慶應



大學教授) 私は氏と在獄中文章を應酬して快心の友人となったのであった。而して出獄後も氏と机を並べて執筆し爾來廿餘年間交友を續けている。

野口米治郎氏は私が入獄の時まで行動を共にしていたが入獄後はミラーの山莊の客となりとき／＼獄中に見舞ふてくれた。

此當時、オーキン・ミラー氏は加州の詩人として老大家の地位を占め桑港ボヘミアン倶楽部の一員であった。私の入獄を野口から聞いて出獄の運動を開始してくれたそうであるが、事情非なるために効を奏さなかつたといふ話を後で聞いた。

○ ○

野口米治郎氏は此春、桑港に於て發行せる詩集「トワイ・ライト」といふのに數篇の詩を寄稿し、それが米國文學界の評判となつたので一時に文名を馳た。彼は私の出獄を待ちて東部に旅立つ旨を話していた。

○ ○

在獄中、色々の諸君から訪問を受けた。就中、廢娼論で懇意になつた山田小梅嬢から時々訪問を受けた。監獄内で訪問者に會ふことは私には寧ろ不愉快であつた。それは讀書と作文とを不意に妨げらるゝためである。併し異性の訪問者に對しては何となくつかしく感じた。

或る日小梅嬢は輝いた顔で私と會見された。監獄の面會は囚人と訪問者の中間に堅牢の鐵網が設けられてある。小梅嬢曰く

「こんな鐵網なんか取り除けるといゝのにね」

私曰く

「監獄の中にいる囚人の一番無聊を感じるのは變化に乏しいことです。そして一番苦痛なのは異性を見ることが出来ないことです。多くの長期囚人が脱獄を企てるのは異性に觸れんと欲するから起ると稱されています。若し、この鐵網が張られていなかったら、あなたは忽ち囚人の捕虜となるかも知れません。この鐵柵を中にして囚人と社會の淑女との秩序が保たれているのです」

小梅嬢は笑ひながら歸つた。

〔日米〕 No. 9006 November 27, 1924)

(九一)

誹謗罪に問はる (三)

獄中の生活

米國の監獄は、いはゆる懲役に服する處ではない。懲役といふ言葉は懲すために苦役に服せしむるといふ言葉で日本では以前之を行ふたのであるが、米國のは全くの禁錮である。禁錮は一定の廓内に固く禁こめてをくことで苦役、懲役とは事がちがふ。米國の監獄制度の原則は犯罪人と社會との交際を遮斷するに止まるのである。故に獄中に於て苦役を強らるゝことはない。

我々は嘗てサンクインテンや、フォルソムの監獄に於ては重

罪犯に苦役を科するために石を割らせたり、道を作らせたりすると思ふた。實際、右の集治監にある囚人が石を割り道を作るを目撃した。そして囚人が廓外で作業する時はその足を鐵の鎖でつながれているを見た。併しそれは苦役を強られたのではなく囚人の志願によつて使用したものであるといふことが後で分つた。集治監では勞働を志願するものには何等かの用途を見つけて適度の運動をとらしむるのが制度となつてゐる。此場合には囚人は一時間若干の工賃を受ける。若働くことが嫌ひならば工賃が貰へぬまでのことで、働かぬから食を與へぬとか鞭うつやうなことは決してしない。

○ ○

私は禁錮された郡監獄では州監獄……集治監の如く萬端の設備がない。短期囚人を禁錮するか乃至は重罪犯の未決囚を收容してをくまである。長期の囚人はすべて設備の完全なる集治監に禁錮さるゝのである。

私が桑港郡監獄に禁錮されたのは千八百九十八年（明治三十年）の九月で、出獄したのは翌年四月半であつた。九ヶ月の禁錮を申し渡されたが、その實七ヶ月と十五日の在獄であつた。これは監獄の日數の勘定が一ヶ月に五日づゝの割引があるからで、別に減刑されたのではない。

郡監獄で私は最も奇と感じたことは監獄の看守等が役人臭くない態度であつた。彼等は囚人に對して一視同仁である。日本ならば看守は鬼々しき態度で囚人に對し一元半句の口さへ利か

ないが、米國では囚人に對して友人らしい温かい氣分が漂ふてゐる。日本ならばコラ／＼アと叱り飛ばすところを米國ではハロオ／＼といふ。囚人のある者が、典獄や看守巡廻の時にシガアをねだつたり、シガレットを求めるときに、彼等は口にくわへたタバコを囚人の乞うがまゝに必ず之を與へる。私は長い間の實驗に於て未だ一回たりともその要求を退けた邪見の役人を見たことがなかつた。

私は米國人の心持を監獄で少しく悟つた。彼等は抵抗力のない弱者を虐待しない、同時に強い者を取り挫ぐ心をもつ。排日問題のイキサツも此心理を引き延ばすとたやすく了解が出来るやうに思ふ。

○ ○

郡監獄の食事は頗る單調であつた。平日の食物は、午前是一本のブレッド、ブラック・コーヒー一杯、午後スープ一碗、煮牛肉四斤半程。スープの中にはポテト其他の野菜物が刻み込まれている。

感謝祭とクリスマスにはターキーの煮たのが出る。米國の監獄は囚人に對してもこんな獻立をしている。

しかし、味は甚だまずい。金の取れないお客様だから贅澤をいふのは此方の無理だ。

○ ○

同房の高橋畫工は粗食と無聊とに閉口してウエターを志願した。ウエターは監獄官吏の食堂に出で官吏と同じものを食べ二

階の一室でベッドを與へらる。先づ普通スクールボーイの生活である。

一週間ほどして高橋は私の檻房に歸つてきた。何故に歸つてきたかと訊くと、働くのがイヤになったといふ。僕も働いて見やうかといふと、おやめなさい、それよりも本を讀んで寝轉んでいた方が氣樂だといふ。

○ ○

郡監獄では一週一回凡そ二時間ほど囚人を房外に出して廊下を散歩させる。散歩を好まないものはするにも及ばない。高橋と僕は大概此散歩に加はる事を避けた。夫は囚人に下等な話をかけられたりタバコをねだられたりするのがウルサかったからである。

○ ○

高橋は私より早く入獄したが、私より二ヶ月ほど早く出獄した。出獄後彼れは大膽にも川上音次郎一座渡米興業に際し、加州座の背景を描いた。彼れは音次郎と共に東行し、次いで佛國に渡り、劇場の畫割を書いたのであった。

〔日米〕No. 9007 November 28, 1924)

(九二)

### 米國監獄の話

私は郡監獄に禁錮されたことから聯想してこの機會に於いて

州監獄の模様を記してをきたい。

加州々立監獄は、北加州に於て二ヶ所視察したことがある。

一はサンクインテンで他はフォルソムである。

サンクインテン集治監は桑港灣に臨みたる光景絶佳の處に設けられ、一方は海、一方は山で取り圍まれている。又フォルソム集治監はアメリカン河の上流に臨み松柏の繁茂せる山腹に建られてゐる。何れも風景と氣候とに申分がない。別莊地として避暑地として多く得難い地點に建てられているのだ。

右の如く風景絶佳、氣候温和の地に重罪人を禁錮することは一寸奇異に感ぜらるのであるが、これは深く考へた文明の現れである。

監獄は一個の感化院である。凡そ犯罪は境遇上の必然から起るものである。少數の場合、過失から生ずるものもあるが、大部分は自己の必要から出發する。而して自己の必要なものがたゞ法律と抵觸した時に茲に犯罪が構成せらるゝ。

多くの犯罪者は、常人に比して猛烈なる慾望をもつ。その財寶に於ても色情に於ても然りである。精神病者の場合は別として多くの犯罪行爲は慾望を満足せんとする強き心から生ずる。

若し、此強き心をもてるものが社會の秩序安寧を破らざる程度に於て行動するならば、その人は社會の上位に立ち萬人を指導する偉人となるのである。而も社會が制定せる法律に抵觸する場合には茲に罪人と早變りするのである。私はこゝで犯罪の研究する餘裕をもたない。世にいはゆる罪人と常人との差異を考

へ罪人なるもの、必ず憎むべからずして、寧ろその境遇と事情とに同情すべきを一言するまで、ある。

故に罪囚に對して政府の執るべき方針は、その罪囚を憎まずして之に同情し、彼れ等をして再び罪を犯さざらしめざるやうに教育することにある。則ち社會教育の不備により起りたる罪囚を監獄内に於いて教育することが文明の監獄法である。

此意味に於いて米國の集治監はや、理想に近い設備がしてある。

○ ○

私は五年ほど以前、フォルサム集治監に參觀したことがある。先づ定められたる參觀認可書を受け附に差出し、案内者に導かれて門内に入る。

集治監はすべて堅牢なる石垣を以てめぐらし内外の二廓がある。石造の高臺が所々に設けられ、附近一帶の觀望が出来、脱獄、外襲を監視するの用意が整ふている。監獄の庭は廣闊にして頗る美麗である。さながら宮廷の如き趣を呈し、第一廓と第二廓との間の明地は綠草及び紅白の草花が調和よく植られ手入れが行届いている。馥郁の香氣が四邊に飛び黃白の蝶が舞ふている。

大廣庭の中央には音樂堂が設けられ、音樂志願の囚徒はこゝに各國の音律を學んで吹奏している。

右方の大樓閣は輕罪囚の監房に充てられている。鐵骨四層の大建築で廊下を通り各監房を見れば、寢具は完備し、浴場、洗

面場、便所の設備より、新鮮の空氣を吸ひ込む仕掛、さては冬季七十度の溫度を保つ設備がしてある。すべて清潔にして一本の塵さへ見へない。

左の大厦は重罪犯の監房に充てられ、こゝも右と同様の設備で、ある一角に絞首臺が設けられてある。

病院、學校、靴工機械製作の教授場等備はり、學ばんとするものは任意に語學、職業を學ぶことが出来る。囚徒の中には詩人、學者、畫工等あらゆる人々が包含されている。

料理室、パン製造所、肉類貯藏室すべてそなはり、食事は一時に千人を容るべき大廣間にしてその上方には電氣ファンが舞ひ、正面には活動寫眞の撮影が行はるゝ。この活動寫眞の技師は曾て記した小谷勝良（無期囚）氏であつた。

私は一巡の參觀を終り、看取に請ふて小谷氏に面會し快く語つた。氏は丸々と太り顔色光澤ありて青年の元氣に満ちていた。

○ ○

私はこの集治監で一人の婦人囚を見ない。聞く所によれば男監獄には婦人の參觀を許さず、女監獄には男子の參觀を許さない。獄内にて、新聞雜誌は自由に讀み得るが、州外の者に限られている。それは囚人の氣を迷はすことを避けるためである。

〔日米〕 No. 9008 November 29, 1924)

(九三)

新聞生活より田園生活へ

明治三十二年(千八百九十九年)四月私は出獄した。各縣人會の重なる人々、新聞雜誌に携はる友人等はデュボント街(今のグラントアベニュー)なる大黒屋に於て出獄歡迎會を催してくれた。而し私は一同に感謝の意を表し次いで新世界新聞の記者となった。新聞生活の苦酸は私の夙に知るところであつたが、過去數ヶ月間副島八郎氏の好意に酬いんため且は文友若宮卯之助と意氣投合せるが爲めであつた。

此當時、桑港には三個の日刊新聞が互に筆鋒を交へて論戰していた。曰く『新世界』(副島八郎主宰) 曰く『北米日報』(川崎己之太郎氏主宰) 曰く『日本新聞』(小林彦次郎氏主宰)であつた。

同年四月三日『北米日報』と、『日本新聞』とは合併して『日米』と改題した。今日の「日米」はそれである。

○ ○

桑港の日刊邦字新聞は二個となつた。併し何れも財政が豊でなかつた。『新世界』は副島氏の勤勉力行、鐵堂の名に背かざる働きを示し、臺所、活版所の手傳ひ、雜報も書き、家の掃除もするといふ八面六臂の奮闘であつたが、事務員等に向かつて月五弗の手當をすることが困難であつた。『日米』は既に金門レストランドを食ひつづし、主幹たる安孫子久太郎氏は農園ボス

として地方に巡業するに至つた程である。

勿論、この當時、新聞社に電話などかけてない。社會部の記者主任たりし吾輩は探訪も記事も一人でやり、時々社説も漫録も書いた。四ページの新聞を右の如き不完全なる設備の下に刊行したことは今より考ふれば奇蹟の感じがする。

○ ○

此當時の邦字新聞には地方の記事がすこしも載せてない。地方には鐵道農園に二三千人の日本人が散在していたけれども新聞購讀者の數は三十にも達していない。随つて中央と地方との脈絡なるものは皆無といふべき有様であつた。

イツの時代でも新聞記者は社會一般の人々よりも時世に遅れている。この時代、櫻府を中心として既に數百人の農業者、請負人……ボス等があり、炭山、鐵道等にも數百人の勞働者があつた。而してウインタース、バカビル地方には菓物請負業者、あるひは歩合耕作者も現れ、沿岸地方にはビーツ耕作の請負事業が勃興しつゝ、あつた。またフロリンには苺耕作者が増加し、山麓地方には菓物耕作者が開墾を始めつゝ、あつた。

然るに吾輩新聞記者なるものは桑港の一隅に蟄居し、足一たびも櫻府の地すら踏んでみない。而もその論ずる處は、米國の太平洋經略、日露國交の始末、英國の印度政策などを論じていた。足下の同胞が何をしているのか、加州の平原に如何なる飛躍を試むべきか等に關しては全くの盲目であつた。其迂遠の狀態は「盲者が明者の手引をする」が如きものであつた。



〇 〇

桑港の新聞が明治三十二年時代に地方行僅かに三十枚、而もその多くはサンノゼ地方であつたことは新聞界が如何に地方に盲目なりしかを窺ふに足るのである。この當時、『新世界』は約三百五十枚の發行部數で邦字新聞の雄なるものであつたが、地方發送掛りたる岩波君は十仙の電車賃と五仙の郵送料を副島社長より受取り、往きにより、歸へりに歩いてサクラメント街に至り、支那人經營の酒問屋に入り一号盛のグラスにウイスキーを仰つて歸社し臭い息を吹きかけたことを覺えている。その頃の安ウイスキーは四合入一本三十仙位ゆへ五仙で上機嫌になれたのだ。

〇 〇

私は明治三十三年五月、『新世界』を辭して田舎に出た。田舎といふても對岸のアラメダ郡アルバラドであつた。

アルバラドに設立せられてある製糖所（アラメダ砂糖會社）は米國最古のビーツ製糖所である。千八百九十年（明治二十三年）の創立で日本人には縁故の深いものである。此會社に始めて人夫を供給した人は鹿兒島縣人西博氏で、氏は明治二十五年同郡プレサントンの農園百五十英加の耕作を引受始めてビーツ耕作に手を染めたのであつた。

その後馬場小三郎、山口彌太郎、安孫子久太郎、上松隆人の四氏が共同して同會社の耕作を請負ひ、主任馬場小三郎氏とアルバラドに在住して諸々の監督をしてをられた。私は馬場、

安孫子諸氏と相識の故を以て先づ此田園の居候となつた。

〔日米〕No.9009 November 30, 1924

（九四）

小引

吾輩の米國生活が農業に觸るにあたつて順序上我等の卒先者にして農業に關係ある數人の先輩を記録せねばならぬ。吾輩は前節に於て農業に關係ある數氏を記した。長澤鼎、田中鶴吉、吉池寛諸君の如き則ちそれである。而して今や明治十七年（千八百八十四年）に於て年若き兄弟が加州に移住し、兄弟心を一にして花園事業その他の魁をなしたる事蹟より始めねばならぬ。

△堂本譽之進君と

堂本兼太郎君（一）

太平洋沿岸に於て植木屋の元祖は堂本兄弟で、花屋の元祖は吉池寛なることは曾て述べた。堂本兄弟は健康なる體軀と堅忍にして而も進歩的な頭腦によりて種々なる事業の魁をなしている。特に花園事業に於て然り。

堂本譽之進と同姓兼太郎は、紀州根來下、東大井村の産、明治十七年十月十八日オシャニック號により渡米した。この時兄譽之進二十歳、弟兼太郎十六歳であつた。

彼等の生家は、相應の門閥家であつたが、明治維新この方、



日本社会の激變につれて産を傷けた。堂本の父は子福長者であつた。譽之進を頭として男が五人、女が二人、七人兄弟であつた。

日本の社会で門閥家の階級で産を傷けたほどみじめなものはない。土着の近村で労働者として働く機会がない。生計に窮するに従つて家財の賣り食ひをするより殆ど方法がないのが一般の情態である。此時代に於て譽之進兄弟は父の逆境にあるを痛感した。故郷を離れて新生面を開拓しやうと焦慮したのであつた。

この頃紀州に於いて新進氣鋭の先輩として陸奥宗光がいた。

彼は猛山學校なるものを起し縣内の子弟を教育し其甥伊達多仲及び三谷幸吉郎を米國に遊學せしめ又吉田法順等の門人を渡米せしめた。ある日米國にある吉田法順より郷里に文通があり、米國の修學労働兩つながら有望の天地なる趣が記されてあつた。譽之進は吉田家に於て法順の文通を一見し、自己の運命を開拓し、家運の衰頹を挽回するは米國にありと感じた。

譽之進は實弟兼太郎と計り少し許りの渡航費を才覺して渡米の途に上つたのであつた。

(因に記す、此の頃日本より米國に渡る船賃は二等五十圓であつた。)

堂本兄弟は桑港に上陸するや、郷里の先輩三谷幸吉郎の福音會にあるをたより、譽之進は先づエデー街百六番なるゴールデンステートハウスといふラーデングの掃除人として働いた。この

家こそ堂本兄弟が出世の端緒を開いた記念すべき家である。

兼太郎は最初、學僕生活をなした後ゴールデンゲート公園に庭園の日雇人として働いた。此時兼太郎の心に浮かんだのが植木事業であつた。兼太郎は兄譽之進と計り、明治十八年十二月、オークランド市第三街とグローブ街の角の空地を借受け、こゝに始めて植木、草花等の栽培を始めた。これが後來堂本兄弟商會の基礎となつたのである。

譽之進は桑港ゴールデンステート・ハウスに引續き働いた。

兼太郎はオークランドに於て植木業に全力を盡くした。

譽之進君、後年私に語つて云ふ。

「僕がゴールデンステート・ハウスに働いたとき、最初一週間三弗の給料でありました。勿論終日働きで、掃除もやり、來客の取次もする簡易のクックもしました。四五年後に一週十弗といふ其頃では破格の給料をとりました。僕は此家に十五年間ぶつ通しに働き、その傍日本との貿易を試みました」

譽之進は此家に十五年勤続した間に持主が五人代つた。五代に歴使して忠勤を勵んだのだから、代々の主人より威力があつたことが想像される。

譽之進君が十五年間の勤續中、その勤勉貯蓄の一例をあげると、彼は下着から上衣まで殆ど買ったことがない。客が捨て、いた下着や古靴を用いた。大きければ縫ちぢめる。小さければ切る。實に應用自在であつた。そして明ボトルを賣つたり、洗濯屋の取次で手数料を得たりした。この頃、貯蓄家として有名

であった中村東吉君は堂本兄弟の勤儉ぶりに感じて、一日堂本君に御馳走をしたそうである。處が此中村といふのが桑港切つての勤儉家だけ、御馳走をするといふ觸れ込で大奮發をしたのが驚くべからず。米金五仙（ニツクル）で葡萄とアップルを買つて來たのであった。さすがの堂本先生も之には驚いたと實話が残っている。

〔日米〕 No. 9010 December 1, 1924)

（九五）

### 堂本譽之進君と堂本兼太郎君（二）

植木屋としての堂本兄弟は日を追ふて盛大に赴いた。彼等は日本種の植物が米國に歡迎せらるゝに着眼し、數百種の植木を毎便船に本國より取寄せ、特に百合球の如きは獨占的地位を保つていたのであった。

譽之進君は商業貿易の天才を發揮して運策し、兼太郎君は園藝の熱心家として獨自の才能を發揮したのであった。

同兄弟の租借せる第三街とグローブ街の角屋敷は事業の膨張と共に手狭まを感じた。千八百九十年（明治二十三年）兄弟は、王府セントラル・アベニュー附近に二英加の土地を買収した。日本人が加州において農業地を買収せるは之が最初である。その後なほ事業の擴張と共に隣接地二英加を買収したのは千八百九十二年（明治二十五年）であった。

譽之進君は桑港に働きながら日本と米國との貿易に注視し、明治二十三年より紀州蜜柑の輸入を企て、年々増加して一時は二十萬箱を輸入するの盛況を來したが、日本蜜柑の缺點は皮薄くして長途の航海に適せざるものあり、ある時の如き多量の蜜柑を海中に投ずるの不幸に遭遇したこともあった。（紀州に於て米國種ネーブル・オレンジを移植したる動機は日本種は皮薄く腐れやすき實驗から改良種を試植せるに基づいてゐる）。

○ ○

譽之進君が進取の貿易家としてその鋒銳を現したのは明治二十四年頃で、この時代に於て既に帆船を雇入れて日本に麥粉を輸出したことがあった。

兼太郎君は園藝家として悠々として迫らず、寸を獲れば寸を守り、尺を得れば尺を守り、歲月と共に事業の擴張を圖つた。彼は數年ならずして四英加の土地全部にグリーン・ハウスを購ひ、百合、石竹菊、薔薇等の切花を市場に供給し千九百五年（明治三十八年）大擴張を行ひ、クロース・アベニューに三十五エーカーの土地を買収した。此花園は太平洋沿岸有數の花園として名高い。

○ ○

堂本兄弟は明治二十九年（千八百九十六年）始めて桑港オツファレル街に植木商會の店を開いた。このころから譽之進君は専ら商業の方面の開拓を計り、明治三十一年にいたり、日本食料品を開業したのであった。いまの北米貿易株式會社の前身で

ある。

因みに記す。北米貿易株式會社は千九百六年(明治三十九年、桑港震災の年)の創立で、株主は堂本商會、駒田商店(故駒田常三郎、松波正之共同)及び國產社(故加藤誠六、村田耕共同)の三商會で堂本譽之進は最初より社長であった。

○ ○

堂本兄弟の逸事については記すべきことが多い。明治二十四年に始めて金魚を日本から輸入したこと、マセド郡ビューハック植民地から除蟲菊の苗を紀州有田郡に移送したことなどは同兄弟の創始にかゝるものである。

(ビューハック植民地から除蟲菊の苗を日本に送ったのは、明治二十一年ごろで、此當時米人エッチ・アモアなるもの苗木商のために日本と交通せることありし故堂本氏は幸便に託して送ったものである。エッチ・アモア氏は曾て記せし如く明治十九年に熊本縣人森田群治外六名を率る、ウッドランドに於て日本蜜柑栽培業を起し失敗せる人である。事の序でに記してをくが、森田群治は熊本縣七人組の卒先者でアモア氏と共にウッドランドに入り、蜜柑栽培業失敗の後、同地の古參竹崎犀吉氏等と交を訂し南加州サンバノデノに到り(明治二十四年五月)同地のナースリーにはたらきし間に日本より楠、一葉樹の移植を思ひたち園主の賛成を得て一千弗の資金を携へ翌二十五年二月歸朝したが不幸にして肺患にかゝつて死んだ、その後森田の遺志を繼いで右兩樹を移植したけれ

ども、南加では生長しなかつたと傳へられている。森田が一葉樹の移植を思ひ立つたのは同樹をサイド・ウォークに植ゆるつもりであった。一葉は根が下に向つて入りサイド・ウォークを持ち上げて破壊するやうな恐れがないので街樹として理想的のものと考へたからであった)

一日兼太郎君を花園に訪ふ氏曰く

「僕は渡米以來何事も人に誇るほどのものを持たない。たゞ澤山の子供を健全に育てた丈です」

私の面前には雲突く計りの青年が現れた。夫は兼太郎の長男であつた。

〔「日米」No. 9011 December 2, 1924〕

(九六)

同胞最初の開拓事業 (一)

伊東米次郎君と廣田克己君

事業は中途で失敗したけれども在米同胞中卒先して土地を購ひ、開墾事業を企てたるものは前郵船會社長伊東米次郎君と現高島炭礦重役廣田克己君とである。

伊東米次郎は愛媛縣の人明治十六、七年ごろの渡米と考へらるるが詳細は問合せ中ゆへ追つて記録することゝする。氏は明治十六年頃渡米を志たるも渡航費をうるに窮し、横濱より上海行の米國汽船の火夫となり、同地より便船に乗りて渡米したと

傳へられている。氏は最初桑港に上陸し、バレンシアのアンダソン氏の家に學僕として働きたることあり、後シアトル市にいたり同市のドクトル・ミラーの事務所に通き、傍醫術専門學校に學んだのは明治二十年頃である。このころシアトル市は漸く開けかけたばかりの新開港地でタコマ市がワシントン州の中樞地であつた。當時シアトルには下水管の設備がなく、便所は田舎式であつたところから見ても幼稚の時代なることが想像せらるゝであらう。伊東が何故に比較的便宜なる加州を去りてシアトル市に赴きしかは詳でない。兎に角彼は明治二十年頃シアトル市のドクター・ミラーの處に働き學校に通ふたことだけは確かである。

明治二十年頃高知縣の人で舊自由黨の壯士廣田克己なるもの、タコマ市に在住していたが、シアトル市に於て伊東と親交があつた。此兩人は頗る計畫家であつたらしい。而して此頃面白い計畫が兩人の間に立てられた。その次第は下の如くである。

シアトル市に程遠からぬワシントン湖畔に肥沃の土地がある。これを通稱デルタと稱してあつた。このデルタ數百英加は伊東の主人ドクトル・ミラーが所有していた。こゝを開墾して牧場及び菜園を作り、牛乳と野菜とを市中に供給したならば有利疑ひなしといふのが兩氏の考案であつた。此考案は當時シアトル在住の書生の考へとしては一頭地を抜いた卓見であつた。しかし、考案は如何に賢明であつても先立つものは人と金とで

ある。假に人はあるとしても金は容易に出来ない。そこで兩人は一策を案じ母國より勞働資本兼備の有志を誘導することに決し廣田はこの使命を帯びて明治二十年六月歸朝の途に就いた。廣田が歸朝した明治二十年は土佐の英傑、後藤象次郎君が伊東内閣の非政に反抗し、條約改正の不可を鳴らし、全國に向つて大同團結して惡政府を倒すべしと呼號したときであつた。この運動には高知縣の名士片岡健吉を始め之に附随する多くの有志は血を湧かしていたので廣田が北米拓植の運動は渋滞したのであつた。

併し、片岡健吉の次男經次郎先づ之に應じ、次いで九名の健兒がこの企業に参加した。

之に於て参加者は一人八百圓づつを携帯して渡航すること、なり左の面々が揃ふた。

高知縣 片岡 經次郎

（片岡健吉の次男）

同 松井 早水

（第一回高知藩英國留學生）

同 松井 實弟

同 細木喜代衛

同 村田七五三吉

同 廣田 克己

同 廣田 流水

（流水は克己の實兄）

同

竹崎 犀吉

(現加州在住)

長崎縣

飛田 某

愛媛縣

無田 某

(其後テキサス州在住)

京都府

高木 某

合計十一名

この一行は十二月横濱解纜の英國汽船パタビア號(船長は獨逸人)に搭乗し、明治二十一年一月七日バンクーバーに着し、こゝより便船に乗りて同月十日にシアトル港に上陸した。

○ ○

廣田克己の引卒した青年有志はすべて武士階級の人であった。明治維新の前後に生れ、大日本勃興の氣運に育ちたる人々であつた。彼等は上流の教育を受け、政治改革の理想を有し、辯論に長じていた。しかし、開墾事業の勞働者としては無能力者であつた。而して事業計畫者たる伊東、廣田の兩人もまた武士の事業家であつた。机上の計畫に長じていたが實行上の訓練がない。何れを見ても似よりの有志家のみの群衆であつたのだ。

此一行の産地は多く南海九州である。未だ寒國の風景に接したことはない連中であつた。

「土佐はよい國、南をうけて、

薩摩あらしがそよぐと」

此南海暖地に育ちし上中流階級の子弟がシアトルの雪風を見てはさぞかし膽冷やかに覺えたであらう。

「日米」No. 9012 December 3, 1924)

(九七)

同胞最初の開拓事業(二)

竹崎、村田の加州移住

ワシントン湖畔の開墾について、先づ試験的に同志中より實行者を選んだ。竹崎と村田は選に當り、寒風を冒して荒野に働いたのであつた。けれども此二人はもとより鋤持つ術を知らない。老木の株を掘り、溝渠を穿つ作業は到底彼等の堪ゆる所ではない。「こんな野原がいつ畑になるんかな」兩青年には頗る前途が悲觀せられたのであつた。

廣田、伊東等が机上において計算せる處によればワシントン湖畔のデルタは其當時の地價一英加五弗、開墾を終れば一英加百弗となり、更に此農園に牧畜をすれば一英加一ヶ年二百弗の収益となり、野菜物を耕作すれば一英加二千弗の収穫があるといふのであつた。この計算は三十七年後の今日に及んで愈々正確となつた。

ワシントン州を旅行し、ワシントン湖を見、其四邊の光景を眺めたる人は、今より三十七年前に日本の青年書生が計畫した湖畔の農業に興味をもつであらう。



今より十五年前尺魔シアトルに遊び、ワシントン湖畔を逍遙したことがある。湖水を中心として、白堊紅樓、林間に點綴し、なだやかなる耕地が黄白の野菜園としてワシントン五十萬の鮮血を維持しつゝあるを想ひ、我先輩等が机上の計畫を必ずしも架空の想像にあらざりしを感ず。

○ ○

八百弗づゝを懷中したる武士的移民はデルタの開墾に失望した。彼等は日本出發の際、鋤も鎌も持参した。しかしそれは少しの効用もなかった。彼等青年は土佐のデルタを想像して米國に渡つたのであった。而も土佐のデルタと米國のデルタとは寸法が違ふたのであった。

「土佐はよい國、南をうけて、

サツマあらしがそよくと」

此恵まれた暖國の青年が米大陸の風雷凜々たる處で開墾の出來やう筈がない。

八百弗出資勞働團は遂に解散したのであった。それは當然のなりゆきであつた。今日の人より考ふれば、十名の同志は薄志弱行のやうに見えるであらうが、日本で筆と箸の外、堅いものを握つた経験のない上中流階級の青年が寒風雪を交へて吹きさむ荒原にシアブルを握ることは堪ゆる能はざることであつた。

此頃シアトルには雪野泰次郎、築野又次郎の諸氏がレストラントを營み、在留者約三十人ほどあつた。

（雪野泰次郎は石川縣の人、島田一郎等が大久保利通を暗殺せる時、斬奸狀を起稿したと傳へられている。彼は明治十六年頃渡米し、タコマ、シアトル間に在住し、廣田克巳等と共にレストランを經營せることあり、其後の消息が審かでない）

○ ○

デルタ開墾事業に失望したる竹崎犀吉、村田七三吉の兩氏は明治二十一年三月シアトルより便船に乗りて桑港に上陸した。

此當時、加州は既に農業に於いて太平洋沿岸第一と稱せられていた。年間雨なく温和春の如く、行くとして農耕に適せざるはなく、特に果物の産地として評判が高かつた。農業に興味をもてる竹崎等が北部を捨て、加州の樂園を望んで移住を企てたのは必趨の勢いであつた。

竹崎君、後年、當時の事情を語つて云ふ。「明治二十年頃のシアトル市は市街といふても名のみで下水の設備さへなかつた。日本人の此の地方にある者はレストラントの給仕人が主なる就職であつたが之れとても限りがあつて日本人レストランのケッチンに澤山ごろ／＼してゐた。此頃の給仕人は一ヶ月十弗乃至十五弗であつた。野外の働きは株堀り起しの仕事で多くは一株二十五仙の受負仕事であつた。そして其一株を堀り起すのに二日もかゝることがあるので、常食たる麥粉の團子汁が食べかねたこともある」

其處でバンクーバー邊に上陸した日本人は冬になると食物に窮した。働くにも口はなし、口があつても株堀りのピース・

ウォークでは身體が持ち切れない。けれども、加州に渡るには六弗の船賃が入用だ。然し此六弗といふのが當時の大金であつた。

此當時日本人が渡米する線路はバンクーバーとサンフランシスコであつた。そしてバンクーバーに渡つたもの、多くは南へ南へと進んで來た。我竹崎君は其卒先者の一人であつた。

〔日米〕No. 9013 December 4, 1924)

(九八)

書生が開いた農園

馬場小三郎 高尾庄太郎

竹崎 犀吉 西 博 夫

堂本元之進 野田音三郎

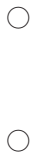
珍田 捨巳 西 龜之助

明治二十一年(千八百八十八年)は加州にある日本人農業家が記念すべき年である。此年六月桑港よりウインターースに旅行せる壯年があつた。名を馬場小三郎といふ熊本縣人にして明治十九年の渡米者であつた。

彼は身長五尺八寸、臂力萬人に優れ、元氣旺盛、一日一斗の酒を傾けて、酔態を現さず、音吐鐘の如く、一たび意を決する時は水火に入りて自若たり。彼れは明治二十一年五月、ウインターース村に到りジョージ・セツセルが菓物園を訪問し、菓物摘

取のため日本人數名を供給することを契約した。これが加州に於ける日本人菓物摘取勞働契約の初めである。この菓物園に入りたるものはすべて書生であつた。其姓名を逸したが、高尾庄太郎、永野英太郎、安達民雄、岡部寛、進藤秋三郎等はこの團體に加わつた人々である。

此年、竹崎犀吉は北部より南進してウードランドに到り、マーチン氏の農園に働き口を求め、西博夫は同年八月馬場小三郎と桑港に會してソノマ郡フリストンの山林に伐木仕事に赴いた。堂本元之進は同年六月、五名の同志と共にバカビルに到り、菓物摘取の仕事に働いた。



加州の菓物園はソノマ郡が最も古き歴史をもっている。而してウインターース、バカビル、ウードランドは在米日本人農業者の發祥地といふべきである。

和歌山縣人西龜之助君は明治二十年頃よりバカビル地方に働き同縣人の魁をした人である。ウインターース及びバカビル地方に和歌山縣人の多いのは龜之助君が卒先したからである。

現在でも此地方には和歌山縣人が多い。例へばウインターースの仙人谷には谷越寅太郎、貴志丈太郎兄弟(貴志丈太郎は先年歸朝した)が地主として居をかまへ、前田芳太郎は二十年前此地に商店を持ち、(後桑港に移り桑港震災後リビングストンに移住して今日に至る)バカビルには皆部梅太郎父子が三十五年前から農業に従事し、(その後商店を經營し、梅太郎は後年日米

銀行の支配人となり銀行破産の後リビングストンに到り、地主となつて今日に及ぶ。増田與一：舊姓小泉も亦バカビル地方にて農業を営み後リビングストンの地主となつたのである。ウインタース及びバカビル地方は長い間和歌山縣人の勢力範圍であつたことは争はれない事實で、それは西龜之助君等が扶植した因縁によるのである。

○ ○

廿一年頃の在米日本人の書生が開拓したソノマ郡山麓地方は紀州人が集合して勢力をなしたが他縣人としては

熊本縣

馬場小三郎

高知縣

竹崎 犀吉

鹿兒島縣

西 博 夫

新潟縣

池田 有親

佐賀縣

野田音三郎

同

高尾庄大郎

等も早くからこの地方に活動したのであつた。但し、紀州人はより多くこの地方に先入し、菓樹栽培に興味をもつものが多いので、この地方が紀州人の勢力となつたのである。

○ ○

明治二十年前後に加州の平原に活動した各縣人中、其の活動の區域を考ふるに左の如し

和歌山縣

バカビル地方

広島縣

プラサ郡地方

愛知縣 川下地方  
熊本縣山口縣 沿岸地方

○ ○

明治二十一年より二十三年頃までは農民階級の移民は米國本土に多く渡つていなかった。明治十八年布哇の官約移民が三年の年期が開けた移民中大陸轉航を企てるものは實に少数であつた。而して明治二十四年にいりて米國勞働界有望の報が布哇日本人間に傳はり、それ以後大陸轉航を企てるものが漸く増加した。此の時代には書生連が既に加州の中原に飛躍を試み支那人勞働者の漸減が共に之に代るの氣運を促してきたのであつた。珍田捨巳は明治二十四年桑港領事として見えた。彼は名領事として名高かつた。而して彼れは在任中において初めて移民問題が起こつた。その第一はガテマラにおける日本移民の紛紜である。

（ガテマラ日本移民の紛紜について記録すべき事が多いが紙面の都合上後節に書くことにする）

〔日米〕No. 9016 December 7, 1924)

（九九）

書生時代より勞働者時代へ

風來的勞働時代（一）

明治二十一年（一八八八年）布哇第一回官約移民が三ヶ年の

年期満ちとなってその少数が米大陸に渡ってから、日本々國及び布哇には米國本土の出稼ぎ労働が有望なりといふ諸報を受取ったものが可なり多い。それは明治二十二年以後の事であった。

明治二十二年頃までは、日本から米國に直航する者は大部分が書生であった。稀に布哇から本土に渡ったものはあったが、それ等は多くはアバズレの水夫か博徒であった。純粹なる農業的移民は明治二十三年ごろから、布哇官約移民の年期のあけたのが本土に轉航をはじめたのである。

念のため布哇に於ける明治十八年以降の在布哇移民數を記せば、

一八八五 (明治十八年) 一二六

一八九〇 (明治廿三年) 一二、三六〇

一九〇〇 (明治卅三年) 六一、一一五

右の數字と在米日本人との數字を對照比較するときは、左の状態を示している。

在米日本人數

一八八〇 (明治十三年) 一四八

一八九〇 (明治廿三年) 二、〇三九

一九〇〇 (明治卅三年) 二四、三二六

則ち明治二十三年には布哇に於ける日本人の數は一萬二千三百六十人にしてこれ等の約半數以上は三ヶ年の契約満了の移民なるが故に在米友人の一信にして好望を報告するときは直に米

大陸に向つて鼻を向けうべき移民であつた。

此當時、日本々國に於ても北米の天地に新境を開墾せんと志すもの漸く増加した。始めは學生階級の者のみ北米の事情を知り得たれど年と共に農民階級の者にも北米の事情が明かになり、随つてその始めは學生にあらざれば渡米の事思ひもよらざる企てなりしが、農民の兒と雖も健康の身體を以てすれば布哇同様に北米にも働き口を見出すこと容易なるを悟るに至つた。

そこで布哇に於ける契約満了の移民は明治二十四年頃より、日本々國の農民の子弟は明治二十五年頃より續々北米の天地を目がけて渡航するの風を生じた。

(註) 明治二十三年十一月二日珍田捨巳桑港領事拜命

同年五月二十二日正木退藏布哇領事拜命

明治二十七年十一月五日、神屋三郎代つて桑港領事となる。

明治二十五年十一月二十六日藤井三郎代つて布哇總領事となる

明治二十八年十一月五日島村久これに代る。

○ ○

明治二十一年、馬場小三郎がウィントース村、ジョージ・セツセルの下に數名の學生を働かしてより同年各方面から書生連が此方面に集まり農園開拓の卒先をしたことは前節に述べたが明治廿一、二年にかけて書生連が田舎に活動を始めた事蹟は實に目のまはるほど歴史家を繁殺せしめる。實に此時代の事蹟を記録することは加州に於ける同胞發展史の第一頁にしてこの事

實が即ちわが農業史の開幕である。

（註）明治二十一年五月馬場小三郎數人の學生を率いてウインタース菓物摘取に従事す。

同年六月堂本元之進六名の同志と共にバカビルに入る。

同年六月、竹崎犀吉ウードランド村マーチン園に苺摘取のために赴く。

同年牛島謹爾渡米、翌二十二年三月コルマ市キラハン氏のポテト園に働く。

二十二年九月、大和正夫、石坂公歴等ニューポープのハップス摘取仕事に十數人をひきいて到る。牛島も同時にニューポープに入る。

明治二十一年八月、馬場小三郎ウインタースの仕事を終り桑港に出で、阿部屠龍と小川亭に會し中原の飛躍を高唱す。

同年十月、馬場小三郎ソラノ郡フリストンの山林に伐木の仕事を請負ふ。西博夫、高尾庄大郎等、之に加はる。

明治二十二年、佐賀縣人野田音三郎渡米、ウードランド村に至り竹崎犀吉と會しマーチン園に苺摘みに働く。

以上は最初農園に活動せる書生連の目録である。是等の人々が或は合し或は離れて加州の農園に活動せる様はさながら一幅の畫だ。

〔日米〕No.9019 December 10, 1924)

## （二〇〇）

### 書生時代より労働者時代へ

#### 風來的労働時代（二）

明治二十一年頃から同二十五年頃までの加州農園の事情を考ふるに、この頃加州に於て農業地として労働に適する處は實に少數であつた。其事情の大略は下の如くである。

#### 第一 ナトマ葡萄園

此葡萄園は加州最古の一にして耕地面積約二千エーカー、山田義雄、築山才一（愛知縣人）摘取人夫を供給す。日本人の労働場所としては最大なるもの。

#### 第二 バイナ葡萄園

スタンフォード氏の經營せる所にして約四千エーカーの面積を有し支那人労働者在住し後明治二十七年始めて日本人の手に入る。

#### 第三 パーキン村及ホイトラン村のハップス園

明治二十四年ホイトランドで始めて日本人の手によりて摘取の契約をなし紛擾の爲に農園を追はる。翌年再び回復す。

#### 第四 ソラノ郡菓物園

夏季書生連の菓物摘取労働地として明治二十一年より繁栄す。大部分は支那人の耕作者なり。

#### 第五 川下地方

明治二十四年若山榮次郎（愛知縣人）始めて十一人の同志と



共にモジアー氏の農園に入る。廿六年鶴見藤四郎始めてウオナツグロープに入る。明治廿七年松原伊三郎(山口縣人)始めてアイルトンに入る。この當時の川下はすべて支那人と少數のボルギー人によって耕作せらる。

#### 第六 ピグス地方

ハッチ・エンド・ロックを筆頭とし菓物園の大なるものありたれども廿五年以前に日本人労働者を使用せざりき。

#### 第七 フレスノ地方

この地方の干葡萄漸く盛んならんとし明治二十四年、中畑六郎、野田音二郎、峰島儀一、松岡謙等の書生連各方面より入りて葡萄摘取に従事す。その以前は支那人の勢力範圍なること勿論なり。

#### 第八 羅府地方

支那人の野菜業者全盛にして日本人は未だ一人として農業が手を下せるものなし。

この當時、加州に於ける農業家の中心は支那人であつた。支那人は千八百八十二年(明治十五年)移民排斥法によって絶對移民の禁止を制定せられし以來、漸次農耕地をさりて都市に集中するの傾向をきたし、日本人は加州農産の發達と共にこれに代るの傾向をあらはしたのであつた。即ち明治二十一年ごろから農園に活動した日本人の書生は支那が將に農場を去りて或は歸國し或は都市に走らんとする過渡時代において農業の交代者として現れたる姿である。

(註) 千九百七年日米紳士協約及び布哇轉航禁止により日本人労働者の漸減を來すと同時に、メキシコ人、及び黒人が加州に膨張し、今やメキシコ人は加州内に三十萬、黒人は十五萬を算するに至つた。米國人がきらふ東洋人を拒絶すれば之に代るものは同じく彼等の嫌ふメキシコ人と黒人とが之にかはるのである。そして、日本人や支那人と較べてメキシコ人と黒人とが果して優等であらう乎。これは米國人が今後研究に悩まざる、一個の問題であらう。

#### ○ ○

加州農園の狀態が前述した如くであつたから、明治二十年代に加州中原に飛躍する書生および労働階級の人々は労働口を得るに容易でなかつた。彼れ等は田舎生活の自由寛闊を味はふことを知つた。けれども年中休みなしに労働する働き口を求むるには頗る苦心した。一言にしていはゞそのころの労働者は水草を追ふて轉居する時代であつた。馬場小三郎、野田音三郎等が冬季伐木の労働口をさがし歩いたのはその爲めである。

明治二十一年馬場小三郎はソノマ郡フリストンの山林伐採の仕事に請負、書生連に労働口を與へたのを手始めとして、夏は菓物摘取の仕事、冬は伐木仕事をして轉々として三四年を過ごした。彼れは明治二十五年、川下の伐木を済ましたる後、二三の兒分を率いてサンタクラ郡に旅行した。そしてアプトスの山林に伐木の仕事を求むる考へを起した。明治二十六年木村作三が三十餘名をひきいてアプトスに入ったのは馬場が紹介した

のであった。

〔日米〕 No. 9020 December 11, 1924)

(一〇一)

書生時代より労働者時代へ

風來的労働時代（三）

遠征的氣運の勃興

明治二十二年（一八八八年）八月馬場小三郎ウインタース農園果物摘取の仕事を了へ桑港に出た。偶然、宮城縣人阿部市松と會し地方發展の有望なるを説いた。阿部大にこれに共鳴し、茲に同志と共に實業會を組織せんと企て、同年十月、桑港ジーマン・ホールに於て實業獎勵大演說會を開いた。これに参加する者の重なるものは、

馬場小三郎 阿部 市松（屠龍）

亘理 篤治 竹川藤太郎（默嚙）

坂部 朝雪 佐竹作太郎

古木廣太郎 渡邊勘十郎

山 山 亮 佐々木三郎

山口彌太郎 高木 梅軒

大内 金太

等であった。この演說會の辯士は在米日本人が家内労働に甘んじ足一步も加州の中原にいでず、醉生夢死の生活を續くるを痛

罵し、大和民族たるもの一たび海外に出づる以上各自の才能に任せて遠征の志望を熾ならしむべきを高唱したのであった。而して、この運動の結果、直ちに實業同志會が組織せられた。

此實業同志會は翌年二十三年に至りて遠征社と改稱し、機關雜誌『遠征』を發行し明治二十七年まで繼續した。遠征社の志す處は、加州中原の飛躍に止まらずして遠く墨國植民の大計をたつべしといふのであった。然しこの書生等の理想は何等の實行を見るに至らずして同志は四散したのであった。

此當時の書生連はその理想と計畫とは一頭地を抜いていた。けれども、經濟的實力が伴はなかつた。加州中原の飛躍を説いて見てもイザといふ日にはサクラメント市に到るべき一弗五十仙の汽車賃すら所持する者がない。

（註）當時桑港よりサクラメント市間には一日一回の割引列車があり片道一弗五十仙であつた。斯様に財政的に貧弱であつた時代に何ほど力んで見ても實の擧がらないのは當然である。

そこで、桑港にある元氣のいゝ書生連は割引列車に乗ったり、或る者は徒步してサクラメント地方に踏みだすものが多かつた。而して是等の書生は思ひ／＼に中原の農家を訪問して働き口を求めたのであった。

△日米用達會社

桑港に於いて實業の宣傳をなす書生連が加はるにつれ、政治的團體たる愛國同盟の一派もまた實業方面に注目し、明治二十四年に至り、菅原傳、日向角太郎（輝武と改稱し後布哇移民會

社を組織し代議士となる。菅原傳も同様) 水留善助、石川三之助、水野破門、松岡辰三郎、勝沼富藏等、日米用達會社なるものを組織し地方農園及び伐木の請負業に従事した。けれども此當時の書生連が組織せる實業的同盟はその聲の大なるに反し何事も爲す能はざるの状態であった。彼等は資本を有せず、地方との聯絡を有せず、その會長と稱する者は、一日の糊口にすら窮する人々のみであった。故に日米用達會社の看板をか、げたが社員は同時に家内の勞働に従事せざるを得ざる境遇に立つた。菅原、松岡、水留等は西洋料理人として各所に働き、日向、勝沼等は給仕人乃至皿洗ひの働きをして用達會社に出入していた姿であった。

○ ○

遠征社、日米用達會社の書生連が地方發展に指を染めはじめた當時他の一派、則ち基督教派に屬したる青年は去勢せられたる動物の如き態度にて、學僕生活を送っていた。彼れ等は美以教會、福音會長老派青年會を中心として集合していたが、中原の飛躍乃至外國遠征などには没交渉の姿であった。よく言へば柔順なる青年、わるく云へばイクヂなしの青年であった。

然るにこの基督教派青年の中に異彩を放てる一青年があった。それは福音會長を長く勤めた新潟縣人安孫子久太郎である。

(註) 安孫子久太郎が地方に發展を試みたのは明治三十二年以降の事に屬する。この人の渡米以來の行動に就いては後章に

おいて詳記する。

○ ○

…御申込の注意について…

紀州人瀧本繁吉君十二月四日附の書に曰く。

拜啓貴下が有田郡に除蟲菊を初めて送りしは堂本が送りたる由書かれしが右様の事を堂本が云ひしとすれば笑ふべき事也。

除蟲菊は歐洲駐割の日本領事が明治十七年以前に日本に送れるものにてその次第は當時の「農商工公報」(政府發行)に歴然として公表されあり。阿兄が其種を受取り私等はそれを播種せり、その當時オレーブも紀州日高郡島田村崎山といふ處に滋幸儀平なるもの最初に栽培せり……有田の除蟲菊は堂本も送りしや知らず、しかし其以前に農商務省が卒先獎勵せるは明かなり云々

〔日米〕 No.9021 December 12, 1924

(一〇二)

書生時代より勞働者時代へ

鐵道人夫の勃興 (一)

田中忠七の事

在桑港の日本人書生が、明治二十一年頃からソラノ郡ビル、ウインタース、ウードランド) 地方を中堅として夏期果物摘採の仕事に働き、麥粉の團子汁を以て糊口せる時代に於て、

冬暖に肉食をし、寒貧の生活をしらぬ一群が日本人間にあつた。それは賣笑婦に關係ある水夫あがり若しくは境遇上ある書生が賣笑婦に關係をもてるものであつた。

私は此事情關係を詳知しているが、是等の人中、今日社會の上位に立ち、相應な事業をしていゝる、人の舊惡をあばき之を辱たたくない。凡そ何事によらず、今日の道德を以て批判するもの必ずしも正にあらず。人間はその時代と四圍の境遇によりて止むに止まれぬ行動を進むるものである故に、歴史的に其時代と境遇とに理解なき現代人に對して現存者の道德的行爲を赤裸々に發くる事は該當本人の迷惑を感ずることが多いであらうと思ふ。そこで私は斯の如き場合に於て多くの假名を用いて來た。

蓋し、歴史的事實はその事件の真相を描寫するにある。必ずしもその姓名の眞假を必要としない。たとへば權助が人殺しをして八公が人の妻君を犯しても世の道德は姓名の如何を問はずして之に批判を與へる大星由良之助が塩谷判管の仇を打つたとしても、大石良雄が淺野内匠頭の仇を打つたとしても事實は同じ異名同人である。但し、その描寫が小説的たると史實的たることに於て差異が生ずるまである。私はたとへ假名を用いるにしてもその事實は飽迄も史實的正確を期する。

○ ○

明治二十年代の在米日本人社會は、水夫あがり、博徒政治犯、淫蕩者などが雜然として居留していた。この頃田中忠七なる水

夫あがりの若者が某女を携へてユタ州オクデン市に移住して來た。それは明治二十四年の夏頃であつた。

（註）明治十九年ごろから明治二十三、四年ごろには水夫が東洋各港から賣笑婦を誘拐して渡米するもの其數甚だ多く、日本壮丁の足を入れざる未見の地に賣笑婦の足跡を印したる例甚だ多し。而して忠七が某女を携えてオクデン市に到りしは蓋し彼の地に日本婦人の入し最初であらう。

○ ○

此當時山中部の勞働界は全く支那人の手中にあつた。千八百六十九年（明治二年）大陸横斷鐵道が支那勞働者によつて完成せられたる以來、支那人は山中部の各所に發展したのであつた。ワイオミング州ロックスプリングなる炭山にも數百人の支那勞働者が働き、附近一帯の鐵道には支那人勞働者が活動してゐたのである。當時支那人勞働者のボスにアセイなるものがあつた。彼はロックスプリングに本據を構ひ、時々オクデン市に來た。一夕忠七の妾をのれる遊窟に遊び彼の女と慇懃の情を通じてより、誘ふてロックスプリングに至り之を妾として愛した。

（註）支那人アセイは當時八百人の支那苦力を各所に就働せしめ莫大なる利を占めたりと稱せらる。一夕の豪遊、數百金にして日本賣笑婦を拉し去るの金力また想像すべきである。

忠七はアセイが女色に溺れてロックスプリングの本拠に自己の妾を誘ふや、随つて同地に到つた。即ち自分とお何との關係を秘しアセイの從者として同行した。アセイの目より見れば忠

七の如きは一個の奴隷に過ぎない。これに於て忠七は女を利用してアセイに説かしめ、日本人を鐵道に働かしむることを獻策したと傳へらる。

時は千八百九十一年(明治二十四年)支那移民絶對禁止制定の千八百八十二年より九年後であつた。支那移民壯丁の根が絶たれ、而も山中部鐵道は將に勃興の時代であつた。

アセイは忠七が人夫口入れの要請を諾した。忠七は急遽ポートランドに赴き四十餘人の日本人を募集してアイダホ州ナンパ附近の鐵道に働かしめた。これが日本人鐵道労働者の最初である。

(註) ポートランド、ナンパ間道程四百七十二哩。この當時、ポートランド地方に於ては労働日給六七仙しかも冬季に到れば労働口を得るに窮する有様であつた。然るに忠七が鐵道に働かしめたる労働者は一ヶ月三十弗であつたから、天來の福音の如く邦人労働界に響いたのであつた。

〔「日米」No. 9022 December 13, 1924〕

### (一〇三)

書生時代より労働者時代へ

鐵道人夫の勃興(二)

田中忠七の事

田中忠七がアイダホ鐵道に初めて日本人を供給せる史實は誤

りないことであるが、その人夫を供給するまでの順序については異説がある。明治二十七年四月七日出版の『アイダホ事件排姦始末』(桑港評論、遠征社、金門日報社發行)によれば左の如し。

「從來アイダホ地方の鐵道工事は重に白人と支那人との手に歸し一昨年(明治廿四年)までは日本人労働者にして一步をも同處に踏み入れし者なかりき日本人中往々目を同處に注ぎし者多かりしも如何せん別に入込むべき手蔓なかりしを以て空しく已む者少からざりし茲にポートランドに通稱大新と稱する醜業を營む者ありしが同人の女房が何方へ一南京遊治客ありしが誰か知らん同人こそアイダホ地方支那人の工夫をひきいて廣く鐵道工事を請負ふアセイと稱する者なりしを恰も當時田中忠七は大新の食客となり女郎屋の手先に使はれ別に之といふ仕事もなかりしが大新の女房即ち先の南京客が買ひ馴染たるお何の引合わせにて始めてアセイと相語りたりし、アセイも亦忠七が小才子にして物の用に立つ者ならんとて之を女郎屋の食客より擢んで、自家の配下に屬せしめ少許の日本人労働者を雇いてこれを監督せしめたり。之實に田中忠七がアイダホ鐵道工事に入りし時にして即ち本邦労働者の足跡初めて同地に危せしの日なり(千八百九十一年九月)かくて田中忠七はアセイの配下となりしも思ふまゝの利潤を得る能はざるのみならず事々物々悉く彼覇權と檢束を免れざれば如何にもして彼等が手を離れんと種々苦心の末大新より



一千弗を借入れ鐵道持主なるレミントン氏に掛け合ひ、（尺魔曰く、レミントン氏は當時アイダホ鐵道人夫元受負人にして持主にあらず、彼れは鐵道人夫請負人として手数料を徴しアセイは下受負人として支那人を供給せるものなり。田中忠七募集せる日本人は支那人同様の資格を以て就働せるものなり）茲に漸く獨立して（アセイの手を離れ）日本人を率ゆることはなれり、斯も彼れが爲すこととはトン／＼拍子に其歩を進めたり、數月を出ずして彼れが受持ちはハンチングトンよりグレンヂャーに達しそのひきゆる處の本邦勞働者の數も亦三百以上となり到底忠七一人の手にて悉く管理すること能はざれば淺野寛其他自家の意にかなひし者兩三名を引入れてその麾下となし各受持を定めて之を擔任せしめ自分は其監督たりその長官たり日本勞働者の總追捕使となれり。今や田中忠七がひきゆる處の日本人其數四百その麾下にあつてこれを助くる淺野寛、大澤喜一郎その他數人而して彼れはその總督たり。その長官たりその一舉一動等に至つてはたゞ彼が意の欲する處、彼はまた昔日の女郎屋食客に非ざるなり。」

（筆者大斧生、原文の儘）

田中忠七が支那人アセイと人夫供給の關係を結びしはポートルランドに於てせしか、ロックスプリングに於てせしか詳でない。前説によれば妾お何の紹介によりてロックスプリングに於てし、後説に従へばポートルランドに於てなせしが如し、併し私の考察は左の如くである。

明治十九年頃ポートルランド市に巢窟を構へたる日本人賣笑婦輸入團は桑港、シアトル地方の同類と脈絡を取り、當時モンタナ州ビュート鑛山市に賣笑婦を送り、明治二十三年ごろ一時三十餘名の多數に上つた。然るに同地は明治二十四年銅價暴落のため不景氣を來し、是等賣笑婦の群はオグデン又はソートレーキ市に轉居した。田中忠七は此一群と共にビュート市よりオグデンに轉居したものと考へらる。（ビュート市よりオグデン市まで道程三百三十一哩）

忠七は日本人鐵道人夫供給の魁をなしたが、彼れは水夫上がりの無教育であつた。偶然人夫供給に成功しこれより生ずる手数料は毎月數百弗の収入があつた。小人罪なし玉を抱いて罪ありとかや彼は氣漸く豪り、その得たる金は花柳界に散じ妾を蓄へ豪奢を極めた。これが爲めに勞働者に對して支拂を怠り、或はその預金を消費するに至り、遂にアイダホ排姦事件の騒動を惹起するに至つた。この詳細の顛末は後段に記載すること、し加州に於ける邦人勞働界を一瞥しやう。

〔日米〕No. 9023 December 14, 1924〕

(一〇四)

書生時代より労働者時代へ

鐵道人夫の勃興 (三)

長谷川源司の事

田中忠七が明治二十四年开始してアイダホ州の鐵道に人夫を供給せる翌年、桑港に在住せる長谷川源司なるものエス・ピー鐵道に人夫を供給するの道を開いた。源司は一個の嬪夫であつた。

(註) 嬪夫とは自分の妻妾を賣笑婦として働かしめその収入を以て衣食するものを指す。

彼れは広島縣佐伯郡今朝田某なる婦人と慇懃の情を通じ、同女をして桑港において賣笑を営ましめた。而して彼れはメーソン街のマーケット近き所に「メーソンクラブ」なる下宿屋を開き、當時の桑港日本人間に可なりの羽ぶりを利かしていた。

明治二十四年ごろの桑港日本人社會に於ては、いはゆる嬪夫階級が一般日本人を壓倒した姿であつた。彼等は女を淫蕩の街に働かしめ其収入を以て奢侈の生活を営んでいた。一方政治的書生、宗教的書生は、たとへ理想が高尙なるだけ其ポケットには一弗の餘裕すらなかつた。天下國家の放言高論に長じているだけ、經濟人としてはゼロであつた。我等書生連は彼れ等を賤しめて齡しなかつた。併し書生をセセラ笑っていた。

書生の開いた田園の仕事は水草を追ふて轉々する姿であつた

から苦闘の割合に功が擧がらなかつた。しかるに世には明治十四年五年と進み、本國より渡航を企つる農民階級及び布哇より轉航する契約的滿限の移民は續々太平洋岸に押寄せて來た。北部ビクトリア、バンクーバー、ポートランド等の上陸するものはアイダホ鐵道に向かひ桑港に上陸するものは田園及び山林に向つて働き口を求めた。併しながら加州の田園はこの當時多數の日本人の需要するの氣運に到らなかつた。そこで毎船多數の渡米者に向つて仕事口を見出すことが重大な問題となつたのである。長谷川源司が加州鐵道に人夫を供給するに至つたのは日本移民大到來の氣運に促されたのであつた。

△遠藤音吉の事

加州の鐵道工夫として始めて七名のセクション人夫を引率した広島縣人遠藤音吉氏(現時マウンテンビュー在住)その當時の事情を手記せるものを筆者に送られた。源司が人夫供給の動機を知るに必要な文書である。

「エス・ピー鐵道最初の就働者

広島縣佐伯郡己斐村

遠藤音吉

右は、明治廿四年五月七日桑港上陸、同年八月十二日バカビルのスミス農園に就働し、翌廿五年四五月の頃は布哇轉航者並に日本よりの渡來にて毎船二百名より三四百名の多きに及び、當時寥々たる日本人居住家屋には殆ど足を入るゝの餘地なきに反し各地田園より労働者の需要は僅少にして、一纏め

何百何十の勞働需要者出現せざるに於ては同胞の將來に對して甚だ傷心に堪へざるを以て、時の領事珍田捨巳氏に一個人の資格を以て相當に盡力ありたき趣を領事館に出張の上相談せし處、珍田氏は「書生の分際を以て生意氣な事を云ふな」と一言の下に吾輩の要求を拒絶せり。茲に於いて余は珍田氏に向ひ「君は書生時代を経過せず一足飛に領事の營職に就任せられたるか」と反問せしが結局押問答の末歸宅し、その頃桑港における古參者にして有名なる山本ヘンリー伊勢の守庸信に相談せし處、彼は白人料理店の給仕人としては特殊の技能を有せしが、それ以外には何等の技能なきを以て、當時嬪夫として相當の勢力ありし長谷川源司に相談せし處、彼れは早速快諾して運動の結果エス・ピー鐵道への人夫の供給を請負ひ、最初の就勞者として余に七人の工夫を依頼せしをもつて余も亦早速快諾して西田兄弟、土井、粉倉、木本、田村、吉川の七人を募集して余と共に都合八人セクション働きに從事したる結果、一時は何百人何千人の勞働者を供給するに到りしも、今日に於ては何人が始めて着手したるかを知る人絶へてなし。又曰く。當時はセクションが如何なる者か、或はギャングが如何なるものか、兎に角各國の人種が同一の場所に集合して就働することを信じ、其間には種々の衝突も争鬭も不可避の事と存じ、一同生命を賭して就働した程故、周旋者たる源司君も戦々競々の中に、小生等の就働地まで態々出張したる程に御座候。

（大正十一年四月十七日  
遠藤音吉手記）

源司はその後放浪しエルバソに到り西洋料理人働きとしてきしが同地にて死亡した。

〔「日米」No. 9024 December 15, 1924〕

#### （一〇五）

書生時代より勞働者時代へ

鐵道人夫の勃興（四）

伴新三郎、伊東米次郎の事

明治二十四年、五年頃の在米同胞の勞働界は實に無秩序を極めたものであった。此の當時日本に於いては、横濱神戸等において海外移民の有望なるを感じて移民會社を設立するものが續々現れた。山口榮之丞を社長とせる神戸移民會社を筆頭とし、横濱移民會社等は北米移民を企て布哇及びカナダに向つて盛んに移民を輸送した。

此當時右の移民會社が北米に移民を送るに際しては、何等の準備がなかった。唯手数料を取ればそれでよかつたのであった。

明治二十四年十月、神戸移民會社はバンクーバー島カンバランドに於けるウエリントン炭山の坑夫として一百名の日本人を輸送した。之を引率せるものは伴新三郎であつた。

註―伴新三郎は明治二十五年以降ポートランドに在住し、同地方鐵道人夫供給者成功の一人として有名である。以下其の次第を記述する。

伴新三郎がウエリントン炭山に率いたる日本人坑夫は其數が多いだけツラブルも多かった。引率せる人夫の中、其の過半は他に走った。此の當時カナダ・パシフィック鐵道會社は大陸横斷鐵道の完成を告げ、其保線工事に多くの人夫を需要した頃であった。又フレザ・リバー地方の沿海においては漁業が勃興し、附近一帯の山林には製材業が擡頭して勞働者を需要する頃であった。四邊の産業が斯の如く勃興せる時代であつたゆゑ、伴君が率いたる勞働者は四邊の産業に向つて走るものが多かった。

新三郎の率いたる炭山の坑夫は月餘にして大半他に走り、其本國にて契約せる條件を無視したのであつた。そこで彼れは坑夫の監督を抛棄して野外の人夫を操縦すべく考へた。彼は明治二十五年春、ポートランドに入り、先づオレゴン鐵道に人夫を供給する契約をなし、次いでエス・ピー北部線に人夫を供給した。伴君が成功せるは此時から始まつたのである。



明治二十五年、伊東米次郎は横濱移民會社の代理人としてバンクーバーに渡り、日本移民を移入したことがあつた。彼れはカナダにおいて何等の地盤が無かつたやうである。此時代において米次郎の友人西博夫は加州プレザントンに始めて砂糖ビー

ツ耕作の人夫を受負ひ、遙にバンクーバーなる伊東に向つて人夫募集の事を依頼した所が、直に百五十名ほどを送りつけられ、其始末に困つたことがある。此當時は北部地方に於いて日本人の失業者多かりしを想像する事が出来る(西博夫直話)。

註―日本移民が米國に渡りたる經路を按ずるに、其の自由渡航者は桑港に上陸し、移民會社の手を経たるものはカナダに上陸している(若干ポートランドに上陸させるものあれど)。大陸日報社編纂の『加奈陀同胞發展史』によれば、カナダ渡航者の五分の三は自由渡航者にして他は悉く移民として來りたる純勞働者であつた。

#### ◇協本勤、倉永昭三郎、 古屋政次郎等の事

明治二十五年以降、同三十一年頃までは、アイダホに田中忠七、熊本一二三。ポートランドを中心として伴新三郎。加州に長谷川源司、これ等が沿岸より山中部にかけて三角形をなし、鐵道人夫を供給していたのであつたが、明治三十一年頃から北部に於いてグレート・ノーザン鐵道の發展につれて古屋政次郎、築野一太郎、高橋徹夫、山岡音高、橋本養造等人夫供給の事業を企て、加州に於いては協本勤、倉永昭三郎等サンタフィー鐵道に人夫を供給し、次いで倉永はエス・ピーに向つて人夫を供給の新路を拓いた。

倉永昭三郎が明治三十二年においてエス・ピー鐵道に人夫を供給せる時、一日の給料一弗なりしことは日本人勞働界の驚異に

値せるほどの高給であった。此當時農園の働きすら其の繁忙の時期において一日一弗十五仙位であったので、年中休みなしで一日一弗といふ給料は非常に割合よき給料と稱せられていた。此時代より鐵道に働く日本人は其數非常に多く、在米日本人中の六割までは鐵道労働者であった。

〔日米〕No. 9026 December 17, 1924

（一〇六）

書生時代より労働者時代へ

砂糖ビーツ耕作の勃興

製糖會社の始祖と邦人耕作者の元祖

日本々土及び布哇より米國本土に向つて渡航する純労働者階級は年と共に加はり、明治二十五年、六年頃には毎船二、三百名の渡航者を見るの盛況に達した。而して其多くは鐵道労働者として収容されたのであるが茲に一八九〇年（明治二十三年）アラメダ砂糖會社が創立せられてからビーツ耕作の事業が沿岸地方に勃興して來た。同會社はアラメダ郡アラバード村に製糖所（一日に三百噸の製造能力）を設立し、附近の農家のビーツ耕作を奨勵し、會社も亦直營の農場を同郡プレザントンに開いた。本邦人にして砂糖ビーツ耕作に始めて手を染めたのは鹿兒島縣人西博夫氏であった。

明治二十四年夏、西博夫は北部の旅行より再び加州に入り、

ソラノ郡よりサクラメント市に出たが、此當時同地方には既に日本労働者及び半書生が集合し、面白い働き口もなかったもので、彼れは翌廿五年四月、プレザントンに出で、同地のビーツ園百五十エーカーの耕作仕事を受負ふた。ビーツ耕作は此當時經驗ある者は日白人を通じて一人も無かつた。彼れは此農場を引受けたが、人夫を得るに困難した。そこで晚香坡にある伊東米次郎氏に手紙を飛ばして人夫の輸送を頼んだ。

註―伊東米次郎は明治二十一年シアトル市に居住して學生々活をなし、傍廣田克己等と共同してワシントン湖畔の開墾事業に失敗した後、去つてアナバ大學に入り法學を修め、明治二十四年歸朝し、翌廿五年横濱移民會社の出張員として晚香坡に渡つた。博夫が米次郎に人夫の輸送を請ふたのは此時であつた。

博夫は明治二十三、四年の交、シアトルに旅行し米次郎等と交を結び以來、南北相呼應して同胞發展の事業に策動したのであつた。

此頃、晚香坡には毎船日本より多數の労働者が渡來し、働き口を求むるに困難していたので、米次郎は博夫の要求に應じて立どころに百名以上の人夫をプレザントンに送りつけた。僅百五十エーカーの間引仕事に對し、百名の人夫が押しかけて來たので、忽ち労働者過剰となり、博夫は其人夫の始末に忙殺された。斯で慣ぬ事業に手を染めた爲めに博夫の事業は失敗に終つたのであつた。



翌二十六年、アラメダ郡地方のビーツ耕作は上松隆人、山口彌太郎等が人夫を供給し、其の耕作面積も年々擴張せられた。

明治二十七年、馬場小三郎アブトスの山林より出でワッソンビルに到り、同地方ビーツ園に労働者を供給し始めた。この前年ワッソンビルに於いて新製糖所が設立せられた。

馬場小三郎は翌二十八年よりワッソンビルに旅館を開き、沿岸地方のビーツ耕作を受雇ひ、翌二十九年サリナス方面に進み、明治三十年同市に旅館の支店を設け、中島秀三郎、富安勝彦、竹崎犀吉、野田音三郎、高尾庄大郎等の同志を集めた。併しビーツ耕作受雇事業は大概失敗に終わったのであった。

最初ビーツ耕作受雇に手を染めた我々先輩は多く損失を招いたのであったが、之に反し日本労働者の耕作作業の信用は大いに高まった。由來ビーツの間引仕事は短期間の早業を必要とする。然るに日本人の特質は手先の作業が敏速巧妙である。之に加ふるに全部の労働者が獨身者ゆえ園主に面倒をかける憂ひがない。すべて毛布一枚の身輕者のみであるから移動が自由である。而も彼等労働者は比較的責任を重んずるの風があったので、ビーツ耕作の労働者として日本人は世界各國労働者の最上級に位し、年々勃興せるビーツ園主は競ふて日本労働者を歓迎するの氣運が生じた。

△正誤―本稿九十八中、故高尾庄大郎を佐賀縣と記せしは大分縣の誤り。

〔日米〕No. 9027 December 18, 1924

(一〇七)

書生時代より労働者時代へ

大波の如きパイオニア生活

馬場小三郎君の事(1)

書生が開いた加州の農園はさながら大波の押寄せたやうの者であった。彼等書生はパイオニアの氣分を張り詰めて各所に轉々し新境地を開いた。而も該當本人はすべて失敗の歴史を残した。そして其の後に入りし同胞が多くは成功した。

私は此機會に於いて農園卒先者の一人たる熊本縣人馬場小三郎の事蹟を記録したい。

小三郎は明治二十年十一月四日三十歳にして渡米した。彼は明治十年西南の役、二十歳にして熊本城に立籠った歴史をもっている。此當時の渡米者としては年長者の一人である。

彼れは桑港に上陸するやコスモポリタン・ホテルに旅装を解き、次いでオフワレル街の南海屋に止宿した。

(註) 南海屋は紀州人西龜之助の創立せる處、桑港日本人旅館の最古の一つとして數へられるものである。

彼が田園生活の重なるものを年曆を追ふて記せば左の如くである。

▲明治二十一年(千八百八十八年)ウインタース村ジョージ・セツセルの果物園に到り果物摘取の仕事に日本人數名を働かした。これ日本人果物摘取仕事の嚆矢である。

―同行者―高尾庄太郎、安達民雄、齊藤經雄、其他永野英太郎、岡野寛、進藤秋太郎。

▲明治廿一年の冬、ソノマ郡、フリストンに於て伐木の仕事を受負ふ。同年、ジョネ・モア氏の山林開墾をなす。

―同行者―永野英太郎、高尾庄太郎、安達民雄、岡部寛、進藤秋太郎、西博夫等。

▲明治二十二年八月桑港に於いて安倍市松（屠龍）に會し地方發展の事を談じ書生を鼓舞するの目的を以てジアマン・ホールに演説會を開き實業會を組織す。

―同志者―亘理篤治、米山梅吉、竹川藤太郎、阿部屠龍等。

▲明治二十三年、ウードランドに於て労働大會を起す。

―同志者―野田音三郎、竹崎犀吉、高尾庄太郎、西博夫等。

▲明治二十五年、河下地方に於いて伐木開墾の事業に従事す。

同志者不明。

▲明治二十六年、サンノゼに到る。ボス持逃の弊に感じ手数料の制度を協定す。

（註）此の當時サンノゼには多數の日本人ブルム拾ひの仕事に従事せしが、ボスにして労働賃銀を持逃するもの頻々たり。小三郎これを憂ひボスに向かつて労働者より一弗に對し二仙五厘の手數料を納めしむることを計り外に労働者募集の實費を支給することを定む。

當時の一日の給料一弗なりしを以てボスの収入は人夫二十人を世話監督して僅に一日五十仙を得るのみなりき。

▲明治二十七年、アプトスのヒル氏の山林に到り木村作三の率ゆる三十名の伐木人夫を紹介す。同年熊本縣人平田彦熊ワッソンビルに開墾事業を爲せる跡を引き受く。

▲明治二十八年、ワッソンビル地方砂糖ビーツの耕作を受負ふ。同年同地に機關旅館を設く。

▲明治三十年、サリナス地方に到りビーツ耕作をなし失敗を招く。同年サリナスに機關旅館を設く。

（註）此當時の旅館業者は一般的旅客を宿泊せしむる目的で設けられたるものでなく、冬季の労働者を保留する爲めに設けたものであった。随つて其設備はキャンプ同様にて蠶棚に客人を宿泊せしめ一日の宿泊料（賄附）十八仙より二十仙位であった。

〔日米〕No. 9028 December 19, 1924

（一〇八）

書生時代より労働者時代へ

大波の如きパイオニア生活

馬場小三郎君の事（二）

小三郎君が明治二十八年、九年の頃、ワッソンビルに旅館を開きし時は同市支那タウンの一隅に古ぼけた一軒を借り受けたのであった。此の家のレントは一ヶ月三弗五十仙であった。そこに素人細工の蠶棚を作り、地方に働ける日本人を止宿せしめ

た。此頃食料品として米、味噌、醤油の如き贅澤品(當時米、味噌、醤油は日用品にあらずして贅沢品であった)は未だ地方に賣捌かれていなかった。日々の賄は麥粉の團子汁であった。當時の獻立は實に簡單なもので、麥粉にて團子を作り、塩汁に若干のベーコンを切落し、それに團子を入れて客に出す、客は其鍋を取圍んで啜るのであった。此旅館に宿泊せる中島秀三郎君は當時の事を語りて曰ふ……

「馬場君の旅館には冬季十二、三人の労働者が宿泊していた。毎日團子汁の獻立で一同閉口した。馬場君は時々キャベヂを汁の中に煮込み、卵を二つくり入れたのをたべさせる事もあった。或日八、九人の労働者が野外に働きに出た。残るは我々ナマケ者の書生連である。此時馬場君は「今日は御馳走だぞ」といはる、何か變った獻立があるかと思つて食卓につくと、以前同様の團子汁の獻立である。何故御馳走といはる、かと馬場君に質すと、卵の分量が多いだらうと言はる、成る程考えて見れば十三人に對して二個の卵が今日は五人に對して二個の卵であるから「今日は御馳走ぞ」といはる、のも尤も至極だと書生連は大笑ひしたことがある」

註―此當時日用品小賣相場は大略左の如くであった。

麥粉五十斤	六十五仙
ベーコン一斤	十五仙
卵一打	二十五仙
鶏一羽	二十五仙

牛肉一斤	十二仙
砂糖一斤	六仙
米(支那及ルイジアナ米)	一斤十仙
ポテト一斤	一仙二厘
野菜物品不足	
醤油、味噌は未だ専門に輸入する商人なく、竹山商店に於いて明治二十三年頃醤油十樽を輸入せることありしが二ヶ年間を経るも賣れず樽乾きて損耗に終りたりとふ(故竹山祐嗣氏直話)	



▲小三郎君は沿岸地方に於いて數年間ビーツ耕作をしていたが、すべて損失に終り、明治三十三年、アルバラアドに來り、更にビーツ耕作を受負ふた。此時の共同者は安孫子久太郎、山口彌太郎、上松隆人である。

註―筆者尺魔は此の年馬場小三郎のビーツ耕作事務所の客となった。

▲同年馬場氏は若干の労働者を率いてフレスノに向つた。

▲明治三十三年、羅府に到り、フレスノより同地に赴きたる労働者二十名を引率してオクスナードに到り、同地の古參干濱一郎と共同してベンチュラ郡ノードフの山林に伐木人夫七十名を入る。

▲明治三十四年オクスナードに來りビーツ耕作の受負をなす。

▲明治三十六年労働大會を組織し其會長となり、メキシカンと

共同して西部農事會社に反抗し大事件を惹起す。（其の次第は後章に詳記する）

▲明治三十九年アイダホ州に到りビーツ耕作を受負ふ。

▲明治四十一年マウンテンビューに於いてトメト苗栽培をなす。

▲明治四十二年ネバダ鐵道に人夫を供給す。

▲明治四十二年オクスナードに於いて始めて傳道事業に従事し其後コロラド州に到りしも再び加州に來り傳道し、ルーミスを経て現時再びオクスナードに傳道に従事す。

〔日米〕No. 9029 December 20, 1924)

## （一〇九）

書生時代より労働者時代へ

大波の如きバイオニア生活

◇馬場小三郎君の事（3）

馬場小三郎君の田園生活は約二十一年に亘り、すべてバイオニアの氣分に充ちゝていた。彼は果物摘採人夫の開祖としてウインタースに活動して以來、山林開拓者としてソノマ郡の卒先者となり、轉じて沿岸地方ビーツ園の開拓者として始めをなし、策動甚だ努め而して理財上の失敗の跡を残している。之吾輩が同君を尊敬する所以である。君は素より理財の人でなかった。其の理財の人でなかった爲めに、同胞萬人の卒先者として新境

地を開いたのであった。世人はこれを目して事業上の失敗者といふ。然れども此失敗者なりしが爲めに、我等後進の人は随処に其活動の地盤を與へられたのであった。此の上より觀れば彼は理財上の失敗者にして開拓事業の成功者といふべきである。



馬場君が沿岸地方に於いて始めてビーツ耕作の受負をなせる頃は製糖會社が農家より買上ぐるビーツは一噸に付四弗であつた。そこで各農家が労働者に耕作を受負はしむる値段は一噸一弗内外であつた。即ち一エーカー十噸の收穫がある時は労働受負人は十弗を受取る勘定である。

製糖會社は労働受負人に對し労働賃銀の前借をした。間引に對し四弗、草取に對し二弗を標準としたのである。

右の受負値段は労働者側にとりては不利のもので、天候の如何によりては損失を招くことが多い。小三郎君が受負事業に於て多く損失に終わったのも畢竟受負値段が安價に過ぎた爲めであつた。併し此當時日本移民は盛んに渡米を企て労働者が過剰であるゆゑ後來の損得は別問題として労働口を競争する者が現れた。此競争の弊より免れんとして馬場、野田音三郎、西博夫、山口彌太郎、木村作三、犬丸政一等卒先して労働同盟を設立した。それは明治三十年であつた。

然るに労働同盟員山村幸八なるものがあつて規約を無視して安價の契約を結んだ。之が爲に同盟は破れ、各受負人は競争の爲めにすべて損失を招いたのであつた。

◇ビーツ事業大に興る

明治三十年ベンチュラ郡オクスナード地方にビーツの耕作が始まり、同三十二年にはサンタマリアガダルーブ地方にビーツ園が開けた。

註―サンタマリア地方のビーツ園は森銀之助（兵庫縣）萩谷末廣（和歌山縣）安孫子久太郎（新潟縣）の諸氏卒先して人夫の供給に當った。

又オクスナード地方は干濱一郎（廣島縣）猪瀬伊之吉（茨城縣）徳山民助（岡山縣）島田次郎（東京）原田梧一（廣島縣）等早く入りてビーツ耕作受負に従事し、馬場小三郎は明治三十四年より干濱と共同して受負ひに従事した。

サリナス地方は明治三十年頃よりビーツ耕作の大發展をなし、スペクルス砂糖會社は一日四千噸のビーツを製造する大製糖所を設立し一時は日本人關係の耕作面積三萬エーカーに上った。

明治三十二年カリフォルニア・ハワイアン製糖會社は北加中央地帯に於て直營の耕地を開き、日本人勞働者を需要した。この耕作を受負へるものは

中畑六郎（青森）秋元正規（青森）皆部梅太郎、相川民之丞、谷越勝太郎（以上和歌山）柴田嘉治（愛知）峰島儀一（千葉）等であつた。

又アラメダ砂糖會社は明治三十四年テハマ郡及ビュート郡に新耕作地を拓いた。私がビーツ耕作に手を染めて失敗したのは此

年である。

〔日米〕No. 9030 December 21, 1924)

(一一〇)

書生時代より勞働者時代へ

大波の如きバイオニア生活

野田音三郎君の事（一）

明治二十二年秋、佐賀縣人野田音三郎桑港に上陸し、暫時學僕生活を試み、翌二十三年ウードランドなるマーチン氏の葎園に働きを求めて入る。

註―此頃マーチン園には竹崎犀吉、西博夫、水留善助等の古參者が働いていた。西博夫が葎畑灌溉用エンジンの火夫を働かしは此の頃である。

▲明治二十三年冬ウードランドなるヘネゲン氏の山林を竹崎犀吉と共に開墾した。

▲明治二十四年サクラメント市を距る四哩のプライトンなるエム・ムートン氏のハップス園に摘採人夫二十四名の働き口を求め、音三郎はボス（ボスとは人夫頭又は契約業者を意味す）今城長緒（愛知縣人）は簿記方、金岡某はフォーマンとして入園した。然るに賭博常習者入り來りて勞働者に賭博を勧めたので、物堅い野田、今城等は之に退去を命じ、大紛擾を來した。此頃ハップス園、葡萄園等多數の勞働者の集合する處



には必ず博徒が入り込み賭博を企てたものであった。而して或時代（明治二十四年頃より同三十四年頃まで）はハップス園、ビーツ園葡萄園等の入夫を募集するにあたり、博徒等が卒先して入夫を集め、其報酬として農園内のキャンプ（假小屋）に賭博を開き、博徒の親分等は盆を持つの特権を與へられたことがあった。

註―「賭博の盆」を持つといふことは博徒の親分等が賭博に加はる労働者より其の勝高に應じて手数料を徴収することを指す。

▲明治二十四年九月音三郎は若干の労働者を率いてフレスノ市に到りバトラー氏の葡萄園に入夫を供給す。

註―此年峰島儀一、松岡謙等ベーカーフィールドよりフレスノに來り、ハンフォードなるルーサン・ベニヤードに入夫を供給す。又中畑六郎、鍋島政善等フレスノに到り葡萄園の働き口を求む。

▲明治二十五年オロビル（ビュート郡）にて山林開墾の事業に従事す。此の事業は桑港に設立せる日米用達會社に申込めるものを音三郎が引受け二十四名の入夫を率いて開拓に従事したのであった。然るに此入夫の労働賃銀は契約者たる日米用達會社に向け直接支拂たるも、同社員は之を消費したるを以て音三郎は労働者たり賃銀を迫られ頗る迷惑を感じ、私財三百餘弗を労働者に分與して一時を治めたことがある。

註―明治二十六年十二月廿四日桑港發行『金門日報』に曰く

「音三郎は一時自分が所有せる三百餘弗を労働者に分與したり。暫くして労働者は二たび三たび益々野田氏に迫りて其殘額を請求して止まず、然れども同氏は兼ねて温厚にして労働者を慈むの人なれば労働者も亦氏を信ずることを極めて厚ければ氏は其の顛末を述べて日米用達會社より返金するまでの猶豫を乞ひ萬一用達會社が返却を誤りし時は自ら其の返済を負ふべしと約したり。さて再三再四用達會社に嚴談せしも到底同會社よりは支拂ふこと難ければ一通の借用證書は菅原傳、日向角太郎（輝武）より差入れたり。且其證人として松岡辰三郎、滿留某（善助）にも記署せしめたり。斯て一時は事済みたりしも間もなく返却期日に至りしにより野田氏より其の返金を促せしも未だ日ならずして菅原氏歸朝し、残るは日向一人のみ、彼は年尙若し到底談判しても埒明かざれば菅原氏の歸桑を待つことに決したり」云々。

（因に記す―此の賃銀の中若干は明治三十三年菅原氏より澤格三郎を介して送金したり）

〔「日米」No. 9031 December 22, 1924〕

(一一一)

書生時代より労働者時代へ

大波の如きパイオニア生活

野田音三郎君の事(2)

▲明治二十七年彼れはヨーロ郡なるドクター・スナイダーの農園に入り、ハップス及豆類の耕作に働いた。此時始めて米作の試作をしたのであった。

米作業者は今日でこそ加州主要の産業となっているが、音三郎がヨーロ郡サクラメント河沿岸に於て試作せる頃は該耕作は殆ど不可能とせられていた。

▲野田君が最初の米作は莖の長さ八尺に餘り、穂に實が熟らなかつた。すべてシイナであつた。此の當時加州の米作に就いて我々書生間の研究は、第一加州の氣候は夜間冷氣甚だしきゆえ登熟不可能だといひ、第二川下の土地は腐植土にして窒素分多量なるため登熟不可能なりとの二説があつた。今日から觀れば何れも素人論である。要するに耕作の方法を知らぬから失敗に終つたのであつた。

註一 一九〇六年(明治卅九年)合衆国政府はビュート郡なる合衆国種物試験場に於いて世界各種の米種を試作したが、登熟するに至らなかつた。よつて米作不適地として斷念せんとした。此の當時サクラメント市の北方メリスビル市を距る三

十哩の地、ピグス附近にウイリアム・グランドなる人、其地方の粘土アルカリを多量に含み居る土地を利用せんとし、日本人津田某をして水田作を試験せしめたが、第一年目は登熟せず。翌年更に加州農科大學生二名を聘し再度試作を行ふたが、これ亦失敗に歸した。翌一九〇八年東印度人をして試作せしめたるも三度失敗に歸した。此の當時米國南部米作地方を視察したる安岡徳彌外數名の者、印度人失敗の後を引受け廿五エーカーの米作を繼承して米田に入つた。頃は六月中旬で、水田は龜裂し稻は將に枯死せんとするの有様であつた。安岡等の枯死の状態にある米田を印度人に代りて手入れをなし意外の成績を挙げた。即ち一株二十本以上の分蘖を見、八月下旬より出穂し、九月初旬には登熟し一穗百粒以上の結實を見たのであつた。

そこで加州の土地氣候は米作に適せないのではなく、耕作の方法を知らなかつたのだといふことに結論され、一九一二年(大正元年)千四百エーカーの耕作面積、翌一九一三年には六千二百エーカーの耕作面積に上つた。野田音三郎が卒先して安藝商會(櫻府)と共同し米作を試みたのは此の時である。

筆者尺魔は此の當時櫻府に在住し野田音三郎の米作事業に加はり、箕輪太忠と共にコルサ郡に於て百エーカーの米作をなし、好良の成績を挙げたが、同年十一月の大雨のため收穫物の大半を河水氾濫の爲めに流失し損失を招いたことがある。

▲明治二十九年モントレイ郡ビーツ事業の勃興と共に同地に

移住し、馬場小三郎、竹崎犀吉、西博夫、山口彌太郎等と共にビーツ耕作の受負をしたが、總て失敗に終る。

▲明治三十年モントレー山林開墾の仕事を受負ふた。

◇野田と漁業

▲明治三十一年春、音三郎は伐木人夫若干名を率い小舟を借りてモントレー灣に遊んだ。此連中の内日本の「はへ縄」を知って居たものがあつた。「はへ縄」とは絲に鈎を連らね、これを海中に投じて魚を漁する術をいふ。處が其「はへ縄」に魚が澤山かゝつて小舟に積みきれぬ程あつた。彼れはこれよりモントレー灣の漁業が有望なることを知り、山林開墾者より轉じて漁業家となるに至つた。

註―此の當時モントレーには伊太利人、支那人の漁夫少數あるのみであつた。

〔日米〕No. 9032 December 23, 1924)

(一一一)

書生時代より労働者時代へ

大波の如きパイオニア生活

野田音三郎君の事（3）

▲野田君は事業家の風格をもっていた。私は敢て資格といはない。蓋し風格と資格とは其の實質に於いて差異がある。彼れは見るもの聞くものすべて之を事業化するの感興をもっていた

が、理財の術に於ては古武士其まゝであつた。

彼は策動することに於いて、當時代の代表的人物であつた。而して其の勇敢なる氣象は古武士の態度であつた。但し惜むべし彼は一個の無教育の野武士であつた。その計畫せるものはずべて先人未發の新計畫であつたが、時代早きに過ぎ、相棒に適材が無かつた。彼れは多年の開墾事業より一轉して漁業家になつた。けれどもそれはモントレー灣遊興の副産物に過ぎない。

▲明治三十二年彼れはモントレー沿岸の鮑及び鰯捕獲の業に興し、次いでブース氏と共同して罐詰製造所を設けた。此の事業は最初の試みなるだけ悪銭苦闘を續け、後ブース氏に譲り渡した。

▲明治三十四年モントレー附近の山林開墾の副業としてタンニング・バークの製造業を始めた（タンニング・バークは製皮用木皮をいふ。モントレー附近のオーク・ツリーの皮は其原料として好適なるもの）彼れは電氣動力を用いてタンニング・バークを製粉し、これを日本の製皮會社に送つたが、遂に損失に終つた。

▲明治四十年（一九〇七年）安孫子久太郎と交を訂し、彼れは日本人聯合協議會副會長に擧げられ、同會を代表し學童問題の真相及移民問題に關し、華盛頓駐在日本大使青木周藏子を訪問して陳情した。北部ワシントン州より高橋徹夫代表者として派遣せられた。

註―此の當時日本人聯合協議會長は安孫子久太郎氏、幹事池田五六氏であった。桑港領事館は此年昇格して總領事館となり小池張造總領事として赴任す。

當時の通商局長たる石井菊次郎氏同年八月十日渡米、米國各地日本人の事情を視察す。

▲明治四十年音三郎は米國殖産會社の創立と共に其支配人となる。

米國殖産會社は後章に於いて詳述するが、明治三十九年日米勸業社によりて創立されたる大和植民地經營の後を承けて設けられたる株式會社である。其顔觸れを見れば左の如くである。

安孫子久太郎（社長）野田音三郎（總支配人）皆部梅太郎、

峰島儀一、鷺津文三、井木久次郎、駒田常三郎（以上取締役）

註―米國殖産會社は資本金二十五萬弗、營業年限五十年、營業項目土地賣買、農產物販賣等。

▲明治四十三年音三郎は加州農業家を説き同年スタクトン市に老農大會を催した。これが後來加州の日本人農會となったのである。老農大會の事業としては農業雜誌を發行すること、其の主任は鷺津文三（尺魔）千葉豊治の兩氏に委託すること、決議したが四、五回發行した後永田稠（現日本力行會長）これを引受け數號の後廢刊した。

註―鷺津文三は明治四十三年十月歸朝し、大正元年四月再度渡米した。此間永田稠『農報』を經營したが、収支償はずし

て大正三年に廢刊し、次いで彼は歸朝したのであった。

▲大正二年（一九一三年）コルサ郡モオトン園に於て五百エーカーの米作を試み、好良の收穫を得たるも十一月の降雨に流失さる。

▲大正三年オークレーに於いて岸吉松と共に米作業をなす。支配人大西虎一氏。

▲大正四年加州各地を巡遊して農會の必要を説き、同年病を得てサクラメント市ホワイト病院に死す。嗚呼彼は實に花の如き生涯であつた。而して貧苦を以て一生を終つた。

〔日米〕No. 9033 December 24, 1924)

## （一二三）

書生時代より勞働者時代へ

大波の如きパイオニア生活

野田音三郎とマグダレナ彎事件

屁のやうな事から天下の大問題となつたのは古來其の例が可なり多いが、墨國ローア・カリフォルニア州マグダレナ彎事件ぐらいベラボーの噂を立てられたのは例が尠いであらう。私は此の時からアメリカの新聞紙に少しも信を措かぬことにきめた。

マグダレナ彎事件は一九一〇年野田音三郎が安孫子久太郎の旨を受けて同地を視察することから起つた。其次第は下の如く

である。

千九百十年、墨國ロニア・カリフォルニア州に廣大なる土地所有の特權を有せる會社があつた。其名稱はロニア・カリフォルニア開發會社といひ、米人ブラックマン氏が社長であつた。同會社は曾てロニア・カリフォルニア州に於て產出するオチアと稱する染料採取のために特權を得たのであつたが、同染料は獨逸科學の進歩により代用品が發明されし爲め無用に歸した。

そこで此廣漠たる地域を農耕地として開拓するの計畫が立てられたのであつた。

ブラックマン氏は千九百十年、正金銀行桑港支店長藤平純三氏の紹介によりて、日米新聞社長安孫子久太郎氏に會し、同土地を日本資本家に賣渡したき希望を述べた。茲に於て安孫子氏は一應實地視察の必要を感じ、同年野田音三郎を派遣し約一ヶ月に亘りて視察せしめた。此の同行者は社長ブラックマン、同社員ハーランド、モーガン（有名なる富豪モーガンの甥）及び野田音三郎等であつた。

註―墨國ロニア・カリフォルニア州マグダレナ灣を中心とせるブラックマン氏の特權地は、同灣を中心として南北四百哩、幅十五哩にて四百五十萬エーカーの廣區域を有し、降雨も少きも牧畜に適し、海岸一帯の地漁業に適するといふ（故野田氏直話）

右使節團が未だ施行より歸らざる三日前、羅府及び桑港エキミナーは、驚くべき虚構の記事を連載した。其大要に曰く

……

「墨領低加州は日本と一葦帶水を隔つる隣國にして、我南部海軍根據地たるサンデゴ―とは指呼の間にあり。然るに同州の名港マグダレナ灣を中心とせる五百哩の地は今や日本政府の後援により、某々の手に買収せられんとす。合衆國は將に隣邦を根據とせる東洋人の爲めに威嚇せられんとす。陰險なる日本政府は米國―特に合衆國に最も近き處の港湾に海軍根據地を構へんとせり」

右の記事論説は約一ヶ月に亘りて虚構と捏造とを以て連載せられたのであつた。事情を知らぬ華盛頓政府及上下両院は此の記事を見て大に驚いたのであつた。

そこで此虚構の記事は上院の問題となつた。此の當時外交委員長たりしロッヂ氏は此問題の爲めに左の決議案を通過した。

「外國政府が米大陸の樞要地に廣區域の土地を買収することは米國に向つて敵意を有するものと認む」

註―此當時の駐米日本大使は内田康哉、康哉は一九〇九年より一九一一年まで、時の米國々務卿はノックス氏であつた。

此時、日本政府はマグダレナ灣買収の事など夢にも知らなかつた。エキミナー紙が虚構を傳へそれを米國上院が取り上げるに至つて始めて驚いた。そこで日本政府は右様のことに何等關係がないといふことを聲明して此の事件は煙の如く消えた。嘘から出た眞とは蓋しこんな事件を指すのであらう。

私は米國の新聞紙には信を措かないが、米國新聞記者の想像



力には感服する。多くの日米関係記事が米國人の手に成れるものは誤報の分量が多いほど米國人の心持を赤裸々に現しているやうだ。

〔「日米」No. 9034 December 25, 1924〕

(一一四)

日本移民の勃興と日本食料品商(一)  
各商店の屈起

前述の如く明治三十年以前の農園生活は麥粉の塩團子汁であった。而して明治二十五年、六年頃より日本及び布哇轉航の移民が多數渡來するに連れ、日本食料品の需要は漸く盛大となった。此の氣運に促されて勃興した日本食料品商は、明治三十二年、三年頃から頭を擡げて來た。試みに其當時の事情を記せば左の如くである。

▲富士合資會社……これは明治二十四年頃桑港第五街に開業し、静岡製茶輸出を主とし、傍日本雜貨を商ひ、日本食料品輸入商として卒先したものである。米、醬油、味噌、日本各種罐詰は富士商會が最も早く輸入している。

明治三十年(一八九七年)桑港發行、『日本新聞』『新世界』及び『肥はづ誌』の廣告に左の如きものがある。

(廣告)

▲竹材大安價、大中小諸々。

此他白米、製茶、醬油、味噌、梅干、奈良漬、乾物一切、筆、墨紙、字書、會話、小説、日本雜貨、シルク、ハンカチーフ等クリスマス贈り物色々。

サンフランシスコ府

第五街一二〇

富士合資會社

オークランド市

ワシントン街九六三

同 支店

サンフランシスコ

マーケット一三六二

同 支店

▲井手商會……井手百太郎の創立にして明治二十五年頃開業し、茶、カヒー、日本雜貨を商ふ。明治三十年の廣告によれば

△井手商會廣告

新小説及時代物小説類、日本雜貨、食料品種々、ハンカチーフ、カップ、ソーサー、其他いろいろ大安賣

サンフランシスコ第五街

二百〇一ミッシオン街角

明治三十一年竹山商會の跡を引受けて日本雜貨店を開業せるは高尾(鶴松)飯島兩氏であつた。此商店は日本商會と稱し、ゲリー街四百三番に於いて日本陶器、漆器、銅器、絹物、唐木細工、美術骨董品等を販賣した。しかし日本食料品は専門でな

かった。

◇國産社、堂本商會、旭株式會社、駒田商會

（一）國産社……石川縣人加藤誠六、村田耕共同の發起になり明治三十年創立。

營業項目 日本小説、書籍、雜貨、乾物、干魚、醬油、味噌、罐詰、其他日本食料品一切。

註―國産社は最初ポスト街四〇七番に開業し、後エリス街百十番半に移り、翌年ジュポント街に發展した。ポスト街に始めて開業せる頃は財政困難にして加藤夫婦及村田氏等は餡餅を拵へて之を市内の日本人に賣歩いたこともある。

後年村田氏、著者に語りて曰く

「此當時君の發行せる腮はづ誌には一ヶ月廿五仙の廣告を出したが、君が廣告料を請求に來る時、實は廿五仙がなかったので明日の延期を乞ふたことがある。あの頃の廿五仙は現今の二百五十弗よりも尙苦しかった」云々。

（二）堂本商會……明治三十二年創立、最初桑港オフワレル街四一八に植木商店を出し、此の時堂本譽之進は専ら貿易業に當った。

（三）旭株式商社……和歌山縣人塩野馨、鳥淵一等の共同にして桑港デュポント街五〇九に本店を有しサクラメント市第六街百二十番に支店を有し、専ら日本食料品を販賣す。

（四）駒田商會……明治三十四年の創立にして日本食料品、清酒輸入を始めた。

以上富士合資會社を筆頭として日本食料を輸入するもの六個に達した。是等が日本食品輸入の魁をなしたのであった。而して在米同胞は明治三十一年以後から團子汁を離れて米と味噌とにあり附いた。

〔「日米」No. 9035 December 26, 1924〕

（一一五）

#### 日本移民の勃興と日本食料品商（二）

今日自由に味噌、醤油、あらゆる日本製の罐詰を常用する在米日本人から考ふれば、我々先輩の渡米した頃の食料品が如何に貧弱であつたかを想像し得らるゝであらう。實に明治三十年以前の在留同胞間には市中といへども味噌、醤油は自由に得られなかつた。況や田舎に於いてをや。當時、或者は既に日本米を輸入した。醤油、味噌も輸入し、日本酒の如き、明治廿五年頃、和歌山縣人西龜之助は一ガロン五十仙で田舎のキャンプに供給したこともあつた（竹崎犀吉君直話）しかしそれは異例であつて、日本人一般の生活とは没交渉であつた。

註―尺魔が明治二十七年渡米せる時、オシアニック號のボーイ某から、醤油一樽を丸一旅館に届けることを頼まれた。私はこれを快諾して、同旅館に届けたことがある。此當時日本醤油が在米日本人に普及せざりしことを窺ふに足る。

明治二十七年、富士商會二十俵の日本米を輸入す。桑港新聞

社は其中の二十斤を割きて社同人にたべさせた。以來桑港新聞社は廣告と差引にして同商會より日本米を買ふた。

日本人が田舎生活において米食を始めたのは明治三十二年（二八九九年）以後の事ある。即ち明治三十一年以來勃興せる桑港日本食料店が促したる商業的努力である。



私が渡米せる明治廿七年、澤木吉三郎（後に三郎と改稱し、東洋汽船會社文書課長となり、現今退社）といふ人が桑港新聞の佛國探偵小説を翻譯していた。此人は頗るの好々爺であつたが、併し面白い預言をされたことを覚えてゐる。澤木君の説によれば、今後日本人商賣としては日本食料品の輸入が最も有望であるといふことであつた。此の當時、私は同君の計畫を馬耳東風に聽き流した。私はどういふものか商賣に興味を持たなかつた。處が澤木が桑港を去り三年後には富士合資會社は大々的に日本食料品を輸入し、堂本譽之進もまた日本食料品の輸入を始め、次いで國產社、旭株式商會、駒田商店等盛んに日本食料品を輸入し數年ならずして日本食料品の全盛を來したのであつた。試みに明治三十七年（一九〇四年）頃の物價表を一瞥して見ると

△桑港小賣相場

菊、櫻正宗	四斗入	廿二弗
萬上印味淋	一瓶	六十仙
龜甲萬醬油	一樽	二弗八十仙

鰹節	一斤	五十仙
數ノ子	一斤	十五仙
味噌	五貫五百目入	二弗
浅草海苔	小判一帖	十二仙五厘
椎茸	上等一斤	七十五仙
出し昆布	一斤	十五仙
奈良漬	小樽	一弗七十五仙
高野豆腐	百個	五十仙
寒天	十本	十五仙
晒木綿	一反	五十仙
宇治茶碗入極上	一斤	二弗五十仙
鰻、焼小鳥	一個	廿五仙
其他の罐詰	一個	二十仙
きなこ白玉	一個	十仙
こんにやく粉	一斤	二十五仙
メレンス友仙	一反	三弗七十五仙
同水色其他	一反	二弗半
貝類罐詰	一個	十五仙
罌紙	一帖	五仙
ダイヤモンド	一個	五仙
ライオン	一個	五仙
花王齒磨き		五仙
竹塗箸	百膳	三十五仙

燗德利	一個	五仙
盃洗	一個	二十仙
梅干、紅生姜	一斤	十五仙
干瓢、干連根	一斤	二十仙
切り麴	百個	十五仙

（以上當時の駒田商店、及國產社の廣告に據る）

〔日米〕No. 9036 December 27, 1924)

## （一一六）

### 日本食店の發達

#### 古代食店の歴史考

日本食料品商の勃興を記録する序に日本食店……料理屋のことを書いて見る。

日本移民の多數が北米に渡りかけた明治二十五年頃は料理屋と稱すべき氣の利いたものは皆無であつた。此時代はすべて飯屋時代で西洋料理と異なるところはブレッドの代りに飯があり、塩の代りに醬油があり、牛豚肉の代りに魚肉を用いるに過ぎない。

註―明治二十年萩原眞（山縣縣人）始めて日本飯屋をサクラメント街とスタクトン街の角に設く。大和屋と號す。同年オークランド市に氣樂亭なる飯屋（村田某の手によりて開業せられたが収支償はずして廢業した）

▲彦大は明治二十二年頃、オークランド市に於いて吉田某なる人開業し、料理人として上田彦太郎天ぶらを始め、後明治二十四年頃セッシ街に引移つた。

▲この當時金鐵と稱する者、ターク街に日本飯屋開く。年月不肖（以上明治十八年渡米者、森銀之助直話）

▲大和屋は明治二十四年駒田常三郎之を引受け大黒屋と改稱し、明治三十年デュポント街五百十九番に引移り、日本より清酒を直輸入し、盛大を極めた。

▲明治二十五年藤田某ポスト街に千代志と稱する日本料理店を開く。岡山縣人小形多吉料理人として同家に入り、翌二十六年兵庫縣人吉本寅吉之に代はり營業す。（吉本は桑港震災後サクラメント市第三街に千代志なる料理店を開き、本年十二月二十日頃まで繼續し唐川氏に譲り渡した。一人の主人で代替はりなしに經營した料理屋は實に千代志の吉本が最長者である。彼は明治二十六年から大正十三年まで三十一年間繼續したのであつた）

▲小川亭は明治二十七年小川多吉によりて開業せられ、エリス街百十番の袋小路の物置を改築し、日本風の座敷を設け、翌二十八年妻梅を呼寄せ、酒席に斡旋せしめたので桑港評判の料理屋となつた。

明治二十八年より同三十一年頃までの日本料理屋には婦人の給仕は實に稀であつた。小川亭の妻君が始めて座敷に現れ、酒客に興を添へるために三味線をひいたのが始めである。

明治三十一年一月オツファレル街百二十六番に群鶴樓なる料理屋が開業された。此時二人の美形が酒間を幹旋し、三味線を鳴らしたので桑港日本人の評判となったことがある。此當時の桑港の食店を掲げると大略下の如くであった。

千代志(男給) 小川亭(男女給) 大黒屋(男給) やぶそば(男給) 群鶴樓(女給) 旭昇庵(男給) 柳中庵(男給、うどん、そば)



此當時の料理の値段は左の如く安價である。

日本酒 (一合五勺入り)	十五仙
ビア (パイント入り)	十五仙
さしみ (一皿)	十仙
煮肴、焼肴、てり焼	十仙
すひ物	五仙
飯一人前	五仙
うどん、そば、盛りかけ	五仙
同上種物いり	十仙
うなぎ及親子丼	十五仙
女給仕祝儀	廿五仙より五十仙

但し三味線附長座の時は一弗位

事情右の如くであるから、宵の口から料理屋に入り曉に至るまで飲み明かした處で、一人前二弗も使へば事足りる譯である。併し我々の如き素寒貧の書生は、そんな大金を使ふ譯にゆかな

い。明治二十八年頃小川亭で數回に亘つて二弗の借金が出來、女將お梅さんに催促を受けて一ヶ年ほど逃げ廻つたことを記憶している。  
註―此の頃料理屋の客人は大概一人飲料附五十仙以内の散財であつた。

〔日米〕No. 9037 December 28, 1924

(一一七)

#### 古參在米日本人料理人の事

##### ◇生稻忠兵衛

明治二十四年渡米一時桑港大和屋に居り、後佛國巴里博覽會に到り日本料理店を開く。

忠兵衛は東京兩國「生稻」の長男にして料理裝飾に妙を得たる人、後シカゴ、セントルイス、桑港の各博覽會に代表的料理人として腕を振ひ、後紐育、桑港に料理店を開きたることあり、世界各地を跋涉すること三十餘年。

##### ◇本田勝藏

明治三十一年駒田常三郎經營の桑港大黒屋の料理人として渡米。後大黒屋を引受け、其の後ポートランド市に料理店を開き、小川ホテルに料理人として働きしことあり、現今スタクトン市に恵美須屋を經營す。

##### ◇堀菊次郎



明治二十九年渡米、小川亭其他に働く。菊次郎は和歌山縣人にして大和糧原宮にて古典的料理を修業し、後近衛師團の酒保を引受けたることあり。料理法は古流なれども篤實の人なり。最近まで小川ホテルの料理人たり。

◇吉本寅吉

明治二十六年桑港「千代志」の料理人として渡米し、翌年「千代志」を引受け自ら料理人となりて經營す。彼れは料理に興味を持ち、特に上方流の器物をそなへ、一事一物と雖も他人の手を借ることなくして板前に立つこと四十年なり。彼れは安政五年の出生、堀菊次郎、故小川多吉、米津彌吉と同年に生る。

◇茂呂定次郎

明治三十三年大黒屋の招聘により渡米す。定次郎は相州小田原の産、十四歳にして東京に出で、久保町「梅茶」に働き、一人前の料理人となるや關東八州を巡業し、後吉原（柴屋町）淺草島原（居屋町）に腕を磨き斯道の達人として尊敬せらる。米國に於て弟子頗る多しといふ。

◇小林榮吉

明治三十四年大黒屋の招聘によりて渡米す。榮吉は福島縣の産。若年にして東京に出で各所に修業し、宮内省御用の重詰を引受たることあり。茶料理に堪能なり。後大黒屋を引受け、桑港震災後山中部に到り、近年加州に歸りフレスノ、桑港各地に腕を振ひしが、現時羅府に大黒屋を再興して經營す。

明治三十五年前に渡米せる料理人として私の知れるものは右の人々である。而して其の當時そばの名人として、すしの名人として有名な人があつたが唯今記憶していない。やぶそば、捲すし等は桑港最古のもので何れも日本の専門家によりて始められたと傳へられている。又竹本梅壽が始めた「青柳」は素人加藤藤次郎が、茂呂定次郎から「ころも」を教さはり、次いで勝路某といふ人が熱心に經營し、現在の劍持に至つたもので天ぷら屋としては長く續いたものである。

明治三十六、七年の後澤山の料理人が渡米して各其長技を發揮しているが、中には素人も澤山居るやうである。

在米日本人の料理界は明治三十五、六年以後、美形本位となつて料理は第二第三に置かれた形である。従つて料理の方は大いに墮落して來つた。之れは日本人社會の罪で、料理人の罪でない。女と酒とでヤツコラサ節の流行する社會には長唄や清元や義太夫が發達せぬと同時に料理も自然と田舎くさくなり、茶碗むしや、味噌汁に砂糖の入っている珍品が現れる。醬油に「山サ」や「ヒゲ田」が賣れずして「キコーマン」に羽が生えて飛ぶ世の中だから、我々は無常を諦める外に方法がない。ローマの文明が野蛮人に蹂躪されたり、日本人が米國で排斥されるのも時世だ。獨り料理だけに向つて憤慨するのは愚であらう。

〔「日米」No.9038 December 29, 1924〕

(一一八)

労働時代より借地時代へ(二)

記憶すべき明治三十三年

移民の大渡来

◇黒死病事件

私が加州中原の活動に参加せんとして六ヶ年間住みなれし桑港から飛び出した明治三十三年(西暦一九〇〇年)は實に多事多端を極めた年であつた。此當時我れ等新聞業者は、桑港の一隅に於いて愚にも附かぬ小ぜり合をしている間に、世界は駭々として進んだ。實に世に遅れていたものは我々桑港學生と其の學生を相手に新聞を發行している一群であつた。



米西戦争が明治三十一年二月に始まり、米軍は破竹の勢を以て西班牙植民地を攻撃し、キューバを取り、マニラを陥落し、同年十月講和成りてより、翌明治三十二年及三年にかけて米國は驚くべき産業の勃興を來たした。此産業の勃興に伴ふて日本移民も亦潮の如く米大陸に渡航した。毎船桑港の波止場には六七百名の移民が集來し混雜を極めた。

註……明治二十九年、日本郵船會社は日清戦争終結と共に御用船の解除を機としシヤトルに新航路を開き、日本移民北部直航の道便ならしめた。又、明治三十一年、東洋汽船會社、日本桑港間に三艘の新造船(日本丸、アメリカ丸、香港丸)

を浮かべて定期航路を開く。

試みに同年前後に於て渡米せる日本移民の數を擧ぐれば、

明治三十一年	二、二三〇人
全 三十二年	三、三九五
全 三十三年	一二、六二六
全 三十四年	四、九〇八
全 三十五年	五、三二五

即ち明治三十三年は日本本土より米大陸に渡航せる移民が絶頂の大多數を示した年である。

同年、五月七日桑港職工同盟の首領等主唱となり太平洋沿岸の労働同盟を誘引して桑港に市民大會を開く、此大會には當時の桑港市長ゼームス・フィラン、スタンフォード大學經濟學教授ロース氏等出席して、日本人排斥の演説を爲し日本人排斥を中央議會に勧告する旨の決議をした。是組織的に日本人排斥を決議せる始めである。



同年五月中旬、黒死病注射事件なるものが起つた。

桑港、支那タウンに黒死病患者が現はれ、同時に日本人横田彌惣平なる者、支那人町に多數の賣春婦を置きたるに其中二人黒死病に罹つて死んだ。市衛生局は之を探知し直に非常線を布き、カリフォルニア街より、カネー街、スタクトン街五町四方を傳染危険地帯として通行遮斷を行ひ、且黒死病は東洋人の所産なりとの故を以て、オークランド渡船場に醫員と警吏を派遣

し、日支人の渡船者に限り男女共強制注射を施した。

右事件はいたく日支人を憤慨せしめ、華盛頓駐割の日支兩國公使に向つて抗議を申し込ましむべく請求した。暫くして黒死病は鎮靜して事件は有耶無耶に終つた。併し日本人の憤慨は甚しいもので、此時在留同胞は臨時協議會なる團體を組織したことがあった。

註……同年支那に拳匪の騒動が起り、日、露、英、獨、米、の列國は聯合軍を支那に送り、特に日本軍は中堅となりて鎮定に努む。



私が田舎に出たのは黒死病の騒ぎが濟んで間もなき頃であつた。六年間の桑港蟄居から加州の中原を眺むれば、茫々漠々たる平野が人待顔にひかへて居る。野も山も廣い。

「此國はどこまで行くも荒れ野なり」

「どこ迄も山なり河なり麥畑」

これが櫻府平原に於ける最初の感興であつた。

〔「日米」No. 9040 January 4, 1925〕

（一一九）

勞働時代より借地時代へ（二）

記憶すべき明治三十三年

布哇の黒死病事件

醜業婦のエキサツ

◇日本島、支那島、白人島

黒死病事件（明治三十三年桑港の出來事）によりて聯想せらるゝことは布哇に於ける同事件である。同島に於ける日本人はホノル、を中心として商業的發展を促したのであるが、明治三十一年（一八九九年）十二月初旬ホノル、市支那人居住區域に於て黒死病患者發見され官憲は其撲滅に全力を盡したが容易に成績を擧げることが出来なかつた。そこで大英斷を以て翌一九〇〇年一月二十日罹病區域の家屋を焼拂ふた。然るに折柄の強風にて風下に居住せる日本人商店は二三を残すのみにて全焼の厄難に遭ふた。之が爲め同地商業家は大打撃を蒙つた。

（註）布哇政府は其後火災の損害を賠償した。けれども日本人は數年間復舊に苦しんだ。

桑港において、支那タウン醜業屋横田彌惣平の家から、黒死病患者を出したのは偶然といへば偶然、因果といへば因果である。此當時彌惣平は支那タウン切つての醜業者の巨頭で、クレー街邊に醜窟を構へ、更にパイン街に新建築の醜窟を持ち、ポスト街目抜き場所に美術店を開業していた。

此當時は實に醜業婦全盛の時代で、特に日本人學生は桑港の白人家庭にスクールボーイとして酔生無死の生活を續くるものが多く、田舎に於ける農民階級の労働者等が筋骨を働かし其餘暇桑港の都會に出で一夕數十金の豪遊を試むるを見て、惡魔の所行と非難していた頃であつた。特に基督教會に屬したる書生連は其眼界豆の如くであつた。

教會派の青年等は此當時もなほ醜業婦撲滅を高唱していた。然るにも拘らず、醜業婦の數は廢娼運動と反比例に増加したのである。

註……明治十九年、清水花が始めて元祿振袖の姿にて七名の女を店頭に掲げてより此方、セントメトリー、モルトン、クインシー等廣區域に亘り日本醜業婦は白人相手のもの一時百五十名以上に達し(當業者天草信の直話) 明治二十七年より日本移民の増加するに連れ、ブッシュ街、パイン街等に日本人相手の娼婦現れたるも明治三十年までは其數十五人を超えず(新世界社會部玉井氏直話) 而して明治三十三年より明治三十五年に至りて白人相手の娼婦漸減するに随ひ支那人相手のもの其數を増加し、一時二百名以上に達した。

日本人醜業者はひとり桑港のみでなく、北はオレゴン州、ワシントン州にも明治二十六七年頃から多數であつた。特にポートランド市には水夫連の結社せる醜業婦輸入團があつて、彼等は官憲に取り入り、移民官に贈賄して醜業婦を輸入したと傳へられている。

醜業婦輸入の史實に關しては別に一卷の書物を現す者が後來あるかも知れぬ。私は唯だ外形を記すに止めて置く。

× × ×

明治二十年代に於ける日本人は旅券の必要なくして上陸したのである。故に女が渡航するにも別に旅券は必要でない。移民官は其国籍と目的とを形式的に質問するの外、其内事に關して調査しなかつた。

註……當時婦人は太平洋沿岸に不足していたので、女の渡米は寧ろ歡迎された形であつた。珍田領事時代(明治二十四年)に日本から五名の婦人が獨身で渡米した事があつて移民官は疑はしと見て上陸を拒絶したことがあつた。然るに珍田領事は、此婦人をすべて日本の令嬢なりと證言して上陸を許された。

(「日米」No. 9041 January 5, 1925)

(一一〇)

勞働時代より借地時代へ(三)

予が借地耕作の失敗

前章に記述せる如く、在米日本人の始めは學生を以て大部分をなし次いで明治二十四五年頃から、本國よりの農民階級、布哇よりの轉航移民が三四年を期して出稼ぎの爲めに渡米したのである。日本人が明治二十年代及び明治三十年代に渡つた者の

中、學生は別として、移民階級の者はすべて三年乃至五年間、米國に出稼ぎする目的で渡つたのであつた。否、其以後に渡つた者といへども出稼ぎの目的で渡つたものが九分九厘である。實に日本人は米國を墳墓の地とすべく覺悟を定めて移住したものは殆ど絶無といふて差支がない。其證據には日本人が渡米に際して妻子を帶同したものは殆ど無かつた。

日本人は米國に渡る當時、既に出稼ぎの考へていたのであつた。それゆゑ明治二十五年頃より明治三十五年頃までは土着永住の志しを起すものは皆無で、すべては水草を追ふて轉居した。即ち甲の勞働地より乙の勞働地に毛布を擔いで轉々したのであつた。そして或る者は鐵道に於いて或者は農園に於て若干の金を貯へ本國に歸つた。即ち貯蓄あるものは歸國し未だ貯蓄なきものは止まつて各所に轉働した。これ明治三十五年頃までの在米日本人の實狀である。而して此頃土着永住の覺悟を起さしむべく一般を鼓吹したのは我々數輩の同志である。

（註）明治三十年代の成功歸朝者は大概貯蓄高二三千弗に上らなかつた。

私は明治三十三年、アルバラアドの農園に出で同年夏始めてサクラメント市に到つた。此當時サクラメント市は日本人農業の策源地として加州に冠たる地位を占めていた。

（註）此當時は北加中央部のビーツ園勃興の時代で農園ボスの古參竹崎犀吉、犬丸政一、中畑六郎、寺澤六之助、秋元正規等或は葡萄園に或は山林開拓に或はビーツ耕作に或はハップ

ス摘取仕事に活動していた頃であつた。此時代は實に農園に於ける群雄割拠の時代とも稱すべき時代である。

私は此年安孫子久太郎と共にビュート群チコに到り私巽鐵男の果物摘採仕事に人夫供給の手傳ひをし、同年冬同郡ノードの山林開墾の仕事を受負ふた。（共同者大丸政二）

ノード山林開墾の事業は明治三十三年の冬より翌三十四年三月に終つた。此間私は伐採せる薪千二百コートをカリフォルニア・ツランスポーテーション會社に賣り約千五百弗程の利益を得、これを資本としてスミス・エンド・カレーの農園二百五十英加を租借しビーツを耕作した。此當時、二百五十英加の現金借地をしてビーツを耕作せるものは私以外に其類が無かつたと稱せられた。無經驗の一書生が此の企ては突飛といへば突飛、無謀といへば無謀であつた。

果然、耕作は全然失敗であつた。第一アラメダ製糖會社よりの前借は返済するアテは無く、地代を拂ふ能はず、白人の食料品店にも支拂ふの術がない。

そこで、安孫子氏を介してアラメダ製糖會社總支配人バア氏に事情を訴へ其解決を頼んだ。バア氏は親切の人であつた。直に部下をして實地を見分せしめ、分産法を以て負債に充つるの策を立て、くれた。私は此時始めてプロラター（分産）といふ言葉を覺えた。「百兩の方に編笠一個」のプロラターは各債權者の容るゝ處となつた。残るはミヨルの老朽七頭とワゴンの一輦のみ。



一敗地にまみれて再び立つ能はざるに至れる時、私は大患に罹ってサクラメント市に送られた。醫師竹岡三之吉氏は此時櫻府に病院を持っていたので、そこに擔ぎ込まれたのであった。(註) 此時ノードの農園には田邊哲男、井上幸次郎、川島天涯、寺澤六之助、小川由太郎、松浦勘次郎、木下三之助、渡邊萬吉等が残っていた。

〔日米〕No. 9042[January 6, 1925]

(一一一)

労働時代より借地時代へ(四)

ボス大同團結の動機

◇各地方の情况

明治三十四年頃の加州農園は、ビーツ耕作事業が最も多數労働者を需要した頃である。しかし、此の耕作労働者は四月に始まり六月に終り、更に九月乃至十月に至って約一ヶ月間収穫労働するのであるから、此間の仕事を見出すには困難であった。彼等労働者は四、五両月に儲けた金を収穫期までに使ひ盡くした。九、十月の頃に再びビーツ園に入りて若干を儲け、冬季に於いて之れを消費するが常であつた。此間労働者の調節は心あるボス(受負業者)間の重大問題であつた。一方日本及布哇轉航の移民は明治三十三年に於いて雲霞の如く加州及び西北部諸州に押かけ、労働者の過剰は白人労働界に恐怖の念を抱かしめ

た。明治三十三年五月桑港市民大會は、日本移民大集來の恐怖から企てられたものであつた。

此危機を看取したる我々書生的ボスは茲に大同團結して労働界の調節を計らんとするに至つた。

明治三十四年、私はノード村農業の余暇を利用してサクラメント市に遊んだ。偶々峰島儀一君に會し、浮世亭に快談した。儀一は千葉縣の舊家に生れ、學識あり、性質温良にして理想に富む。彼れは當時カリフォルニア・布哇製糖會社直營の農園を受負ひ、加州農園パイオニアの一人として名聲があつた。一夕の快談は期せずして一致した。而して彼れはボス大同團結の企てに共鳴すると共に、一人の新進計劃家を私に紹介した。其人は慶應大學出身の青森縣人秋元正規君である。秋元は當時加州布哇製糖會社の耕作を受負ふていた。

一夕、私は峰島、秋元と鼎坐して快飲し、大同團結の策が大に進行し、此秋を以て他の同志と謀議することゝして別れた。

幸か不幸か、私は此年の秋、病を得てサクラメント市在住の醫師竹岡三之助君の病室に客となつたのであつた。

ビーツ園果物園の収穫は此時既に終了を告げ、多くのボスはサクラメント市に集まつていた時であつた。

私の病氣を聞いて、峰島、秋元両氏は見舞に見えられた。

此時、私の病氣は大に輕快に赴いたのでボス大同團結の議が再び持上つた。秋元君は同縣の先輩中畑六郎君を始め、加布製糖會社耕作受負者たる在米の古參、皆部梅太郎(紀州人)相川

民之丞（紀州人）兩君を紹介し、私は安孫子久太郎（新潟縣人）犬丸政一（大分縣人）寺澤六之助（群馬縣人）を紹介した。

機大に熟し、明年（三十五年）早々結社するの段取りとなった。これ實に明治三十四年十二月、竹岡病院一室の出來事であつた。



是より先、私は農業の餘暇を利用してサクラメント市附近五十哩の地方を視察した。

此當時日本人獨立の農業家は可なりに多くあつた。我々書生が想像し能はざるほど各方面に開拓の事業が行はれ、特に注目すべきはソラノ郡の果物耕作事業と、フロリンの苺及び川下地方のビNZ其他の小作事業であつた。私は此機會に於いて加州日本人農業界を大觀して見る。

（イ）人夫契約事業——バイナ葡萄園は加州最大のもの、收穫期二百人以上の日本人働き、當時田代某人夫を供給す。

（ロ）ナトマ葡萄園は當時、竹崎犀吉人夫を供給し、二十四年冬犀吉一時歸朝、犬丸政一代理人として就業す。

（ハ）ビグス果物園は津田伊之吉、海讀九五郎、野尻宇三郎（熊本縣人）人夫を供給す。

〔日米〕No. 9043 January 7, 1925)

（一二二）

勞働時代より借地時代へ（五）

ボス大同團結の動機

◇各地方農業の情況

（二）川下地方は鶴見藤四郎（愛知）倉本音八（熊本）堀田鎌次郎（愛知）築山才一（愛知）松原伊三郎（山口）難波某（新潟）仁戸部等の先入者、各島を開墾してビNZ、オニオン種、麻、アスパラガス等の耕作を始めた。

（ホ）スタクトン川下のデルタには牛島謹爾率先してポテト、オニオンの耕作に従事し、次いで中島秀三郎、峰島儀一開墾に従事す。

（註）——明治三十四五年の交り、ベソニー附近に秋元正規三千英加のビーツ耕作を受負ふ。

（ヘ）ソラノ及ヨロ郡に於ては小田代源太郎、皆部梅太郎、谷越虎太郎等の先輩耕作受負及小作業を經營し加州果物園の本場として日本人勞働者が年中多く働いていた。

此當時前田芳太郎、奥田惣太郎はウインターに商店を開き金融社を設け、傍らビーツ耕作を受負ふていた。（現リビングストン地主）

（ト）サンタマリア方面。ユニオン製糖會社のビーツ耕作勃興し、森銀之助（兵庫）萩谷末廣（和歌山）安孫子久太郎（新潟）の諸氏率先して人夫の供給をした。

(チ) ベンチュラ郡オクスナード方面。砂糖ビーツの耕作益々勃興し、干濱一郎(廣島) 島田次郎(東京) 徳山民助(山口) 原田梧一(廣島) 伊之瀬猪之吉(茨木) 大友平藏。馬場小三郎の諸氏受負事に従事す。

(リ) モントレー郡地方。サリナスを中心として借地農始まる。古參者として高尾庄大郎(大分) 西博夫(鹿兒島) 北與三松(山口) 五月女哲(東京) 尾上善八、野田徳次(静岡) 大井實(福岡) 右の諸氏はポテト及ビーツの借地耕作を始めた。(註) —— 西博夫はサリナスに於て二百三十エーカーの農園を借地し二十五年間繼續している。當地古跡の姿である。

(ヌ) サクラメント郡、フロリン村が最も早く日本人に注目され明治三十五年の調査によれば、借地及買収契約の者合計千三百四十一エーカーに達し、土地買収の契約をなせるもの六組、四百二十三エーカーあった。

(註) フロリン村に入りて専耕作を始めし人は中川健次郎(廣島)で時は千八百九十三年(明治二十六年)であった。次いで寺田啓次郎(廣島)來住し、中川は大農に寺田は小農に成功した。次いで西本滿之助、小柳平吉、河本和吉、弓場市松、芳野松太郎、橋本武右衛門等前後して來住しサクラメント市に時計店を經營せる巽榮次郎(廣島)はフロリン村最初の土地買収者として現れた(明治三十四年)。フロリンは此時代より日本村と稱されて有名であった。

(ル) フロリンに次いで日本村の名聲を馳たのはサンタクラ、

郡アルビソであった。此地は一時専の耕作地として日本人の來住するもの多く、明治三十五年頃には盛大を極めたものであったが、其大部分が借地農で地味また佳良でなかった爲めに凋落した。

(ヲ) 中加地帯。ベिकासフィールド石油發掘の業大に起りしも農業未だ發展せず。フレスノ市を中心とせる地方には葡萄收穫の日本労働者年々増加し、中には收穫分配の方法にて借地農を營むもの現れ、次いで土地所有者を散見するに至った。しかし少數であった。

(註) —— 明治三十五年、予が實地調査によればフレスノ郡に於て土地買収の契約をなせる者は隅田寶一(廣島)四十英加、川野才一四十英加、毛保宇一、前田寅吉、共同四十英加のみで、其反別五百七十英加に過ぎず。

〔日米〕No. 904 January 8, 1925)

### (一二三)

#### 労働時代より借地時代へ(六)

##### ボス大同團結の動機

##### ◇各地方農業の情況

(ワ) プラサ郡附近。明治三十五年の調査によればニューキャスを中心とせるプラサ郡に於ては東歸恵吉、沖田與六を筆頭として現金借地及收穫分配にて耕作する日本人四十名、

耕作面積千五百二十七英加であつた。此地方に於いて此の當時土地を所有する者なし。

（カ）南加地方。羅府郊外に於いて平泉小三郎植木園として十英加を買収し、池百松養鶏園として五英加を買収せる外、土地所有者なし、明治三十五年トロピコに於て富川豊人、三原茂數（熊本）共同の苺園始まる。翌年旭屋組其他一名の苺耕作業あるのみ。リバサイドは早くより蜜柑栽培地として名あり、各季日本人の此地に働くもの多數なりしが獨立耕作者は一人もなかつた。

（ヨ）アラメダ郡及其附近。ヘーワードからデコート及びアルバランド附近にはトメトを主要産物として日本人が活動していた。此頃アラメダ郡の農業家はビーツ耕作は旅鳥の受負事業として笑っていた。それよりも自作農業に徹底したトメト耕作が男らしいとせられて居たのであつた。

右に列擧せる外、日本人は加州各地に喰ひ込んで農業を經營していた。吾輩の氣の附かぬ處で孜々忼々として農業に勵んでいた者は多かつたであらう。兎に角、日本人といふ動物は、イットはなしに加州の天下に各其才能を發揮して正業に従事した事だけは事實である。

大體から論ずれば加州の農園は書生が拓いたものである。而して鐵道人夫給の如き、其始めに若干の運動費を要する事業は、明治二十五年から三十年代には、運動費の出處を有する傭夫の階級にあらざれば着手する能はざる状態にあつたのだ。

然るに茲に驚くべきは、書生及半書生が猛然として起り、加州の農園を開拓せるのみならず、進んで鐵道炭山の事業に手を延ばし、水夫上りの事業家を凌駕して別に日本人勞働界に新天地を開拓せることは快心の事業と稱すべきである。

#### ◇風俗矯正の指摘

（一）明治三十三年以後米國本土に押し寄せたる日本移民は、其の質に於いて必ずしも不良でなかつた。併し米國の風俗習慣を知らざる點に於いて卒先者の心を悩ます點が多かつた。特に布哇から轉航せるもの、中には賭博常習者が大量に含まれ、之れ等は勞働者の集合するキャンプに押しかけ賭博を奨励するの惡風があつた。

（註）……此當時、ハップス園、葡萄園、ビーツ園等多數の勞働者が集合せる所には賭博の親分が出張してキャンプ内に賭場を公開し、受負人にして之を排斥する時は徒黨を組みて農場を引揚ぐることもあり、甚だしきに至りては賭博を禁ずるキャンプの受負人を暗殺すべしと言ひ觸らして治安を妨害せる事あり。

一般勞働者の風儀もこれに連れて惡徳の方面に傾き、賭場の設備なき農園働かざる弊風を生じた。勢ひ右の如くなれば、受負業者は勞働者を募集するに當りて博徒に依頼するの風を生じ、勞働者と賭博とは離るべからざる關係を誘致した。

而して勞働者は一定の仕事を終へて都市に集まるや、多くは支那街の賭博場に走り、或は醜業婦の門戸を叩きて一夕の快を

貪る者比々皆然りと云ふべき状態であつた。

更に作業方面に於いては労働に對して忠實ならず。賭博、午睡、作業怠慢の風があつた。

(「日米」No.9045, January 9, 1925)

## (二四)

### 労働時代より借地時代へ(七)

#### ボス大同團結の動機

#### ◇弊害の指摘

新來の労働者の多くは作業中にナマケル惡風があつた。例へば監督者の目の届く處においては能く働く風を装ひ、目の届かざる處において午睡するが如き卑劣の態度を示し、雇ひ主の嫌惡を買ふたことも頻々あつた。

ピース、ウオークの時は非常に働きデューウオークの時は大になまけ、労働の徳義を蹂躪する事故も澤山あつた。

此當時、馬場、安孫子、上松、山口共同受負のピーツ園五百英加に對し百五十名の入夫を入れ、なほ手後れを來たしたのは大部分の労働者が米國流の働きに慣れないせいもあるが、ナマケられた爲めに作業の能率が擧がらないのが大なる理由であつた。

そこで大部分の農園ではピースウオークの制度が行はれていた。然るに此ピースウオークの制度が行われていた。然るに此

ピースウオークにも亦弊害が起つた。則ち彼等労働者は敏活の手腕を持つてゐるのだから受負仕事となると長時間働き其仕事の成績は甚だ不良である。ゴマカシで澤山の仕事をやるのだから、ピーツ間引仕事に二本立ちがあり。苺摘採及箱詰には上部を綺麗にして内部に下等を詰込む。葡萄摘取には収穫物を取残すやら踏附るやら、何でも早く多量の仕事さへすれば料金が多く取れるといふ風で仕事に對して忠實味覚がなかつた。嗚呼、書生が開いた農園は斯くの如くして日本人の信用將に地に落んとする有様であつた。

▲(註) 明治三十五年五月發行、雜誌『新國民』紙上、予の評論せる「在米日本人労働者」と題せる中に曰ふ。

「日本人はドコまでも旅人根性を以て此國に居留するが故に何事につけても姑息苟且なるのみならず、恥を掻き棄つるの陋劣心あり。たとへば監督者の居る時は労働の手を休めず努めて熱心に働く風を装ふと雖、監督者の居らざる時は全く作業をやめて休息するが如き、是皆旅の恥を掻き棄つるの卑劣心にして日本國民の公徳上甚だ歎すべき事なり。近來白人國主は日本人労働者を目して奴隸根性あるものとし決してデューウオークの仕事に使用すべからずと決心せるもの多く出でたり、今に反省せずんば日本人は遂に労働地を失ふに至るべし豈寒心せざるべけんや」云々

明治三十六年發行の同誌上「労働者の不徳義と労働矯正會の必要」と題し予の執筆せるもの左のごとし。



「日本人が此國に來て最も多く労働する場所は農園である。

其次が鐵道である。漁業や炭鑛や製造所などは實に少數のもので、兎に角、農場の働きが無ければ今日加州二萬五千の同胞は糊口に窮する次第である。

そこで日本人は此の農場の労働に對して努めて忠實に働いて園主の信用を得なければならぬ。處が近來米國の經濟界が好景で殖産興業が盛んになって労働者の需要が増加すると共に此居候先生（日本移民を指す）イイ氣になり色々の我儘をいふて附けあがる。昨年の如き某所では白人よりも多く賃銀を貪り夫で油を賣つて監督者の目を倫んでナマケた。」或る白人で日支人を多く使用する園主は吾人にこんなことを話た。

「日本人は形は小さいが能く敏捷に働く、併し監督者を澤山つけて番をしていなければナマケて役に立たぬ。支那人は遅鈍であるがナマケない。どうか若い支那人をモット多く米國に入れて農業に働かしたいものだ」

農園のみならず鐵道でもそうだ。シアブルを持つてぶらぶらする労働者が多い。そして彼等曰く「一日働いて金を儲ける位なら日本にいる。働かないで金を儲けたいから米國に飛び出したのだ。」

すべてこんな風であつた。

〔日米〕No. 9051 January 15, 1925)

（一二五）

労働時代より借地時代へ（八）

菓物摘採及箱詰に關し日本人が不忠實なる一例として明治三十六年四月發行の『日米』紙に左のごとき記事あり。

フロリン、イチゴに就いてサクラメント市に發行するビー新聞に投じたる一文は其弊害を痛罵して餘す所なく、吾人が平生の主張と同じきものあり、即ち掲載して農家の參考に供す。

「ビー記者足下、余は貴紙の餘白をかり日本人がイチゴの摘採及パッキングに不注意なることに就て吾人の視察せしことを述べん。サクラメント郡は自然的にイチゴの栽培に最も適當なるにより善良佳味なるイチゴを産し得ることは何人も争ふべからざることなり。然るに兩三年前よりフロリン、イチゴに對し非難の聲は各市場より來り、當地の耕作者をして其販路に恐懼せしむるに至りしは全く日本人の不注意なる摘採とパッキングに原因せるを知る。當地に使役さるゝ日本人の多數は無經驗なるものにして、特に彼れ等は箱數により摘採とパッキングに對して賃銀を得るものなれば、唯彼れ等は多額のイチゴを摘採し若くはパッキングして多額の賃金を得んことのみに勉む。素よりイチゴの栽培及パッキングは日本人の掌握する所にして收穫の半を分配せんと契約せる地主は善良なるイチゴを市場に輸出することを得ず。若日本人及白人の耕作者にして是れが前後策を講ずるに非ざれば、フロリ



ンイチゴは遂に盡滅するの止むを得ざるに至らんとす。

現時の有様を見れば、栽培者はただ多額の収穫を得んことに之を勉め、その品質には懸念せざるもの、ごとし。凡ての耕作者はパッキングするには至極善良なるものを以てし、唯表面だけ立派なるものを装置するが如き不正直なること勿れ。余は前週輸送すべき箱を開き之を見れば上層は立派なれど下層は腐敗せるもの、み。實に前後を辨へざる耕作者には抱腹絶倒するの外なかりけり。曾て合衆国中最大なるイチゴ園を有する人の言いけるに市場を発見するには唯品質の善良なるものを高價にて販賣するにありと。眞に然り。本年も或仲買商のごときはフロリン、イチゴの取引を拒絶するに到れり。

余はフロリン、イチゴに於ける耕作者に向つて希望せんと欲するは、從來の不注意粗忽な摘採及びパッキングを始め品質の善良なるものを撰擇して市場の信用を失はざらんことを。」以上某白人の掲載せる注意は、是れ日本人の嫉視して故意に攻撃の鋭鋒を向くるものと日を同じふして語るべからざるなり。寧ろフロリンを愛し、日本人を愛する熱情の發して苦言を呈したるものならんか、況んや文中の語句適切にして吾人の冷汗を催すものあるに於いてをや。「良薬口に苦し」耕作者中には或ひは傲慢無禮と憤怒するものあらんやなれど是れ現狀を描寫して穿ち得たる語なるを知らば誰か又一言を挟み云ふ所あらん。

吾人の期待せしは、フロリンをして殖民地の模範として夫が成功を欲せしなり。其成功を欲し、市場の信用を得んと欲せば品資を精選せざるべからざるや言を俟ず。嗚呼曩に成功せるフロリン今は失敗に終わらんとするか、日本人の失敗はフロリンの失敗なり、フロリンの衰頹は日本人の衰頹なり。耕作者失敗の日なり。豈寒心せずして可ならんや。(明治卅六年四月日米原文)

労働界の弊害上の如し、我等金銭の淡き開拓者が立つて其弊害を矯正せんとする故なきにあらずであつた。

(「日米」No.9052 January 16, 1925)

(二二六)

#### 労働時代より借地時代へ(九)

##### ボス大同團結の動機

##### ▲學生的ボスの企て成る

顧みるに明治二十三年ウードランドに於て企てられた労働大會は書生が發起したものである。當時此企てに参加せる先輩は馬場小三郎を筆頭として、高尾庄太郎、野田音三郎、池田有親、西博夫、竹崎犀吉等の諸氏であつた。

彼等が労働大會を起こした動機はそれよりも十年後に我々が企てたボス同盟と其精神を同じふしていたのである。但し、明治二十三年頃には純労働者の數極めて少なく、明治三十四年頃

には、純労働者が書生の數よりも多かつたのである。

更に同胞労働者にして此頃から妻帯するもの漸く現れたが其數極めて少く、而して是等の妻女等は同胞男子の數に比ぶれば少率にして之が爲め風儀を紊るの行ひが多かつた。當時在米日本人の總數約二萬五千人にして其内婦人は九百五十名位、即ち男二十五人に對し女一人の割合であつた。斯ゝる時代に於いて道德生活を一般に望むは木に緣りて魚を求むる程の無理である。

そこで我々有志は一般に向つて妻帯の氣運を鼓吹せんとしたのであつた。

道德生活の基調たる夫婦の同棲は當時の在米日本人には緊要事であつた。併し爰に妻帯を勸奨するには安定した土地を與へざるべからず、即ち妻帯と同時に起る問題は土着の問題——土地所有の問題である。

○ ○

以上の必要に促されて我々書生的ボスは大同團結を企てることになつた。

#### ▲勸業社の成立

明治三十四年（一九〇一年）私の病室に於いて起りたるボス大同團結の相談は翌三十五年に具體化された。此年十月、サクラメント市に於て一の結社が起つた。其名稱を日本人勸業社といふ。社員として

理事 中畑 六郎

社員 安孫子久太郎、秋元正規、皆部梅太郎、犬丸政一、相川民之丞、峰島儀一、鷺津文三、瀬尾八郎、寺澤六之助

而して結社當時、各五弗を支出し、サクラメント市第四街一〇〇四番に事務所を設けた。其營業項目に曰く

農産物委託販賣

土地家屋賣買貸借

明治三十六年勸業社は受負事業として加州及布哇製糖會社のビーツ園全部の耕作を受負ふた。而して土地を所有せしむるの運動——土着運動を起しフロリン村に於て約二百英加の土地を西本滿之助を筆頭として所有せしめた。

（註）此頃フロリンの土地はベアランド一英加二十五弗にして年々五弗づ、五ヶ年に拂ひ込むを條件とした。

明治三十六年、ユタ製糖會社及びアイダホ製糖會社より人夫供給の要求を受けた。依つて勸業社は鷺津文三、皆部梅太郎を派遣し實地の視察を爲さしめた。

兩人はユタ及アイダホ兩州を視察し、其有望なるを認め、試みに四十七名の労働者をユタ州ガーランドに入れた。此運動は從來山中部に多數の日本労働者を見るの氣運を作つたのであつた。

同年七月、勸業社は寺澤六之助氏をアイダホ州に向はしめ、同胞のビーツ耕作に人夫を供給した。これがアイダホ州の農園に日本人労働者の活動せる濫觴である。

（此年、秋元正規氏はユタ州に到り鷺津文三に代り、農園受負

事業に盡力した)

〔日米〕No. 9053 January 17, 1925)

(一二七)

借地時代より土着永住時代へ (一)

▲勸業社の理想

吾輩の作った日本人勸業社は翌明治三十七年に到って日米勸業社と改名し株式組織とした。社員は舊の如くで此株主等は平等の株式を所有し、之を他に賣買することを禁じてあった。元來勸業社なるものは我々の理想を遂行するために作った會社で金儲け本位でない。それゆへ株式を他に賣買することを禁じたのであった。加州株式會社法からすれば違法であるが、我々の理想を遂行する上からすれば其株式が理想を異にせる人の手に移ることは勸業社の破滅であると考えた結果であった。

勸業社の理想は米國にある我々日本民族を土着永住せしむるに在る。此理想は加州政客と別個の方面に樹てられたものである。米國の政客特に加州の政客は明治三十六年市俄古市に於いて開催せる米國勞働大會に於て「委員を選定して日本の勞働状態を視察せしむ」の決議をなし、翌明治三十七年八月委員ローゼンバーク氏一行を日本に派遣した。同氏一行は日本を視察して左の報告をした。

「日本の勞働状態は牛馬時代である。彼等をして斯ゝる時代

を脱したる米國勞働界に侵入せしむるは米國の勞働者をして到底其競争に堪へざらしむるものなり」

右の報告は日本人排斥の基礎を成したもので、加州勞働同盟がこの報告を基礎して日本人排斥を力説したものである。日本々國の名士達は日本人排斥を目して加州に於ける我々同胞の罪なりと誤認したこともあったが其實、排斥問題は日本々國の實狀から割出された問題である。

日本人勸業社理想の一端を知るには明治三十六年桑港小川亭に於いて催されたる新年宴會の記録を見ると分る。左に當時發行の雑誌『新國民』の記事を抄出する。

▲勸業社の新年宴會

一昨年十一月、櫻府に於いて設立せる日本人勸業社なるものは峰島儀一、鷺津文三、相川民之丞、中畑六郎、秋元正規、皆部梅太郎、安孫子久太郎、寺澤六之助、瀬尾八郎、犬丸政一の十氏によりて、日本人の永住を誘導し、實業を勸業するの主題を以て設立せられたるものなり。

同社は本年一月六日桑港小川亭に於いて新年宴會を開き、在加州の諸名士を招待して同胞の殖民に關し研究する所ありたり。來會者及演説の題名は左のごとし。

司會者 安孫子久太郎

地方と風俗矯正

今城 長緒

當夜の所感

植民と公德問題	細具 富次郎
金融機關と移民	中内 光則
移民と風俗	中村 東吉
在米最初の所感	堀 謙徳
移民と傳道事業の關係	御酒本 徳松
移民と新聞事業	稻澤 謙一
移民と海運事業	副島 八郎
日本移民の發達と伊太利のコーナーに就いて	伊東 幸次郎
日本移民と太平洋沿岸	戸澤 鼎
小畑九五郎（美以教會牧師）	上野 季三郎
清瀬規矩雄（日米新聞記者）	
植田憲三、明石鴻南、高橋畫一郎、坂部多三郎、山村四郎、	

小林彦次郎、永井元、林憲三、川島天涯、中島季三郎、河西信（書記生）吉岡彦一（書記生）岩越美高（書記生）増本孖峰、飯田三郎、中畑六郎（社員）相川民之丞（社員）瀬尾八郎（社員）秋元正規（社員）峰島儀一（社員）鷺津文三（社員）皆部梅太郎（社員）

本會の如きは未だ曾て見ざる有益の會合にして、世の所謂新年宴會に號して無意識の亂醉狂舞に耽るものと同一にあらざりしは吾人の稱讃する所なり。

〔日米〕No. 9054 January 18, 1925)

## （二二八）

### 借地時代より土着永住時代へ（二）

#### ▲演說者の社會的地位

明治三十六年一月六日桑港小川亭に於ける日本人勸業社の新年宴會に臨み演說せる人々の社會的地位を記述する事は必要事件である。

（一）今城長緒、愛媛縣人で櫻府金融社の創立者である。彼れは明治二十三年頃から櫻府地方に居住し、野田音三郎、竹崎犀吉等と共に受負事業に従事し、明治三十一年頃モントレーに到り貝細工の業を起し明治三十五年櫻府新世界支社主任となり同年同地に金融社を創立す。彼れは地方労働者の風俗矯正に盡碎し天長節の日、賣春婦が日章旗を樹てたるに

憤慨して悉く之を撤廢して物議に醸したることあり。

(二) 細買富次郎は新潟縣人でヘート街基督教青年會の幹事、青年教育の熱心家。

(三) 中内光則は高知縣人明治卅五年加州大學文學科を卒業し、日米新聞記者、雜誌新國民記者となる。彼れは植民學專攻の學者として著書あり、後大阪高等商業學校の教授となりて物故す。

(四) 中村東吉は甲州の人、明治二十年頃渡米、カリフォルニア、マーケットに働き蓄財家として有名なり。明治三十五年日米銀行の頭取となり明治三十九年歸朝、東京株式界に出没することあり。物故す。

(五) 堀謙徳、佛教開教師、帝大文科卒業の後桑港に赴任す。井上哲治郎氏と共に釋迦一代記の著書あり。

(六) 御酒本徳松、三井物産會社桑港支店長、東京高等商業學校の出身。

(七) 稲澤謙一、長老教會派の牧師にしてサリナス傳道館の創立者、沿岸基督教界に貢獻せる人。

(八) 副島八郎、佐賀縣人、新世界新聞の持主。

(九) 伊藤幸次郎、東洋汽船會社支店長、帝國大學出身。

(十) 戸澤鼎、横濱正金銀行桑港支店長、歴史學に長じたる人。

(十一) 上野季三郎、秋田縣人、桑港駐在帝國領事、自ら百姓領事と稱し農業に興味を有せり、明治三十四年赴任し同四十年歸朝。

#### ▲新聞支社の始め

明治三十五年六月サクラメント市に日米新聞の支社が創立せられた。此支社主任は私であつた。

曾て述べし如く同時代の新聞紙は桑港市内の事情を報ずる外、地方の事情には盲目であつた。然るに地方農園は書生及び半書生に純労働者が活動を始め明治三十三四年の頃から目ざましい發展を示した。此事情を一般に知らしむることは加州日本産業の奨励に缺くべからざる必要事であつた。依つて私は安孫子氏と議してサクラメント市に支社を設け、地方の通信を開始した。

最初ソラノ郡地方の日本人發展の模様を十八回、其頃にフリン日本村の事情を二十回ほど書いた。

同年十月、新世界新聞も亦支社を設立し今城長緒主任となつた。同年九月、ロサンゼルスに於いて日米支社が設けられ湯淺銀之助主任となつた。新世界は川原愛嬌を主任とした。

(註) 新世界は此以前より川原愛嬌通信者として事務を執つていたのであつた。

湯淺銀之助が日米支社を始めた頃は地方に於て三名、市内で二十名の購讀者を得たのみであつた。

鷺津が櫻府に支社を始めた時は一ヶ月總収入二十四ドルしかなかった。

#### ▲雜誌新國民の創立

明治三十五年十一月、私は『新國民』といふ實業雜誌を創刊した。そして日米支社の仕事を山村四郎に譲った。

〔日米〕No. 9055 January 19, 1925)

（二二九）

借地時代より土着永住時代へ（三）

私の結婚の事

明治三十五年は私にとりて記念すべき年であつた。私は此年の十月に今の妻と結婚した。場所はサクラメント市オー街で媒介者は當時桑港駐在の帝國領事上野季三郎氏であつた。

此結婚式ほど簡單なものはあるまい、結婚式はオー街の合宿所の一室で行はれた。立會ひ者は、醫師竹岡三之吉、佛教開教師原田了哲、寺澤六之助、瀬尾八郎、松本岩次郎で、外來者は原田と松本と上野領事のみであつた。簡略なる結婚の申渡しがあつて、新妻はケチンで二三品の料理をし、一ガロンの日本酒を暖めて一同飲んだのであつた。此當時我等書生連が結婚すると云ふことは大それた企てであつた。妻帯しても之を養ふて行くべき財政の基礎が無い。併し我々の先輩で既に妻帯せる人は言ふ。「自分一人で食つていけるならば妻帯しても食つて行けるものである」と。此學説は何程の權威があるか明瞭でないが、吾輩の妻君たる女も手が二本あるからには餓死しさうにも思はれない。且又世の亭主たるもの必ずしも妻を養ふの義務ありと

も考へられない。昔米國土人の妻は亭主の食物を獲すべて女が男を養ふたものである。日本でも琉球島の女は男を養ひ、越後海濱の村々でも女房が亭主を養ふてゐる例を知っている。

そこで我々の如き金儲けの下手な書生は妻君に食べさせて貰はぬまでも之を養ふ程の伎倆が無いからといふて結婚が出来ないといふ譯が無い。理屈は何れにしても宜しいが、私はある女と結婚したのであつた。蜜のやうな甘い心持ちが相互の間に保たれ、喧嘩口論は決してしなかつた。夫婦仲がよかつたのであらう。

上野領事は私共の結婚に大層興味をもつていられた。「君の結婚は豊臣秀吉以來の秀逸味をもっている。秀吉は木下藤吉郎時代に結婚したが、食事の器物は缺け碗だつた。君の結婚式も之に類しているから屹度成功するよ」

全くの話、我妻には白い着物は固より無かつた。焼穴のあいたスカートに木綿の上着一枚のみであつた。

「結婚の指輪が入る筈ですな」と私がいふ。私は此時指輪を買う金をもたなかつた。上野は十弗をくれた。私は三弗で結婚の指輪を買い、三弗でルビーの入った指輪を買ふた。殘金四弗で酒と肴を買ふて尙二弗ほど着服に及んだ。

私が結婚したといふ報道が新聞に傳はるや友人等は私を攻撃した。「妻を貰ふのは宜しいが何故友人に知らさないか」といふのが攻撃の理由であつた。私は曰く。

「私の妻は私の必要から持つたので、諸君に知らした處で御



利益にもならないと思ふ。それに太閤様この方の貧乏結婚である故、通知する餘裕がない」

○ ○

私は簡単な結婚をして友人から攻撃を受けた。此當時サクラメント市在留の日本人が結婚する場合は實に大袈裟なものであった。一例を示せば、日本町に湯屋を営んでいた松本岩次郎は明治三十七年頃に妻を日本から呼び迎へたが此時の結婚披露には大ホールを借り受け四百五十の招待状を發し、宴會の費用五百弗であつたが參會者の祝儀が七百弗程あつたゆへ差引二百弗ほどの剩餘金があつたそうだ。

田舎者は我々書生連よりも利口である。彼等は虚禮の弱點を利用して大宴會を開くのであつた。田吾作の娘とが結婚する時に於てすら彼等は既に打算に明かであつた。

我々書生連が常に經濟的に不覺をとるのは田吾作の心理を解せざる罪かも知れない。

(「日米」No. 9056 January 20, 1925)

(1110)

#### 借地時代より土着永住時代へ (四)

##### 私の結婚の事

我等の結婚には新婚旅行といふものが無かつた。同時に合宿所の友人等は申し合せた如く結婚の當夜外泊したのであつた。

米國習慣からすれば新郎新婦は結婚の夜白米を投げつけられて式場を飛び出し、「奈良のはたごや三輪の茶屋五日三日逗留して」來るのでありますが、木ノ下藤吉郎氏の我々はそんな洒落たマネは出来ない。結婚當夜から合宿所に居居はりであつた。睦言が聞える恐れがあるなら、諸君は此家に居らないのが安全です、と濟まして居らねばならぬ境涯であつた。

○ ○

考へて見れば吾輩は結婚に關して先驅けの功名をした姿であつた。此頃の書生は殆ど無妻であつた。先輩中畑六郎、安孫子久太郎氏も無妻であつた。其他の同志すべて無妻であつたに拘らず私一人が突然として妻といふ恐ろしい異性を持ったのだから、萬人の視聽を驚かしたのも無理はない。

人間の行爲といふものは其時と處によりて普通の事柄が異様に映ずるものである。私の結婚は實に平々凡々たる出來事である。然るに時代が早きに過ぎた爲めか同人間に異様に響いたやうである。併し寛宏なる私の友人等は絶交もせず交際を續けてくれたから無事に貧乏世帯が持てた。

#### 上野領事の加州視察 (一)

桑港には明治三十四年三月、上野季三郎氏領事として就任、彼は之より先明治二十六年頃珍田領事時代に書記生として桑港に在任していたので我々書生連に多くの友人をもつていた。私は飲み仲間の一人であつたので其親みが濃厚であつた。彼れ

は嘗て書生時代に北海道開拓地に遊び農業に興味を有していたので、自から百姓領事と稱していた。彼は加州地方日本人の發展に關し興味を有し常に田舎の事業に注意を拂ふていた。

私は一夕領事官邸に彼れと快飲し、加州日本人の狀態を視察すべきを勧めた。上野は外務省に向かつて視察の旅行費を請ふた。此年外務省は上野に向つて十五日間の旅費を支出する旨の承諾があつた。

今日から比べると其頃の領事は財政が貧弱であつたらしい。十五日間で加州日本人の事情を調査することは可なりに切り詰めた豫算である。實は之まで歴代の領事中地方日本人の事情を調査した者は居らなかつた。されば此旅行は官吏としては草分けの旅といふてもよい程である。何處に何人が如何なる事業に従事しているか分からない。其頃日米年鑑とか新世界住所録とかいふ便利の書物は素よりなかつたのである。そこで手探りで視察するのは心細いとあつて、比較的地方の事情が明かな私が案内することになった。私の旅費は勿論彼れの自腹を切つたものである。

明治三十五年十月十三日、上野は桑港より私はサクラメント市より出發し、スースンにて落合兩人相携えてバカビルに赴いた。

同地で土地の古參小田代源太郎、皆部梅太郎諸氏と會し、同地方の農園を一巡して一泊。それより左の順序で視察した。

十月十四日 櫻府泊

同 十五日	フロリン行
同 十六日	ベンリン泊
同 十七日	櫻府泊
同 十八日	川下行一泊
同 十九日	フレスノ泊
同 二十日	羅府泊
同 廿一日	リバサイド行泊
同 廿二日	羅府泊
同 廿三日	羅府泊
同 廿四日	サンタババラ泊
同 廿五日	モントレイ泊
同 廿六日	サンノゼ泊
同 廿七日	歸桑

右の道中には膝栗毛的逸事が随分多かつた。これは後來上野君の逸事を書く機會に書く。

〔日米〕No. 9057 January 21, 1925)

(一三二)

借地時代より土着永住時代へ (五)

上野領事の加州視察 (二)

上野領事と私が加州を巡廻した翌三十六年はフロリン村同胞耕作者に恐慌が起つた。それは同地先住者が母耕作に成功せる

と聞き各地より我も／＼と押掛けて遽に耕作面積を擴げ同年は千三百英加以上に上つたのであつた。

此の報道を受けたる百姓領事は實地を視察した。當時雜誌新國民には左の記事がある。

#### ◇フロリンに於ける上野領事の演説

左は五月廿二日上野領事がフロリン視察に赴かれたる當時苺耕作者に向つて演述せる大意なり。

「余は今回苺輸送の模様を見んとて此地に來たり、昨日既に其大體を實視したれば直に歸桑すべき筈なりしも、是非耕作者諸君に對して一言を述べよとの耕作者某々氏の請求により、一日を延期して今日此處に諸君と面語することになつたのである。

當フロリン諸君の御事業に就いて余は常に心配して居ります。切角今日の如く日本人集合して斯くも有望なる日本村を作りたるが、集る以上は是非其勢力を扶殖すること並に將來に對する畫策を念頭に置いているのである。諸君が日本村を作りて成功し白人間に勢力を扶殖することは將來の日本人事業の模範にして、從來諸君を模範として、他を成功せしめんと切望し居るにもかゝらず、若諸君の事業にして、失敗に終る等のことあれば、是れ由々敷き大事である。

殊に又、本國政府に報告せる中にも諸君の事業に希望をもち、諸君の事業を完成せしむるやう且又他の模範として恥ざるやう助力せよとの意向を表明し來れり。然るに此頃の模様によれば

フロリンの恐慌は甚だしきのみならず、其結果直接に累を諸君に及ぼす有様なりと聞けり。仲買人オツブンハイム及びデビスに聞くも彼等は異口同音に例年の値段と比する時は非常なる廉価にして一箱五十仙乃至六七十仙の間を上下すと答へたり。又多年の經驗を有する耕作者に尋ぬるも新耕作者は失敗に終るならん忤心配の意を洩らしをれり。加之今年のごとくゼツシー、ベリーの收穫半分にして打棄つるが如きは桑港邊の未だイチゴの事を知らざる素人の眼よりみれば諸君が夜を日に次ぎ汗水流して耕作する者を打ち捨るなど最も同情に堪へざる次第である。

ソコデ今年かゝる恐慌を來すに至りし原因は何故なるかと云へば二個の原因に基づいて居ると云はねばならぬ。

第一は諸君耕収のやり方にあること。

第二は市場の事情を審にせざること。

第一、諸君のやり方は最も市價に一大影響を及ぼす次第で惡き苺を市場に出せば必ず價格は下落すると云ふことは明かなる事實で又需要供給の原理に基いて耕作すべき耕地の制限を知ると云ふことは諸君の最も注意すべき事柄である。第二なる市場の模様を知るは固より輸送者たる者が最も熟知せざるべからざること、是等の方法が充分に行届いて居れば左程の失敗なきこと、信ずるのである。

元來日本人と云はず何れの人種も利益あるを見れば蟻の甘さにつくが如く競争の態度を執りて折角成功せんとする事業を破

壊せんとする癖あるは人間の弱點であるが斯ゝる弊習を除去せずんば農業の成功は六ヶ敷いのである。

世の經濟は需要と供給と適當の均衡で成り立つ、物の値段も矢張り需要供給と併立して初めて適當の價格を維持し得ることに考へを及ぼさなくてはならぬ。然るに市場に於て百箱の苺を要する時、千箱を出せば九百箱の剩餘を生ずるので、言葉を換へて言へば賣手多きに買手少きため苺の値が破れるのは當然のことであるから耕作者諸君には宜しく此點に思ひを及ぼして過作を避くべきである。（未完）

〔「日米」No. 9058 January 22, 1925〕

（一三三）

借地時代より土着永住時代へ（六）

上野領事の加州視察（三）

（上野領事演説の續） 品物によりては今年賣却し得ずとも即ち明年賣却し得るも、苺のみならず生の菓物は一定の或時期に賣却せざるべからず。而して其時期を誤るときは腐敗するものなれば常に思ひを此點に及ぼして研究する所無かるべからず。而して苺の如きは特に其度合を考へざるべからざるものなるにも拘らず、一昨年以來當地は耕作面積を増加して需要と供給其當を得ず、農家經濟上に大變動を來すに到つたのである。

曾て耕地の増加に就て恐慌あるを憂ひ注意を與へたる人ある

も、耕作熱の盛んなる時には到底其熱度を冷却せしむる能はずして、遂に今日の如き状態に陥りたるは返すくも残念なる次第と云はねばならぬ。今一つ注意すべきは先にも話した通り、品物の善良なるものを選びて市場に出すことである。吾れ々が買手の位置に立つて考へるならば、未熟なるもの若しく腐敗したる惡品に對し如何なる評價を下すであらう。耕作者諸君は成るべく自ら買手の立場より判斷し注意するに非ざれば、フロリン苺の信用を全く失墜するに至り、將來白人が日本人を見る感情にも大なる影響を及ぼすことになるのであります。

聞く處によれば、櫻面都にて發行するビー新聞に、此頃當地の苺に對し非難の聲を擧げ、殊更日本人が摘採とパッキングに注意せざることを攻撃した文が見えたが、余も昨年以來苺のことは素人ながら實地に見聞し、又オープンハイム等の仲間商より聞き、老農より聞き取りたる結果世評並びに新聞の記事は事實ならんと察する次第である。若此事柄をして事實なりとせば折角今日迄得たる名譽と信用とは一時に失墜するに至らん。是れ他のことに非ずして己の頭上にかかる問題で、一人の過失は全般の名譽に關係を及ぼすことなれば各自は此點に就いて反省せられんことを切望する。昨年も余が諸君の招待に應じて當地に來たりし折も、フロリンのために今年の如き恐慌あるを憂ひ其恐慌に對する準備として、フロリンの日本村を堅固に建設する方法として、御互に同盟を盛り立つることに協力し、同盟よりは然るべき人に依頼して處理せしめ、一方には市場の模様を

觀察し販路の擴張に就いて、諸君に注意を促せしことあるも、今日まで諸君が、之を樹立するに至らずして止みしは残念至極である。

要するに、諸君が今回の恐慌を避けんとすれば同盟によりて、各自の執るべき方針を定むるが第一である。

諸君、御存知の通り支那人は金儲けの民族としては世界に及ぶ者が無い。彼れ等は商賣にも巧みで労働にも忠實の美風を有しているから成功する者が多い。然し此れは經濟的成功者であつて彼等に依つて組織さるゝ國家は如何様であるかと云へば、常に各國の背後に附随するが如き薄弱なる國家である。是れ即ち彼れ等が個人的成功の秘訣を知りし居るも、未だ國家と云ふ觀念に乏しくして共同の意志なき結果と云はねばならぬ。

日本人は是に反して政治的に共同一致する。美風に富んでいて代りに一時に激して其針路を誤る弊習を帯びている。言葉を換へて云へば一時に熱し易くして一時に其熱度が冷却し易くして一時に其熱度が冷却し易い處は最も注意すべき點である。

日本國は愛國の至誠に富める國民によつて組織せられ、東洋の先進國として世界に雄飛すべき位置に發したるは、御互海外に在留する國民の顧むるべき處である。我が日本國家が如何に強大でも我々海外に在るもの團結の觀念に乏しければそれは片輪の進歩と云はねばならぬ」云々

右の演説は當今に於ける耕作者に向つて尙新しき警告である。

〔日米〕 No. 9059 January 23, 1925)

(一三三)

借地時代より土着永住時代へ(七)

オクスナード労働騷擾始末——(一)

明治三十六年、ベンチュラ郡オクスナードに於て日墨労働者の大紛擾が起つた。此の事件は労働界紛争として空前の出来事であつた。三月十八日余は新國民社を代表して、安孫子久太郎は日米社を代表して紛擾地に急行した。事の顛末に關し、余が主宰せる「新國民」は左の如く報じている。

「加州ベンチュラ郡オクスナードは太平洋を距ること四哩、南加州の名都ロスアンゼルスを距る約八十哩、北西に位せる處にして土地膏肥、氣候温和の一大農場たり。アメリカン・ビーツ會社は夙に此の地方がビーツ耕作に適するを看破し四年前に製糖所を設立し同會社々長オクスナードの名を取りてタウンの名称となす。爾來僅々たる歲月の間にオクスナードは長足の進歩をなし、商店、銀行、ホテル、學校、教會等社會必要の設備に缺く所なきに至り、此のタウンを取圍める農園は縁をのべたるビーツ園と化し、頗る殷盛を來せり。凡そ加州に於ける太平洋沿岸はキャストロビル、サリナス等を初めとしサンタマリア、チノ、オクスナード等一帶の耕地は砂糖ビーツの耕作に適すれど、オクスナードを以て最良の耕地



となす。現今アメリカン砂糖會社の支配するビーツ耕作反別は凡そ二萬エーカーに上り、昨年及び一昨年の平均を見に一エーカーの油面より十二噸のビーツを産出したり。此の平均は或る區域が早魃して全く收穫を失ひたる處あるも、加策したるものにては一エーカー三十噸以上を産出したる事實あり。以て如何に同地方がビーツに適する地なるを知るべし。

オクスナードが砂糖ビーツを耕作し始むる頃は、南部の事業家は人口稀薄のため労働者を得るに窮せる時なりければ、農園に働くものは少數の支那人を除くの外重にメキシコ人を雇ひ入れて耕作收穫の仕事を受けさしめたりき。オクスナードも亦多數のメキシコ人の耕地を占領して労働に得事し、後來はメキシカン・コロニーと成るべく思はしめたりしが、今より三年前、日本人干濱一郎、馬場小三郎、徳山民助、大友平三、猪瀬伊之助、時田小次郎、寺澤六之助等の諸氏耕地を受負しより漸次日本人の此地に來るもの増加し、次いで一昨年より年々多數の日本人來集して耕耘の業に従ひ、會社及び園主の信用を高め、メキシコ人を駆逐して労働の覇を樹つるに至りたり。今年（三十六年）二月同地に於ける各國労働者の比較を示せば大凡左の如し。

日本人……………六百人  
メキシコ人……………三百人  
支那人……………百五十人  
白人……………百二十人

右の内白人は重に馬使ひ其の他の雜業に従ふものなれば、ビーツ耕作に就いて多くの注意を拂ふに及ばず。

オクスナードの現勢は右の如くなりき。而して今回の紛擾を叙する前に於て其の一方の相手たるウエスタン・アグリカルチュアル・コンツラクト・コンパニー（西方農事受負會社）の性質を略述すべし。

#### ▲西部農事受負會社

一昨年の秋、資本金五萬弗にてオクスナードに一個の農業受負會社起りたり。これを西方農事會社となす。社長にはマッキンス氏、會計にはホースター氏、監督にはグレー氏、耕作部支配人には猪瀬伊之助氏を以てしたり。（中略）

今猪瀬氏が同會社の一員として關係せる由來を語る時は、同人に對する誤解も自ら氷解せん。而して猪瀬の位置をも併せて了解するに至るべし。

〔「日米」No. 9142 April 16, 1925〕

#### （一三四）

借地時代より土着永住時代へ（八）

オクスナード労働騷擾始末——（二）

#### ▲（西方農事受負會社の續き）

今より四年程前、サンパナデナ郡チノ製糖所に一人の日本人料理番として働けり、之れを猪瀬伊之助となす。當時チノ及び



オクスナードに於て米國製糖會社は盛んにビーツ耕作を奨勵し耕區の増加すること年々著しき者なれば人夫を要すること急なり。當時支那人、メキシコ人の此地方に勞働するものなりと雖も、支那人は耕作の作業遲滞して園主に満足を與へず。メキシコ人は飲酒亂暴して責任を重んぜざる國民なれば、一般の園主は日本勞働者のビーツ耕作に適するのを傳聞して、何とかして之を使用せんとし、之を猪瀬に計りたりしに、猪瀬は此時より日本人を使用して受負に従事せんと計畫を立て二三人の有志を計りて、チノ及びオクスナードに耕作を受け負ひたり。然れども其の當時は南加州に多くの日本人勞働者を得る能はず。且當年天候不良なりしが爲め、彼らの事業は失敗に歸したり。然れども此事業の全く望みなきにあらざるを以て、彼は是れ迄の同志と手を斷ち三四の白人と謀りて遂に一昨年秋右西方農事受負會社を設立し、彼は日本人夫を供給するの役目を以て社員に連らなり、昨年春より受負に取り掛り、五六千英加のビーツ園を耕作したりしが、彼れは舊來交際したるボースと手を経ち白人の側に立ちて利を得んとしたる行動は端なくも他の日本人の惡感を買ひ、この時より猪瀬は日本人にあらずなどといふ嫉妬を受けたるにかへて、彼れの性質は人と和して親交するの雅量を缺き、動もすれば虚言を構ひて一時を瞞着するの惡癖あれば、オクスナードに集まりたる無數の小ボースは、猪瀬を見ること日清戦争當時の支那人の如く卑しめ、折りにふれ事に當りて彼れの事業を妨害せんとする者多かりき。斯くの如き不人望

の日本人監督を以て、受負事業を完成せんとしたる西方農事受負會社こそ災難といふべく、氣の毒とも云ふべく、また不明とも評すべし。

## ○

斯くの如くにして第一着の事業たる西方農事受負會社のビーツ受負ひの損失を以て昨年を終り、次いで社長プライソンは他の犯罪事件ありて拘引せられしかば、西方農事受負會社は其の組織を改め資本金を十萬弗とし昨年秋社長以下書記に至るまで悉く別人を以て此會社を運用すべく改造され、猪瀬一人は舊の如く日本人勞働者支配人として収容されたり。凡そ人夫を操縦して或る契約を實行する受負事業にありては、其の主要なる點は資本に非ずして勞働なり、金の運用よりも勞働の運用なり。如何に巨萬の資本を積立てて簿冊を明かにするも、肝心なる勞働者が働かねば成功を得らるべきにあらず。然るに西方農事受負會社はこの人夫を操縦するの秀才を求めずして、資金のみを増加したるは事業の性質を了得せざるものにして、猪瀬が自己の力量に徳望とを考慮せずして金力萬能なりと計算せし手腕不相應なる位置に身を置き、日本人の事業を知らざる西方農事會社の重役に損失を葬らしめたるは其罪輕からずと云うべし。

若し猪瀬にして日本人勞働者の氣合を呑み込み無數の小ボースの感情を熟知し、一面には金力を利用し他面には日本人の信用を繼ぐに努めなければ決して今回の如き紛擾を惹起せず。オクスナード日本人勞働者は永遠に同地の信用を博し利益を得た

りに、小人目前の小計を弄して遂に不慮の混亂を招くに至る。誠に慨嘆すべき事共なり。

○

西方農事受負會社は右の如く資本を増し役員を改め、猪瀬をして日本人労働者を監督せしむるの役割確實せるが、同會社は猪瀬の勧誘により、タウンに一個の雜貨店を設くる事になり、農園の労働者をして其雜貨店より食料其他を買はしむるの方法を立てたり。

此計畫は面白さうなものなれど、嫉妬心の熾なる日本人には頗る誤解を招く方法にして、西方農事受負會社が之れが爲めに如何に攻撃の口實を反對派に與へたるかは後にぞ知らるゝなれ。

さて西方農事受負會社は今年度の受け負い事業に取掛り、先づバットン園と稱する大園二千英加を始めとし、去る三月初旬まで大約六千五百英加の農事を受け負ひ之を三浦清他數名の下受負ひ人に受け負はしめたり、これぞ今回の大擾亂を來す濫觴なりとす。

〔日米〕No. 9143 April 17, 1925)

(一三五)

借地時代より土着永住時代へ（九）

オクスナード労働騒擾始末——（三）

▲日本人労働大会の成立及び其の性質

西方農事受負會社が今年度の受け負いに取り掛り猪瀬伊之助の指揮監督の下に下請負人の選定するに當り、やゝ氣概のあるボースは西方農事受負會社の下に下受負するを屑しとせず、他の園主と直接に契約して業を得んとする傾向ありて到底相和する見込みなしと豫想せる。猪瀬は三浦清といへる同胞には多少のビーツ仕事の経験ある者に、バットン園の幾部を下受負せしめたり。三浦が受負ひたる値段は何程なりやは商賣の祕密に屬するを以て吾人の正確に知る能はざる處なれども、一エークルに對し三弗七十五仙より四弗までの間にて下受負を約束し、西方農事受負會社は一エークルに付き五十仙以上七十五仙までの手數料を僅シンニングの仕事に於て徴収したる事實なるが如し（其の後契約も紛亂のため多少の修正を加へられたりと噂す）。當時オクスナードに於いては日本人労働者の集るもの多く、仕事の割合に比して苛刻の労働者詰めかけ居たるにも拘らず、三浦清は此の手身近なる労働者を雇入るゝを好まずして、遙々と四百哩を隔てたる桑港に出張し各旅館に依頼して百二十名の労働者を募集し二月十七日出帆のラモナ號に搭載し之れを農園に入れたり。三浦が労働者を募集する口約に曰く、労働時間は十時間にして日給一弗五十仙なり。給料支拂は二週間毎にして労働者より手數料を徴収せずと。

斯くして連れて來りたる労働者を就業せしめたるに多數の労働者はビーツ仕事に慣ず、中には桑港にて浮浪せるゴロツキも交り居ることなれば、仕事より文句が上手をいふ有様にて、一

エークル三弗内外にて受負たる仕事が此の割合にて押し行かば六弗以上も費す計算になれば、三浦も大に苦しみ茲に労働時間十一時間にして日給は一弗四十仙なる旨を申出たりしかば、労働者は大憤り、約定を無視せり、二枚舌を使ひたりと叫び、同行者監督山口彌太郎、秋山良之助の二名をして交渉せしめたれども、議遂に熟せず、八十餘名の労働者は山口、秋山を首脳として農園退くに至れり。次いで兩名の署名を以て新世界、日米紙上に「無法欺瞞の惡徳ボス」と題せる違約の顛末を記し三浦を攻撃せる一文を公にしたり。これぞ労働大會成立の發端なり。

## ○

山口、秋山が率いたる八十餘名の労働者はオクスナードのタウンに引き揚げ、三浦清に向つて怨恨を吐き、何とかして復讐を企てんものと茲に正義團なる名稱の下に反抗の旗幟を擧げたり。然れども彼等は桑港より募集に應じたる労働者にして悶着の爲めに碌々働かずして農園を引き揚げたる連中なれば、固より貯金などのあるべき筈なく今日の糊口にも窮する有様なれば、如何に反抗の意熾なりとはいひながら、何事をも爲す能はざる状態なりしが、この正義團中の某士はオクスナードに設立しある大和俱樂部と稱する重に博徒を以て成立せる會合を説き之が援助を乞ひて其の同情を動かし、辻演説、ビラ廣告等の手段を以て、知らず識らずの間にオクスナード日本人間の問題を變ぜしむるに至り二月二十一日、日本人労働大會と稱するもの

を産出し發會式を舉げたるものなり。

## ○

労働大會は其の名の命ずる所より觀る時は如何にも労働者の利益を保護し、其權利を増進するべきか如くなりと雖も、豈計らんや此の労働大會の始めは労働者の憤慨より起り、終りはボスの采配の下に操縦され、随つて、半は労働者の權利、半は受負人ボスの利益との同盟となりけることこそ面白くまた味ある研究なりとす。

凡そ労働者の利益はビジネスを離れて唯々多數の給料を得るを以て要義とし、受負者は、なるべく安直の労働者を勉強せしめてビジネス的利益を収むるにあり。此の間の調和を得るは頗る重大の事柄にして今日社會問題を研究する學者、經濟を専攻する識者の難問題なるに、オクスナードにある日本人は學理にも研究にも意を用ひずして一朝にして此の問題に實地に演出せるは吾人に取りて如何ばかり多大の研究目錄を與へたるよいざらば此労働大會の内容は今少しく細密に分解し、而して其動機に立入りて研究を重ねべし。

(「日米」No.9144 April 18, 1925)

（一三六）

借地時代より土着永住時代へ（十）

オクスナード労働騷擾始末——（四）

▲同志會が労働大會と一致の運動をしたる動機

労働大會の内容を審にせんと欲せば、同志會が之れに加はりたる動機を説明せば自ら了解すべし。前にも述べたる如く西方農事會社及び之れが役員として重きを置かれ居る猪瀬伊之助は、オクスナードに於ける日本人ボスとは仇敵の如き關係あり。昨年同志會の發起せられんとするや、同志會の某々等は猪瀬に向つて同志會に加盟し一致の運動を求めたり。此の申出では猪瀬にとりては好機會を利用して白人資産家にも満足を與へ日本人ボス間の調和も出來、受負事業は圓滑に進行すべかりしに、同志會を輕侮せるか他に事情あるか審らかならざれども其要求を拒絶したり。同志會の人々何ぞ快よき事あらん、是より猪瀬は日本人にして日本人と手を携へず、白人と組みて私利を貪るの非愛國者なりとの誹りを受け、受負人を以て成立せる同志會は猪瀬の事業に妨害せんとの根底を築きたり。然れども西方農事受負會社は資金のあるのみならず、園主の信用は他のボスよりも、厚く到底之れに競争するの力なかりければ猪瀬派の下受負をなせる三浦が今回の失態を山口、秋山の兩名より聞き、奇貨措くべし。西方農事會社……猪瀬伊之助と競争して勝は此時なりとなし、山口、秋山が率いたる正義團と合同して

茲に日本人労働大會の名稱の下に左の如き宣言をなしたり。

一、西方農事受負會社は日本人労働者を苦しめ不正の利益を壟斷するものなれば之を倒すべし。

一、猪瀬伊之助は己日本人でありながら日本人の缺點を白人に告げ以て私利を計るものなり。

一、西方農事受負會社の下に働くものは二重のコミッションを徴収され且高價の食料を會社の商店より買はざるべからず。

一、要するに西方農事會社を倒さざれば日本人労働者は其利益も權利をも蹂躪さるゝものにして忠君愛國の精神ある同胞は労働大會に集まるべし。

見るべし。其の云ふ所に組織なく、其の會合の雜駁なることを。然れども多くの労働者は同胞といふ事、利益といふ事、忠君愛國といふこと、西方農事會社が西洋人の成立せる會社等なり。事物の研究をなすべき頭腦に缺けたる悲しさには其鼻息の荒きをビラの廣大と、蠻勇の盛大なるに幻惑し恰も火事場にして人氣の立ちたるが如く昂奮し氣の弱き労働者は唯だアレヨ／＼と人の手を望むが如き感に打たれたるなり。

されば労働大會は其の原動力としては桑港より勢集されたる八十餘名の正義團が三浦に反抗する爲めに起こりたれども、これに油を添へ力を與へたるは大和俱樂部と及び受負人の集合たる同志會にして、其の内容の雜駁なるは言ふまでもなく、其主義の一貫せざるも亦當然の結果なりとす。

○

抑も日本人にして労働大會に似寄たるものを擧ぐれば、バカビルに労働同盟なるものありしと雖も未だ他の會社を妨害し或は同盟以外の者を脅迫したるものを見ず。故に今回の労働者大會は殆ど白人間に行はる、労働同盟が同盟罷業をなせると同性質の如く思惟する人ありと雖も、それは未だ實質を知らずして形態に眩惑せる客相の觀なり。若し正義團と稱する三浦に對する不平連が、一致結合して農園に罷業せるものならば、純粹なる労働同盟とも罷業とも目ざる、なれ、己はタウンの客となりタウンにある労働者以外の俱樂部と結合し受負を以て業とせるボスと連合して其指揮監督の下に働く上は、其性質上飽迄も労働同盟といふべきにあらず。若し強て其名の命ずる處を捕へて説明せば、請負人が労働者となり下がりたりといふべく、左も無くば労働者が受負者と商賣がへをなせりといふに歸すべし。此解釋は今日の労働大會が甚だ忌み嫌ふ處にしてドコ迄も労働者のユニオンと解し、正義人道を説き、忠君愛國と附和するに努むるも、天下の道理と學問の進歩は斯かる筋立たぬ理屈を跋扈せしむるものにあらず、かならずや其の破綻の狀況を看破せらるゝに至るものなり。

〔「日米」No.9145 April 19, 1925〕

(一三七)

借地時代より土着永住時代へ(十二)

オクスナード労働騷擾始末——(五)

#### ▲労働大會設立の趣意

今や世界至る處として人種的憎惡の激烈なるを見ざるなし。是れ眞に生存競争の状態なるを免れざる也、見よ現に在米同胞の如きは農に商にあらゆる方面に於て彼等白人の排斥を蒙りつゝあるにあらずや。彼等が唯一の手段して常に操縦しつゝある萬金政略は實に吾同胞の利益を阻害し權利を壓倒して止まざるなり。

由來大和民族は忠勇愛國の氣慨に富む此緩急に際し如何でか逡巡黙過に付せんや須く左袒奮起して以て同胞の權利を伸張し利益を増進するの期圖せざるべけんや、是本會を設立せし所以のものなりとす。

西曆一九〇三年二月

日本人労働者大會

第一條 本會は同胞の權利を増進し相互の權利を保持するを以て目的とす。

第二條 本會を日本労働者大會と命名す。

第三條 本會の本部を加州ベンチュラ郡オクスナードに置く。

第四條 本會は本會の趣旨を賛同したる日本人労働者を以て組織す。



第五條 本會會員は互に信義を重んじ不慮の災厄疾病に罹りたる時は充分の保護を與ふるものとす。

第六條 本會は其責任を重んずるを以て個人運動のために命名を濫用すること許さず。

第七條 本會の目的を達せん爲めに左の役員を措く。

會長一名、副會長一名、書記三名、會計三名、評議員十二名。

第八條 本會々長は本會役員を統率し本會の事務を總監す。

第九條 副會長は會長を補佐し會長の事故あるに際し會長の事務を掌る。

第十條 書記は本會の庶務を執るものとす。

第十一條 會計は本會の庶務を擔任し總會に於いて決算報告の責を有す。

第十二條 評議員は臨時の事項を討議し會長を補佐し必要の場合に應じ本會の雜務に従事す。

第十三條 本會の役員は委員會に於て選舉す。

第十四條 本會役員の任期を六ヶ月間とす。

第十五條 本會役員は凡て無報酬たるべし但し本會財政の許す限りに於いて多少慰勞する事あるべし。

第十六條 本會役員の選舉法は普通選舉法に據る。

第十七條 本會の會議を分ちて左の二種とす。

總會及評議員會

第十八條 總會は毎六ヶ月一回を開き本會の消長に關する重大の事項を討議し本會事務の報告をなすものとす。但し必要の

場合になつては隨時總會を開くことを得。

第十九條 評議員は臨時の事項を討議し會長の要する場合に於て臨時に開く事を得。

第二十條 本會に入會せんとする者は何人たりとも加入することを得。

第二十一條 本會役員にして退員せんとするものは其の理由を具申し會長の認諾を乞ふべし。

第二十二條 本會はその目的を達せんがため通常經費として毎月十仙を徴収す。

第二十三條 本會は最も緊要なる場合に應じ臨時に財源の要求をなすことあるべし。

而して役員を選定するに當り左の諸氏當選したり

會長馬場小三郎 副會長山口彌太郎 書記岩崎昌祐 同秋山

良之助 同池田勳旭 會計徳山民助 同並木藤吉 評議員時

田小次郎 栗栖友吉 秋山良之助 池田勳旭 千濱一郎 武

田菊次郎 並木藤吉 田中治三郎 大友平藏 吉成久八 小

島卯三郎 八木捨吉 井原寅一 太田周一郎 渡邊市太郎

島田新作 山根吉雄 宮野信吉

〔日米〕No. 9146 April 20, 1925)



(一三八)

借地時代より土着永住時代へ (十二)

オクスナード労働騒擾始末——(六)

労働大會はその趣旨書を公示し規則を制定し役員を選定し、以て西方農事會社に反抗せんとした演説に廣告にその氣焰を高めたりといへども、最後の方法は労働者を農園に働かせざれば何等の得るところなきをもつて如何にせば農主と契約し労働者間に公平の分配を行はんかとは直ちに起こりたる難問題なり。労働大會の役員は以爲めらく公平の分配は大會の名の下に契約するにあり個人の受負は分配を私するものなりと因り三月六日、左の決議を爲したり。

仕事受負擔當の外は個人的に仕事の受負を爲さざることに決議す。大會の名目をもつて受負をなしたる仕事は公平に分配するものとす。

この決議に次いで評議員は仕事受負擔當員を選定し左の諸氏委員となる。

島田新松、武田菊次郎、太田周一郎、井原虎一、渡邊市太郎、  
時田小次郎、干濱一郎、大友平藏

労働大會は斯くして農園に手分けして受負をなさんとし、一方の西方農事會社には一人たりとも人夫を供給せしめざるのみならず、當時バットソン園に残留せる労働者を大會に加名せしむるの運動につとめたり。

△労働大會と日墨人同盟の騒亂

労働大會が西方農事受負會社に反抗して立たる経路は前述の如くなるが、サテ大會に於て受負をなすに方りて何程の價格にて受をなすべきやとの問題起り、結局一エーケル間引仕事に對して金五弗以上にあらざることにし、この五弗の内五十仙は大會の費用として引去り残り四弗五十仙にて労働者を働かしむることに決したり。斯くも總ての方法を定めたれど、第一の目的たる西方農事會社を倒すには如何にすべきや、労働者は獨り日本人のみにあらずメキシコ人なる我等に取りては強大なる敵あり、このメキシコ人にして西方農事會社に働く時は獨り同會社を倒す能はざるのみならず折角團結したる日本労働者は労働地を失ふの危険あり、これによつて大會はメキシコ人に説きて同盟をつくらしめ同社長エビヒサノ氏に交渉して茲に二月二十三日日墨労働同盟を成立したり。日本人労働者が單に西方農事受負を倒すの目的よりすれば、この手段は甚だ巧妙にして戰略を得たるものといふべしといへども、深く將來を考窮し日本人永遠の大策を講ずるものはその手段の經忽なりしを悲しむるに至るべし。

○ ○

日墨労働同盟は單に西方農事受負會社を倒すために結ばれるものにして永久に利害を共にするの同盟の條件は(一)西方農事會社には一人たりとも働かず(二)今後農業の受負する時は一エーケル五弗以上たるべしとの二大綱目に外ならず。吾人を

して外交的批評を試ましめば、この日墨同盟は相互の利用にして墨人は年々當地方に勞働區域を日本人に縮小せしめらるるをもつてこの機會を利用し一時日本人に利用せられ同盟の勢ひをたぐりてもつて勞働區域を恢復せんと謀りたるものを見るも不可なりけん。假りに墨人同盟は右のごとき外交策によりて今回の同盟を甘諾したるものにあらず。まったく西方農事會社の行為に満足せずして同盟せるものとせる日本人と同盟したる報酬として従前よりもその勞働區域を擴張し得るは何人も疑ふべからざる事實なり。

○ ○

日墨同盟は結ばれたり。西方農事受負會社は倒さざるべからず。茲にいたりて、この同盟は極力なるボーイコット（營業妨害）を西方農事會社に向つて開したり。その第一着として左の廣告文を日米、新世界兩新聞に掲載し、ついで農園に人を派して現時西方農事會社の下に働ける日墨人を罷業せしめ大會に引付けんと努めたり。その廣告文に曰く

今回我等同胞勞働者とメキシカン勞働者が一致聯合し相互の權利と利益を保持せんがために西方農事受負會（俗にウエスタンコンパニー）の下に一人たりとも働かざることに決議契約せり。うはさに依れば、該會社は周章各地へ甘言をもつて周旋を誘ひ同胞勞働者當地に向け送らしむる手段を取りつゝ、あると、此の際同胞勞働者は斷じてウエスタン會社に働くの目的もつて來ること無からんことを警告す。若しこれに反し

て來るものは本會の決議に違反し同胞の利益を侵害するものなるをもつて此の際大いに應募者諸君に注意を促すもの也

オクスナード日墨人同盟勞働大會

（「日米」No.9147 April 21, 1925）

（一三九）

借地時代より土着永住時代へ（十三）

オクスナード勞働騷擾始末——（七）

勞働大會のボーイコットの運動は周知にして激烈なりければ、西方農事受負會社は現に耕作を始めし農場に人夫を増雇する能はざるのみならず、現に就働せる勞働者も之を奪はるゝ恐れあるを以て、警察の保護を受けて不時の來襲に備たりしが、三月初旬パッソン園に遊説に出掛けたる勞働大會の委員は夜中殆ど死を決して同園に入り、以て勞働者を引揚しめしを手始めとして、日となく夜となく西方農事會社の耕地に妨害を與へ人夫を立ち去らしめたり。此のボーイコットの運動は日本勞働者のみなりせば、未だ續行を逞ふること少なかるべしと雖も、メキシコ人の如き壯悍なる性質を帯びたる人種の同盟あるが故に、三月二十一日夜に於けるパッソン園に襲撃せる行動の如きはメキシコ人先陣をなし武器を携帯せるを以て、キャンプを警護せる警官其他の番卒も皆短銃を以て強迫され人夫を捨てて逃走し勞働大會派の思ふがまゝに振舞はれたり。

(此事件は、西方農事受負會社派の憤慨を買ひ翌日二名の大會派委員は告訴されたり)

○

西方農事受負會社は右の如く極端なる妨害を受け、警官の保護も功なく、他より人夫を得るの道窮し其受負ひを履行する能はざるの難境に立ちながら尚大會を輕んじたり。當時猪瀬は思へらく、日本人勞働大會は無資産の徒が勞働者を煽動して成りたつものにして、久しからずして瓦解の運命にあるものなり。

我等は其の破綻に乗じて受負ひを完成すべしと。然るに何ぞ計らん大會の勢力は一日一日と猛烈にして到底此のまゝにては事業を進行する能はざる有様なれば茲に幕下の者と謀り、中立派と稱する一隊を組織し、此中立派は西方農事會社にも屬せざるが如く装ひ以て契約せる農園に人夫を收容せんとしたり。此手段は頗る陰險なる手段にして若し其内情を大會に看破さるゝに於いては一層の反抗を受けべきものなりき。果然中立派が人夫を募集せんとするに當りて大會を早くも其手段を看破し命を四方に傳へて之を警戒したり。此中立派なるものはオクスナードに集まりたる浮浪の徒にして博徒多かりければ、人夫を引出すに際し不慮の妨害に備へんため、二十餘挺のピストルを用意しスワといへば勞働大會派を射撃せんと企て、時は三月二十三日午後二時中立派と稱する猪瀬派は馬車を白山料理店の前に寄せ同店二階に宿泊せる勞働者を誘引して馬車に乗せんとするや、大會派の側より二十餘名のメキシコ人之を遮り圍み大會派の委

員と中立派の一人と問答せる中、何れども分たず一發のピストルを放ちたるを合圖として猪瀬派の浮浪の日本人は携帯せるピストルをメキシコ人目かけて亂射したり。

メキシコ人は固より各々ピストルを携へ居たれば之に應じて亂發を始め、其間大凡一分間百餘發のピストルは亂發せられたり。この亂發は敵と味方も分ちなく同志打にありたりといふ。メキシコ人一名は即死し二名は負傷し、日本人に二名の負傷者ありき。(此戦争の實況は記者鷺津の目撃せるものなり) 戦争！戦争！の叫びは勞働大會の方より響き、メキシコ勞働同盟事務所の面前には五六十名のメキシカン武器を執り整列し支那街の商店は戸を閉じ、タウンの人々は不安の相貌に現し殺氣滿街に充ちて醒風愁たり。此騷亂に如何に勞働大會殊にメキシカンの感情を激發せしよ。「西方農事會社は無頼の惡徒を買収して大會を狙撃せり」「猪瀬は暗殺黨の力を日墨人を銃殺したり」との絶叫は大會の口實となり、猛獐なるメキシカンは猪瀬派と見れば、何人の容赦なく銃撃して以て其同胞の死靈を慰めんとその運動を始めたり。事情斯くの如く成ては警察の力より外に之を制する能はず、オクスナードの天地は暗雲慘澹として只武器を懷にせるメキシカンが猪瀬派を狙撃せんと狂ひ廻るを見るのみなりき。

〔「日米」No.9148 April 22, 1925〕

（一四〇）

借地時代より土着永住時代へ（十四）

オクスナード労働騒擾始末——（八）

◆兩派委員の派遣と仲裁者の苦心

二十二日の兩派戦争の前に、労働大會は宮野新吉、秋山良之助を、西方農事會社は片岡、三浦の兩名を桑港に派して當事件の因つて起りたる由來及び其行動を桑港領事館及び新聞社員等に陳述せしめたり。蓋し兩會の意は此の問題の如何に世人に解釋され居るかを聽かんが爲めなり。『新國民社』及び日米社は此の事件解釋を試むるには、實地に臨まざれば誤解あるべしとなし、遂に三月十七日新國民社は鷺津を、日米社は安孫子久太郎氏を特派したり。兩氏が現場に至りて調整せる所を以て今後の趨勢を推すときは兩派の衝突は極點に達し血を流すの悲運を見ざれば止まずと看取したれば兩派の間に往來して調停の策を講じたりしも西方派は大會を輕蔑し、大會は西方を倒し得べしと確信し、相方とも交譲の意なかりしのみならず、動もすれば邪推嫉妬の其間に生じて、偶大會派中温和の説を持せる役員等も自派内の疑惑を避くるに苦心せる程なれば仲裁者の運動は頗る困難を極めたり。然るにロスアンゼルスに於ける有志は、オクスナード事件の久しく亂れて解けざるを思ひ、河原、菊地、洪谷の三氏を出張せしめて仲裁の勞を採らしめしも大會は直ちに之れを退け更に聽く處なかりければ三氏は空しく引揚たり。

當時労働大會の議論は「労働大會は正義公道を以て立つものに對して仲裁をなさんとするものは西方農事會社に同情を寄せたるものなり」と。此の單純なる筆法は穉驕たる労働者を率ゆるには必要なる辭柄なりといへども未だ天下の理を盡したるものにあらず。大會中教育あり思慮ある人士は大會が仲裁者に對する無禮を憤るものなりと雖も如何せん騎虎の勢ひを以て進みたる勢力は秩序ある議論と組織ある説明は無用に歸し、一意前方に向つて疾馳せり。オクスナードの委員已に退けられ新國民、日米の兩人施すべきの餘地を講ずるの時、早くも血戦は開かれたるなり。

◆西方農事會社苦しめらる

桑港、ロスアンゼルスの仲裁者は既に手を離して引揚たる後、労働大會のメキシカンは西方農事會社に對し益々猛威を逞ふし、ウエスタンが買収せりといふ無頼の徒を狙撃せんとし辻々に見張りを出し停車場に狙撃者を送り且一方には飽くまでもウエスタンに人夫を送らざるに努めたれば、ウエスタンに屬する日本人通辯、雇壯夫、またはウエスタン派と認められたる人々は或は他に走り或は影を隠して其銳鋒を避くるに至りたれば、農耕に要する人夫は不足を告げ、園主よりは日々契約履行を責められければ、同會社は意を決してロスアンゼルスに至り、メキシカン八十名を募集し之れをオクスナードに入れんとするや、大會はメキシカン同盟會員を停車場に派して之を奪ひて大會の下に引付けたり。莫大の費用と困難とを重ねて連れ來りた

る労働者も西方派には何等の功もなく、遂にバットソン園の契約を取消され損害を徴収さるゝに至れり。

◆労働大會の目的略成る

事情右の如くなれば、労働大會の目的とせる「西方農事受負會社を倒すべし」との一條はや、達し得られたるが如し。之れ大會の利益なるや否やは別問題なりと雖もその目的よりいへば、労働大會は萬歳を唱ふるなるべし。吾人は更に稿を來別して、此同盟の將來及び同盟が白人同盟に加盟したる事、メキシカンと同盟せる事業に就き世の有識者と共に研究を重ねべし。(上之巻終り)

〔日米〕No. 9149 April 23, 1925)

中の巻一

◆各州ビーツ事業の勃興

砂糖ビーツ耕作事業の勃興は前節に述べたが、加州以外の地にも千九百年頃から盛んに當事業が勃興した。特に、ユタ、コロラド、アイダホの三州は驚くべき發展の氣運を促した。

明治三十五年(一九〇二年)ユタ砂糖會社耕作部長ジョージ・オステン氏加州桑港領事上野季三郎氏を訪ひ、日本労働者をユタ州に迎ひたきことを述べた。翌三十六年六月、オクスナード紛擾事件の後西部農業會社々長たりしハーツ氏はユタ州に若干の日本人を率いて同州ガーランドのビーツ耕作を請負ふた。

此の時ハーツ氏と共に猪瀬伊之助、柴田嘉治の諸氏ユタ州に入り。日米勸業社はハーツ氏の紹介によりてユタ州に人夫を供給するの試みをなさんとし社員鷺津文三、皆部梅太郎を視察のためユタ州に派遣した。

鷺津、皆部等はユタ州各地を視察しその有望なるを認めたるを以て労働者を供給するの策を決し、桑港の本社に向け約五十名の勤勉なる労働者を送るべきを打電した。

鷺津はユタ州ガーランドに留まり新人の労働者を待受けた。六月中旬、二宮利作(屏巖現新世界主筆)松本岩松(前デトロンドビーチ日本人農業組合幹事)を筆頭に入つた。私はこれを監督した。これがユタ州農業労働者の先驅である。

日本人がビーツ耕作者としてユタ州に現るゝや同地糖業者の信用を博した。

次いでアイダホ製糖會社も亦勸業社に人夫の供給を求めたので、千九百〇三年六月下旬、同社員寺澤六之助、棚木代吉等數十名を率いてアイダホ州レクスバークに入り耕耘に従事した。これがアイダホ州に於ける邦人農業の嚆矢である。

△米國社界の風俗に就て

六月にユタ、アイダホ兩州の入つた農園労働者は七月中旬までに間引草取の仕事を終り一同ボカテロ市に出で鐵道の仕事に轉働した。二宮屏巖氏はユタ州に入るや否や私と親交の仲となつた。彼は労働者といはんよりは一種の見學者であつた。その時折りの感興に乗じて文書を往復した。二宮氏は同年七月ポ



カテロ市より私に與へた文通に曰く

「アメリカは文明國とのみ思ひしにこの町に来て見候へば醜業婦の群居おびたゞしく之れを日本に比して一層の猛烈さを見る。アメリカの文明は皮相なりとの疑ひを起し候」  
右に對する私の手紙の一節

「アメリカが文明國なりや否やは私の邊に斷じ難き所に候へども醜業婦の多きはその時と場所とに關係あるものと考へられ候。空間的にアメリカを見れば津々浦々、野蠻の氣満ち候が、これを時間的に觀る時は一概に論斷し難きいはれあるべしと存じ候」

○

此の頃アイダホ州ボカテロ市は人口一萬、その八割以上は鐵道工夫であつた。そして四丁四方は賣春婦の巢窟であつた。

ところが、それから十五年後の千九百十三年には市街廓清の政治が施かれて一軒の醜窟をも見ない綺麗なタウンに變じた。

○

千九百四年、私は寺澤六之助氏と共にコロラド州を視察した。外蘭直一氏、農園及び公示の請負ひをなし、木山、高塚の諸氏鐵道及び鑛山に人夫を供給していた。私は諸氏を訪問して交はり訂した。

此の當時デンバー市にはメーン街に次げる大區域には世界各國の賣春婦が群居していた。其の數は三千と稱せられていた。街頭に輕羅を着て遊客を誘ふ光景は實に淫猥を極めたも

のであつた。然るに翌千九百五年には賣春婦は街頭に客を誘ふを禁ぜられた。而してその翌年千九百六年には廓清運動功を奏して此の區域に一軒の賣春婦すら見ることが出来なくなった。すべては時の問題である。

〔日米〕No. 9150 April 24, 1925)

## 中の卷二

### ▲妻君出産のこきと

明治三十五年十月に結婚した私の妻は其翌月頃から變な症狀を屢々私に訴へた。「どうも酸いものが食べたい」といふて見たり、平生の食物がいやになり、變つたものが食べたいといふことをいふ。そして發作的に嘔吐を催す。通じが五日もないといふ。

「胃がわるいんだらう。お醫者様に見てもらつたらいい、」

そこで此當時桑港に開業していた西方朝三という醫者が招いて診察をしてもらうた。西方ドクトルは同縣人でもあり、頭腦のよい人だと思ふたからである。

ドクトル西方は先づ手頸を押へた。これは脈を見るのだ。次いで胸をコツ／＼と叩いた。それから背中の方を叩き始めた。それからお腹を押した。これ等の試験が済んで後に、西方君は「これは妊娠したのだ」といふ診察を下した。

「五日も通じがないといんだから下劑を下さい」と私がいふ。



「サアその下劑といふのが六つかしいので。男なら何でもないが、妊婦にヘタに下劑を飲ませると墮胎するのです。墮胎せずに下痢せしむることが醫學上の大問題です」

醫者よりも政治家に適する西方君はそう講釋して首をひねりながら、處方箋を書いた。妻はその藥を飲んだ。腸の方の始末がついたが妊娠の結果は不明である。

○

私がユタ州に視察に行つたのは、千九百三年の六月であつた。私が同地を切上げて加州に歸つたのは七月中旬であつた。

妻は便々たる腹をしていたが、兒はまだ産まれていない。

「いつ頃産まれるのかね」

「八月頃ですよ」

こんな會話がくりかへされているうち八月中旬に因果應報の理によつて兒が産まれた。オークランドの第五十三街に産まれたから、「王子」といふ名を附けた。王子といふのは王様の子といふのでは勿論ない。王クランドに産まれた娘の子といふ意味である。

○

此時代に於いて加州には公認産婆が一人も無かつた。妻帯者の少ない時代に産婆を本業としている者は無かつたのは、時代の然らしむる處である。現時桑港には五名、羅府には二十一名の産婆がある。桑港の日本人數五千名、羅府二萬餘名と概算して見ると産婆は人口千人に付き一人の勘定となる。

○

妻の産婆は中西某の妻女で舊式ながら經驗があるといふのでそれに依頼し、ドクトルは伊藤竹次郎君を迎ひて洩れなき手當を受けた。無産階級の我々が妻帯することは考へ者であることは後に解つた。併しモー追附かぬ。兒が産まれたのである。

#### ▲鐵道人夫の事

明治二十五年田中忠七がアイダホ州の鐵道に初めて人夫を供給して以來、ポートランドを本據として倉永照三郎、シャトルを本據とし古屋政次郎、築野一太郎、高橋徹夫、山岡音高、橋本養造等グレート・ノーザンに人夫を供給し、また羅府を本據として脇本勤、倉永照三郎共同のサンタ・ヒー鐵道人夫供給、ソートレーキ市を本據として橋本大五郎の人夫供給事業が起り日本人はロッキーマウンテン以西の南北に於いて鐵道に就働する者頗る多くなつた。

明治三十七年は日米勸業社もまたネバダ州リノ市東ワイオミング州グレンジアーまでの鐵道を人夫を供給する事業を開始した。同年秋、オグデン市に事業所を設けるため私は派遣せられて主任となつた。

(註)當時、エス・ピー及びユー・ピーの大鐵道は附近連絡の小鐵道を連結し社長にはハリマン氏を頂きグレート・ノーザンはゼームス・ヒル社長として巨腕を揮ひ、南北相競ふて鐵道の延長を計り、更に銅山王クラーク氏はロスアンゼルス及ソートレーキ間の鐵道を起し、ウエスタンパシフィック鐵道

新たに起り、盛んに人夫の募集したのであった。

〔日米〕No. 9151 April 25, 1925)

### 中の卷三

#### 山中部砂糖ビーツの勃興

明治三十六年、日米勸業社がユタ及アイダホ州に供給せるビーツ耕作労働者は兩州糖業家に満足をあたへた。依つて翌明治三十七年には兩州に蟠居せるユタ、アイダホ製糖會社は日米勸業社に耕作人夫供給全部の請負ひを依頼し新に製造所を増設した。

當時、ユタ製糖會社とアイダホ製糖會社は合併をおこないひ二千萬弗の資本をもつて兩州に製造所を新設したのである。

秋元正規ユタ州、寺澤六之助アイダホ州シユガー、峰島儀一氏同州アイダ・フォールズに派遣せられ耕作の監督をした。日米勸業社の社員はこの當時三十前後の壯年にして事業心に燃えていた。しかし何れも理財の術にたけていない。一言にして評すれば彼れ等は亂世の智謀家であつた。随つて金錢を蓄ふるの志がなかった。

然れども彼れ等は労働者の徳義と風俗謹肅については充分の注意を拂つていた。後年アイダホフォール製糖所長ヒーバー・オーステン氏は同市の商業會議所に於いて左の演説をしたことがある。

「予は日本人と接すること過去二十年に及ぶ。而して日本労働者がアイダホ州に來つて耕耘に従事したるもの其數一萬以上に達せり。斯くの如き多數の日本人當州に入り來りたるに拘らず、未だ惡性質の犯罪者を出したることなし。諸君、予は敢て日本人を激賞せざるべし。しかれども世界各國の労働者日本人の如く婦人に對して道德的守操ある者を見ず。他民族はや、もすれば婦人凌辱の犯罪者を出せり。而して日本人は過去二十年間一人も斯くの如き犯罪者を出さずこれ予が實驗上、特に諸君の、注意を喚起せんとするところなり」云々。

○

新開地に於いて同胞の率先者たらんとするものは、金力萬能ではないけない、道德的生活が指導者の最大條件であらねばならぬ。しかして我加州の田園を開拓せる書生は自己の金儲けを第一、第三にして道德的指導に心をつくした。更に山中部に入りたる率先者もまたこの心掛けが濃厚であつた。ハワイ轉航の無教育な労働者を率ひて兎に角大きな恥ぢも晒さず、労働界の信用を博したことは日本人の素質に尊重すべきものがあるにしても、率先者の用意が周到なりしことを閑却することが出来ない。

○

明治三十七年八月、シカゴ労働大會の決議により日本に派遣せられたるロゼンバーク一行の調査委員は、日本労働者の米國移住を不可なりと報告した。この頃より日本政府は米國渡航の移民に制限を加へ出したので、鐵道人夫の需要を満さんがため

にハワイ在留の日本人を盛んに本土に招待する運動がおこなわれた。毎航五六百名の轉航者は桑港、シアトル、バンクーヴァーに上陸し、排日の氣勢を追ふて濃厚になった。

○

明治三十八年、私は桑港の日米勸業社に歸った。この時、社長安孫子久太郎、支配人鷲津文三、會計佐藤信忠が加はった。

此の當時、日米勸業社は鐵道沿線千哩に工夫二千名を供給し、ビーツ耕作請負面積二萬五千英加、所用耕作者二千五百名に上った。

○

協本西村組がハワイより募集せる勞働者約二千名、日米勸業社の募集せるもの約三千名に達す。

〔日米〕No. 9152 April 26, 1925)

#### 中の巻四

#### 領事の職責に就いて

日本人ほどお調子に乗りやすい國民はない。米國人などは人をお調子に乗せるが自分は決してお調子に乗らない。

米國人と支那人とは似た點がある。此の兩國國民は商賣にかけて世界第一である。彼等の一舉手一投足はすべて商業に徹底しているのだ。

○

處が日本人は支那人を馬鹿にし乍ら米國人を尊敬していた。實の處、支那人も米國人と同様なる商賣人であることを知らない。寧ろ支那人の方が米國人よりも商賣にかけてはエライのである。

○

日本の領事が米國に來る。其人々の素養經歷を調べて見ると大概法學專攻の諸君が多い。彼等は富有の家に生れ米の値段さへ知らずに高等教育を受け、外交官試験の答案に及第した。其人格に尊敬すべきは當然であるが米國の麥の値段と綿の値段も研究するの興味を有たない。豈んや米國衣服の流行、食彩の傾向、嗜好の傾向などを知らんとする志しが無いと思はるゝ。

○

私から見れば領事は一個の貿易事務官である。外國の商業狀態、産業狀態、人情風俗を研究して之れを故國の産業界に報告し、貿易の隆盛を促進すべきものである。領事が外交官のマネをして宴會を持つことは餘り必要でない。領事は出来るだけ派手なやり方を避け實際の商業貿易研究に徹底するを主要の事務とせねばならぬ。

○

今日沿岸某々の領事のやり方を見ると、領事館に蟠居し宮邸を飾り外客を接待するを以て主要なる職務なり心得ている傾きがある。在米日本人の側でも何かの事に就けて領事を引合いに出す。其の自分を忘れかけている領事を在米日本人が監督せず

に、返って領事を日本人の村長か何かのやうに取扱ふのは大なる不覺である。これは賢明なる領事を失職の罪に陥れる第一歩である。

○

其昔、桑港在留民は多く學生であつた。學生といへば人聞きは宜しいが、實はスクールボーイであつた。而して其頃の學生は實に愚にもつかぬ考へを持っていた。其一例は歴代の領事中、桑港學生の非難を受けなかつたのは、珍田と上野であつた。小池が桑港に赴任した頃は既に桑港に學生の社會はなかつた。小商人が領事館を取りまいてオベッカを亂發する時代であつた。自然領事攻撃などなかつた。在留日本人會は此頃に出來た。

今から五年ほど前に太田爲吉といふ領事が桑港に現れ、寫眞結婚廢止の大策を樹てたので在留民から大反對を受けた。實にツマラヌ策を樹てたものであるが、此策は太田一人の策でなかつた。在米日本人會書記長神崎驥一、日本政府のスパイとして桑港に在りし、河上清、大山羅府領事、新任の幣原大使などがフィアモント・ホテルの一室で定めた愚策であつた。

幣原大使赴任の途次、一夕フィアモント・ホテルに桑、羅府兩領事、在日書記長、河上清氏等と會合し寫眞結婚が排日論客の議に上ることを聞く。幣原は米國の事情に通せず、彼等の獻策によりて寫婚廢止に同意す。

後數月、在米日本人會は參事員會を開き寫婚廢止を決議し、

之を一般の外字新聞に公表し、領事館は寫婚の證明を拒絶したり。

○

駐在領事が在留日本人問題に干渉することは有害であつて一利なきは過去四十年以來歴史の證明する處である。其昔、若い書生が領事を攻撃したのは兒供のイタズラであつた。役人が氣にくはぬといふ當時の有志家の心理であつた。然るに現在に於いては役人を利用しやうとする狸の心理が現れて來た。この心理は學生が領事を攻撃した頃の心理と比べて却て惡性を帶いている。

領事君閣下、諸君は決して在留日本人の世話を焼かぬことである。在留日本人には各其本分を盡し商業貿易の調査と意見とを窮むべきである。但し私交は別問として（完）

〔日米〕No. 9153 April 27, 1925)